肉も柔らかく非常に旨かつた。旅館にするつもりが出來なかつたと云ふ其家の欄間には碩子が入つたりして居て可笑しなものであつた。Y氏は室戸に居た時山を追はれて逃げ場を失つた豬が家と道路とを越へて海に落ちたのを見たと云ふ話をした。勿論それも子豬であつたさうである。

新線は大體に於て自動車路と反對の崖を川に沿ふて走るのであるが、所々川を跨いでも居る。此川沿ひの景色の最よい所は殘念ながら高知側でなしに德島側の三好郡にあることを高知から附いて來た人達も認めて居た。

大歩危附近が名高いだけあつて矢張り一番美しい。兩側の山が迫つて高くなり、蒼白い石の起伏する間に青澱む水の靜かなのが其特色である。私は大正六年の春に一度此處に遊んだことがあるのであるが、其時卽寫した松の木が今も變らぬ姿をして崖ふちに立つて居るのを見るのはなつかしかつた。時雨るゝ日の蒼暗くなつた山のところ〴〵に黄色に紅に染まつた樹葉を見るのも美しかつた。

開通した鐵道線路も此邊は隧道がちであるが、其露出するところもみだりに殺風景なコ

ンクリートを見せず、アーチなどをしつらへてなる可く風趣をそこねぬ樣に考へてある。

池田の驛で待つたあとを二時間ばかり乘つた遲い汽車は私達を德島の夜に運んだ。眞暗な川に架けた橋の袂につながれた蠣船に居て見る川の景色は一寸大阪を思はせるものであつた。

銚子の旅

三日間の銚子の旅は可なり風に祟られた。今日は朝のうち少し吹いて居たが、次第に凪いで行つて暖かないゝ日和となつた。それで女夫鼻(突出た崖に穴が開いて居るので「めど鼻」と云ふ所へ女夫の字を當嵌めたのか)を望む海景をどうやら仕上げることが出來た。昨日の風は實に烈しいもので、一寸した崖を小楯にしては居るものの私のに比べてきやしないTの畫架は倒れさうになるし、私の畫面には吹きかける砂が一ぱいに附着するので、如

何に頑張らうとしても仕事を續けることが出來ず、とう〳〵一時間も描かないで中止して了つた。

昨日は夜までかけて一日中吹き通した。風を衝いて、川口に打寄せる高浪を乘り切つて朝勇敢に沖へ出て行つた鰯船も午頃になつて續々引返して來た。

斯う云ふ日は私達も仕事を休んでいゝ筈だけれど、幸ひ宿の川口館から間近くに舊築港事務所の空家があるので、其處の二階の南向の窓から外の景色を寫した。其處は北西を塞いだ室なので、私達は風に妨げられることを免れた。築港の事業は未だ全く終つた譯ではないと聞くが、其建物には水上警察が移つて來るさうで今修繕の工事中である。羽目板を張る大工の槌の響に多少の塵埃は落ちたが、それでも砂が附くのに比べたら何でもなかつた。

南の窓からは無線電信の建物と長い柱とを戴せた明神山續きの丘が左の方女夫鼻まで延びて居るのが見える。一筋の海沿ひの道は無線電信を越えて黒生に通じて居る。其道の兩側は今鰯のしめかすをひろげた蓆で一ぱいになつて居る。或は角形に或は圓形に作られた

しめかすは道の兩側に、遠くから見ると胸壁のやうに列なり積まれて居る。

其かすを壞す男、壞したのを手でほぐして蓆に列べる女達、干し上つたのを俵につめる男達、其俵を運ぶ人達、すべては忙しさうな光景である。午後の美しい陽光に照された蓆の薄黄色に銀灰色の鰯かす、それに働く女達の白手拭や赤い腰卷などが色の變化を添へる。散在する網小屋や鰯を煮る小屋などの黑く塗られた羽目板はまた明るい部分の多い風景を引緊める役に立つて居る。

私達は夜八時半頃に銚子へ着いて直ぐに川口館へ自動車を走らせたのであるが、觀音から先きの段々狹くなる道路の深く掘れた轍に傾く車のなかに居る私達の鼻を先づ打つたのは、わた搾の臭ひに近いものであつた。がそれは鰯を煮たりしめたりして居る其臭ひであつた。と見ると或小屋の中に灯が點いて煙が出たりして居る、それも鰯を煮て居るのであつた。

實際去年から今年へかけての鰯漁は五十年振りとか云ふことで、全銚子が其爲めに活氣を呈して居るのである。四日間位乾さねばならぬ其鰯かすの乾し場即ちほ〻か場が先づ問

題となる譯で、明神山下一帶の網乾し場位ではと一も追つかず、家と家との間の狹い空地をも利用するし、又持主に地代を拂つて畑をも乾し場に借りたりする。農家でも空襲を作らずに畑を貸して居るのが別段損でもないらしいと云ふ。さうして此乾し場は犬吠ぶくにも及んで居ると云ふことで、全く大漁節にあるやうに「あきまもすきまも更にない」のである。昔と違つて今は鰯漁の方法も進んださうで年の内八ヶ月位も漁を續けることが出來る。漁船も機械船となつて沖へ行く時間の節約が出來るからそれ丈能率も上ることになつたのであらう。

考へて見ると私はこれで銚子へ九度位も來て居る。一番はじめは明治三十二年の夏休みに小學時代の友人など四五人連で來た。其時は大新に泊つて犬吟の方へも行つて見たが、或風の強い日に對岸波崎へ渡つて、歸りの船が出ない爲めに餘儀なく木賃宿に一夜を明かしたなどの珍らしい想ひ出もある。其次ぎには三十六年の暮から七年の正月へかけて紫瀾會と云ふ畫の研究團體の同人達と觀音前の吉野屋を根城にして數日を寫景に暮らした愉快な記憶がある。私は其時觀音堂の内部を一枚の水畫に描いたりした。

それから大正二年　春には大平洋畫會の人達と犬吠に遊んだ。これは田端のポプラー倶樂部建設の資金を調達す可　畫會の畫を描くのが目的であつた。私は其時はじめて犬若へ行つた。

次いでは大正六年頼まれた金屏風の畫材を探る爲めに鹿島野へ行く前、門人のSを訪ねて犬若へ行つたことがある。少し日本畫風を交ぜて犬若岩を描いた其時の油畫　變色して駄目　なつて了つた。

川口館と云ふ宿へ初めて泊つたのは大正八年の夏であつたらう。妻と三人の幼女と姪とを伴つて實に曉鷄館を志したのであつたが、驛の人力車夫が其處は滿員だから行つても斷られると謂つて、川口へ案内したのであつた。五つと三つの幼女達に其時宿のうしろの砂濱で貝殼を拾ふことに興じた。明神山から女夫鼻へ行く途中大洋の土用波を見た大阪の姪ははじめて見る海らしい海の姿にびつくりして居た。銚子の夏　朝など寧ろ寒い位に涼しかつたが、歸りの汽車のなかの蒸れる樣な暑さに妻は弱り拔いて居た。

犬吠へは尙水彩畫會の寫生旅行に加はつたり、文化學院の生徒の遠足を宰領したりして

行き、又人から頼まれた海上の日の出を寫す爲めに行つたりした。其最の場合はこれも三月の末客の少い曉鷗館を宿として、朝五時頃に起きては海からの燈る朝陽を其二階から寫した。其後主人の變死した山十の別莊の庭先から燈臺を望む一圖を作つたのも其時であつた。矢張女夫鼻を描きに行つた或曇り日急雨に出會つて馳け込んだのも亦川口館であつた。此宿とは既に可なりの緣故がある譯である。

今度着いた翌日朝のうちはよく晴れて居たが、午過ぎ鹿島の方に當つて妙な雲が出て、あれは降つて居るなどゝ指して居るうちに急に暗くなつて雲が降り出した。川口の海の色は凄い黑ずんだ綠色をなして黑い岸に碎ける浪の白いのが、とんとシャルル・コッテのブルターニュ海景を聯想させるのであつた。

豫定の仕事を終つて驛への自動車が來るのを待つ間、私達はすぐ傍の千人塚とそれに隣る燈明臺とを見舞つた。千人塚には昔から度々の遭難者の靈を祭る塚と碑とが石地藏を取卷いて居る。明治四十三年の春舊曆二月二日の遭難は可なり酷いものであつたらしく碑面に刻まれた人名も夥しい。銚子の川口は實際船人には難場とされて居り、「銚子の川口各自

しのぎ」と云ふ俚言があることを宿の女中から聞いた。しけを食つて難破した或船の乘り人のうち若いのは水に飛び込んで岩に泳ぎ着いて助かつたのもあるに、老いたる船主は船と運命を共にして殆ど骨になつて見されたとか云ふ樣な哀話の數も多い。遭難の際は現場に近いだけにいつも川口館がよく世話をすると云ふ。燈明臺のほとりから瞰下ろされる小さな池に沿ふて一軒の小屋が立つて居るが、それは助けられた水難者の身をあたゝめる爲めの設計であると云ふ。さう聞くと其小屋の姿があはれに寂しいものに見える。

富士百景

百景は無論本當の數ではない。北齋の三十六景位にはなるかも知れぬ。今度人から頼まれて富士の姿を描きに岡の方へ來た、それをきつかけにこれ迄見た富士の種々を想ひ出さうとするのである。

學校の學期末の用事が濟むとすぐに、私は急行車で靜岡へ來た。辻梅に荷物を置いてから間もなく、私は師範のM氏城内小學校のT氏に案内されて大崩れの海岸へ行つた。前に御前崎の燈臺や久能山の方へは伴れて行かれたが、大崩れの方ははじめてであつた。海岸道路が今出來かけてコンクリートの胸壁は既に設けられて居るが、其名の示す通り一方の斷崖から石が崩れ落ちて工事を遲れさせて居るとか聞いた。此處から見る崖と道路と海とを前景とした富士もあるがあまりいい圖とは云へない。燒津の方からならば岩などのある大崩れの景勝に近いと云ふことであるが、道路が出來て居ない爲めにこちらからは先へ進めないのであつた。

私達は其歸りに安倍川沿ひを安倍川橋の上まで行つて、一寸高みにある翠生園の離れから川越しに富士を見る一圖を得た。夕暮近く富士だけが淡紅くほんのりと輝いて、其まへの淺間山も廣い河原も灰色に陰つて居るのが何とも云へないいい調子であつた。廣い石河原の間を細く水が流れるだけでは、少し困るのであつたが、中の島の船山が横はり、それが其一部を水に映して居る爲めに圖の締めくくりがよくなるのであつた。尙其上に岸に生

ふる柳がまだ其黃ばんだ葉をつけて前景にひかへて居るのも亦大事な景物であつた。皆してこれは掘出しものだと云ひ、此家を暗指したT氏を一仲々早いねえ」とM氏は揶揄して居た。それは此溫泉旅館（無論涌かし湯だが）はまだ出來て間がないものだからである。

數年前にも私は一度人に伴はれて此同じ岸の、德願寺山の蜜柑畑から富士を眺めたことはある。生つて居る蜜柑を大きく前景へ出して、其向うへ僅かに見える安倍川と富士とを入れた其圖を私は屢々日本畫に描いた。それはたしか十一月頃であつたらう、其時農家の井戸端に菊の亂れて居るのを見た。

清水港を訪うたのも今度がはじめてである。此頃赴任した稅關支署長S氏の案内で私達は先づ鐵舟寺のうしろ石磴を登つた上にある觀音堂からの富士を見た。天氣と時間との具合ではよく見えることがあるかも知れないが、どうも散文的なので、轉じて瑞華寺へ行つて見た。先づ庭内の蘇鐵とサボテンとの巨大さに驚かされたが、之等のものが旨く前景になるならば、北齋の悅びさうな奇拔な圖になるであらう。「吾人は須らく」の句が浮彫りになつて居る樗牛の墓の邊からの眺めも、丁度圖中に入る櫻の樹に葉か花かがついて居る頃

なら又違つた感じを與へたかも知れぬ。其枯樹の枝振りが私を慢ばせなかつた爲めに、私はここをも早速に辭した。

そこで私達は自動車を日本平に走らせて、其山頂にある日本館と云ふ宿の二階からの富岳の大觀を圖にすることに定めた。家の中からも描けやうとは、先きに水彩畫家のI氏から聞いて置いた。I氏は靜岡縣人である。

其處から見ると富士の右肩實永山から愛鷹へかけての弓なりの線が美しく、左には薩陀峠と興津の山、——清見寺の白塀が見えると人は指すが、視力の悪い私にはそれが見えない——それから彎曲して袖師が濱、清水の市街、右の方、折戸灣迄は畫に入らぬが、タンク位しか建つて居ない埋立、三保の松原の端が見える。

前は茶の木を境界に植ゑ列ねた畠と其間を日本平へ登つて來る自動車路がある。あまり平たくなり過ぎるので、私は一番前に宿の庭先の松の頭を入れることにした。

三保へはS氏から稅關のモーター・ボートを出して貰つて、名も高い羽衣の松と云ふのも見た。其近くにある羽衣ホテルと云ふので、私とTと、丁度入港して居た大連汽船永安

丸の船長A氏とは午食をとつた。これはまだ新らしい旅館　ある。其家からは惜しいことに海は見えない。S氏と一緒にまた別の一と朝を今度は燈臺の方へ行つて見た。燈臺は隨分小さいもので其すぐそばに三保園と云ふ落着いた宿がある。併しこれから濱へ出た處は草の生えた砂地であまり松はない。濱づたひに此半島のはづれの方へ寄つて行くと、松林もあり、飛行機の小屋や漁業小屋、また小さな網小屋、舟などの散らばるのが畫的であつた。私の描く間其處らをうろついて居たS氏は鴉の喧嘩を見た、ひどいことをするもので、其一羽は無殘にも突つき殺されて了つたと云ふ。

若い時私はあまりに綺麗過ぎる富士の圓錐體を好　なかつた。それは綺麗なものに對する一種の反感からであつたらう、寧ろこれを俗視して居たらしい。だから富士の畫を描くことも稀であつた。東京方面の冬は紅い夕陽の空に對して暗く其輪廓を劃する富岳に出會ふことがあり、これは決して甘いとは思はれなかつた。東京の近海、例へば船橋の漁師町のあたりから海を隔てて此壯觀を見ることもある、併し私はまだそれを一度も畫にしたことはない。船橋と云へば其少し先の津田沼に近い耕地の高低の間に小やかな用水池がある

そんな所から一寸覗いた富士を畫にしたことはある。

明治の末頃私は人に頼まれて富士の繪を描く可く岩淵へ行つたことがある。何でも其時は富士川の橋より上に出張つた崖のある所がある。其崖を前景にして一圖を作つた。それは水畫に描いて來て後に大きな油畫に引延ばしたのであつた。

それから今一度はこれも人の頼みで御殿場の富士を描いた。それは早春のことで箱根はまだ一向春めきもせず、而かも雨續　のいやな季節で、私は底倉の宿に無聊な幾日を空しく過さねばならなかつた。十分な日でもなかつたが、私はたうとう底倉を立つて乙女峠―其處には雪があつた――を越えるといい鹽梅に富士が雲の間から其頭を出した。これはしめたと大急ぎで峠を下りて御殿場の枯木の間から見る富士の一圖を作つた。これを引延ばした油畫の行方を今定かにしないが、其時の水畫の下圖は九州のN博士の所藏となつて居る。

日本畫の爲めの圖を求めて富士五湖の邊に遊んだのも、矢張明治の末であつた。吉田に泊つてあの大がかりな門火を見たから、それは舊盆の頃であつたらうか。其後水を落す口

が出來たのであるが、當時はまだ其事がなかつたので、出水が長く河口湖畔の民家を浸して居るのを見た。五湖と云つても私は河口湖西湖と山中湖とを知つて居るだけで、其後もまだ精進本栖の兩湖を知らずに居る、其時私は吉田から山中へ向ふ途中で甲州方面からの夏富士を一枚描いた。尤も其外にも唐黍のうしろに又は葛などのからむ藪だたみを通して富士を望むと云ふ掛軸用の圖を搜しはした。近頃川端龍子君にもさう云ふ趣の富士圖があつた。

籠坂峠を須走に降りる途中私の足を留めたのは寧ろ裾野に咲く薊の姿などであつた。

甲府で見た、冬の富士、それは實に風の寒かつた記憶の今だに失せぬものである。甲府は夏暑く冬寒きを以て知られて居る。何でも私の畫架を立てたのは市の外れの或寺のほとりであつた。それは夕日を浴びた野山の向うに小さく見える富士であつた。

歌人Y氏夫妻等と正月への休みを下諏訪に滯在した間、一日鹽尻峠へ上つて落葉松の枯木の間から諏訪湖を望んだ時、八つが岳を左に富士を右に見ることが出來た。

近く文化學院の生徒をつれて諏訪へ行つた歸りを富士見　寄つたのは秋十月のことであ

つたが、諏訪ではよく晴れて居たのに、富士見は薄く曇つて、蕎ばみ赤らむ木草の葉の向うに辛うじて淡く富士の姿を見得たに過ぎない。

淺川から興瀬へ越す峠の大垂水、彼處からも富士は見える。それも或年學院の秋の遠足であつたが、其時は妻と二兒、それから英人N女史なども一行に伴つた。遊園のやうにしつらつた櫻紅葉のある岡、其うしろに重なる山々の奥に、此時も富士は極微かにしかあらはれなかつた。

併し何と云つても、富士を見る緣の多いのは靜岡縣下の旅である。伊豆から見る富士は賣永山のゑぐれを前に露はにして居るのが疵であるとも云はれよう。

私は曾て畑毛に遊んで、「賣永の噴火のあとをひたむきに見せたる富士は横向の富士」とか、「富士聳ゆ胡粉の刷毛のあまりにも鮮かにして淺はかにして」とか、此山の靈に崇られさうな狂體の駄歌をものした。

長岡は湯の宿の町を歩いただけでは何も見えない。其れを圍む丘へ登らなければ山の姿に接しない。一旦峠を越して三津へ降りれば淡島と併せてこれを望むによい。其三津には

友人Y氏が五松山莊と云ふのを其眺望によい地點に營んで居る。私は其庭内に歌人Y氏夫妻を坐らせて朝の富士をうしろにこれを寫したのであつた。

これはY氏還暦の祝意で描いたのであるが、氏は其後幾何らなく鬼籍に入られたので、これは悲しい記念となつた。

靜蒲や千本松原の富士は綺麗ではあるが凡景、畫家の好む所とならない。寫眞に取り古された所ではあるが、田子の浦の美しさはいつ見ても不思議に嫌ではない。河口ヶ橋のなくなつた今の姿は却つて舊に勝るとも云へる。

正月の或日家族の者達と此處に遊んで寒い西風のなかで辨當を使つたと云ふ珍らしい思ひ出もある。其日ははじめ靜かであつたのに急に風が出たのであつた。

鈴川には尙驛の近くに廣重畫くところの舊東海道の趣を傳ふる松並木と併せて富士を見ることも出來た。

富士驛でも前に一圖を得たことはあるが、正面の姿として裾野の線が綺麗であるにしても、第一に私達を困らせるのは其處に積藁の群以外に適當な前景のないことである。

私はまだ三枚笠などの奇景に出會つたことはないが、曇日にも拘はらず、佐野瀑園のうしろの田圃から望む富士が意外にはつきりし居るのを怪んだら、其晩から大風雨になつたと云ふ經驗はある。それは東海道の松、並木などを根こぎにした數年前のあの秋の大荒れであつた。其時瀑園五龍館の客となつた私、瀧の音に消されて風雨の恐ろしさを翌朝まで氣づかずに居た。

造艦碑

此間宮城師範で水畫の講習を賴まれ、仙臺へ行つたのを機會に、寒風澤に三浦乾也の造艦碑を見た。

講習第一日を終つて精養軒の晩餐に招ばれた時、私は其洋食屋が芭蕉の辻に位置して居るのに因んで、芭蕉の辻のことを可なり早く知つて居る話をした。それは私の父鼎湖が少

時養父の三浦乾也に伴れられて幕末に仙臺へ行つた、其時の紀行が遺つて居り、それに屋根を龍で飾つた四軒の藏造りの向き合つた芭蕉の辻のスケツチが挿まれて居るので、私は幼少から仙臺市の中心に就いて或ることを知つて居た譯なのである。

私自身がはじめて仙臺を見舞つたのは明治三十五年の夏私が丁度二十一の時であつた。其夏は馬鹿に天氣が惡く、松島へ行つた日も雨もよひの曇りであつたと記憶する。其頃芭蕉の辻の龍は二つか或は三つあつたと思ふのであるが、今はもう一つしか殘つて居ない。

其席上尙私は三浦乾也と仙臺藩との關係や、寒風澤に於ける造艦のことなどを語つて、同坐の諸氏に奇しき因緣を感じさせたのであつた。

講習は六月の十三、十四、十五と三日間に亙つて滯りなく行はれ、十六日は閑になつたから、仙臺の洋畫家澁谷榮太郎君の案内で、朝自動車を鹽釜方面に走らせた。同乘者は澁谷君の門下四人と文化學院美術部出身の小原君とであつた。澁谷君の門下中其三人は女子であつた。

道路に工事中の所があるので私逕を載せた車はしばらくの間別のコースを取り、其あま

りよくない路の爲めにスピードを出すことが出來なかつた。それは鹽釜を左にして松島灣外の吉田濱と云ふ所に向つた。私達は丘の上に坐を占めて、波の白く寄せる濱と黄色くなつた麥畑と左から出る崖と、遠くかすむ松島方面の大きな島々を望む圖を描いてから、船着場へ行つて船を交渉し、淺黄色のペンキのまだ新らしい試運轉の發動機船に乘つた。澁谷君は一時迄に仙臺へ歸らねばならぬ用事があると云ふので、其處で私達と別れて來た時の自動車の待たせてあつたのに乘つて獨り歸つて行つた。

松島灣と外洋との境にあたる海は其のいゝ風にも拘はらず相當に波のうねりがあつたがそれでも乘客の誰もが醉ふ程ではなかつた。併し風のある日でゞもあつたら私などは閉口の方である。

寒風澤島は宮古島と桂島との間にはさまつて松島灣を庇ふ處の大きな島の一つである。人の說く所によると鹽釜が發展する前此處は親船の澤山に入る要港で、もと相當賑はつたものだと云ふ事である。

島の間へ入ると海は急に平らな、湖のやうになる。寒風澤へ着かうとする時右側の陸上

に石碑の幾つかを認めて、私の尋ねるのも其中にあるのではないかと豫想したが、上陸して小やかな役場に就いて訊けば果して其最大きな一つがそれであつた。

乾也と云つたのでは知るものもないが、造艦碑と云へばすぐに分つて、役場の者が私達を其場所へ案内した。此邊は一體に蠣の養殖をして居ると云ふことで路傍には蠣殼が堆く積まれて居た。

碑面の文は其拓本が私の所にあるので、前から知つて居るのであるが、記念のために私が其側に立つて同行の令嬢の一人に寫眞を撮つて貰つた。碑面は泥などで散々に汚れて居たので私達は寫眞をとる前に先づそれを拭いた。

澁谷君の門人が知つて居ると云ふので、私達は其案内で、近くにある前校長の家に行き辨當を使はせて貰つた。老校長が私に語る所によると碑はもと今の場所に在つたのでなく、それとは反對の側の、もと造船所のあつた所に横倒しになつて居たのを四十年ばかり前現在の所に移して建てられたのであると云ふ。

併し私は乾也の造艦を記念する碑が始めから建てられずにあつたとは信じられないので

恐らくは仙臺藩の重職間に變動があり、乾也を庇護する人達が退いた結果改易を仰付けられた――乾也が鼎湖を伴れて下つた時さう云ふことになつた――りしたので、一旦建つて居た碑を倒すに至つたのではないかと想像する。私は其老校長に頼んで碑の裏面に刻んである、此碑を建てた乾也の仙臺に於ける門人達江戸に於ける門人達天文方等の連名を寫して貰ふことにした。

船は上面至舳長十一丈に過ぎない小さなものではあるが、日本に於て軍艦造のものが造られた端緒であるところの其開成丸が造られ進水をした場所は此造艦碑と共に史蹟として指定される價値があるのではないかと思ひ、伊達家宮城縣にも文部省にも注意を喚起したいと思つて居る。

私の家に藏する所の拓本には造艦碑の篆額と其筆者の名とが摺つてないのであるが、これはどう云ふ譯か知らない。碑文によると學頭大槻習齋が造艦に熱心で小野寺鳳谷を江戸にやつて良工を求めさせた、それで小野寺が菅野潔と云ふ儒者の介によつて乾也を知り、これを藩公に薦める順序になつたと云ふ。艦成つてから頻りに賞められるのに對して、乾

也は、續々と良工が出て今日私のした仕事を後から嘲けられる樣になる方が國家の爲めに幸ひであると云つたことが記してある。此碑は安政四年八月に建つたことになつて居るが、進水後しばらくして出來たもので、艦が本當に出來上り航海出來るやうになつたのは翌五年の春であつた。

大島

伊豆の大島へは昭和三年の初夏に行つたぎりであつたから、今度は約十年ぶりである。東京府の山林會で島に關する繪葉書を作りたいと云ふので、日本畫の矢澤弦月氏風景協會の人及府の人達と一緒に一月五日夜の菊丸で渡つた。

大島行の船は今では靈岸島からでなしに、芝浦から出るやうになつた。それも非常に違つたし、船の横づけになる岸壁も立派になつた。

昭和三年の時は何丸であつたか記憶しないが、菊丸に比べてはずつと小さいものであつた。其時は文化學院の生徒六十餘名をつれての遠足であつたが、元村に着いて三原館と千代屋とに分宿した。たしか男生が三原館に、女生が千代屋の方に泊つたのであつた。

生徒達と他の教員達とは三原山へ登つたが、山登りの得意でない私は終始元村に留まつて八號の油畫を二枚描いた。一枚は港に繫る汽船を取入れて前方に小屋を出したのであつたが、他の一枚は風が強くて外の作業が困難なので、三原館の二階からの眺めをものにしたのであつた。

今度は季節も違ふのであるが、船は東京灣を出る頃から相當に搖れた。併し特別室の寢臺に臥て居たので私達は別に醉ふこともなかつた。たゞ十時に出て四時半と云ふやうな早曉に着くことは冬の季節としては多少辛くもある。其日は西の風が吹いたので元村へ着かずに岡田港へ入つた。東北が吹く時は元村、西風の時は岡田と大抵きまつて居るのであつた。

暗いなかを上陸すると提灯を手にした窄所の群に圍まれるが、其等は大抵元村の方から

來て居るのであつた。私達は迎への者に案内されて、此頃出來た觀光ホテルへ自動車を走らせた。さうして夜の明ける迄をしばらく憩むことにした。

私達は午近くなつて宿を出で二臺の自動車を波浮の方へ走らせた。其一臺の方には元村から招んだアンコの二人も乘つて居るのであつた。アンコが來たのは私達の爲めにモデルの役を勤める爲めである。

自動車路は大體海岸に沿ふて居るが、私達の車は野增から差木地を經て午少し前に波浮に着いた。波浮の少し手前で路が二つに岐れて居る、其の左りの方を山手に向ひ、崖の上に立つた或病院の庭先から港を瞰下ろす一圖を作つた。私は其崖ふちに生れる小さな椿の樹を前景に收めることを忘れなかつた。

もと火口であつたと云ふ波浮の港は山陰の美保關に似てあれよりも今少し小さからうと思はれる小灣であるが、またそれだけに纏まりついゝ景色でもある。病院の所から瞰下ろす左手の丘の下に町の人家は片寄り、其一番先きの方に書はひつそりした花柳の巷がある。伊豆と大島、新島との間を往復する小さい汽船の今港に入つて居るのが、間近く眺め

られる。灣口の右の方には杉の生へた鼻が出張つて黒つぽい岩に白波の碎けるのが望まれる。晝いて居る中に朝から半晴半曇であつた空模様が急に險しくなり、驟雨のやうな雨がパラ〳〵降ちて來たので、私は病院の緣側に上らせて貰つた。矢澤氏は雨の中に立つて尙其寫生帳にノートを續けて居た。併し其雨も決して永續きはせず、忽ちに晴れて又青空を見せる樣になつた。

晝が濟んでから私達は下の港へ降りて旅館で午食をした。併し其宿からの眺めはあまり面白いものとは云へない。たゞ夜になつて對岸の花柳街に灯でも入つて唱聲の漏れて水を傳はつて來るのでもあればそれはまた趣を生ずるのであらう。「磯の鵜の鳥や日暮れにやかへる、波浮の港にや夕やけ小やけ、あすの日和はなぎるやら」と云ふ俗謠の爲めに此處は近頃一層ポピュラーになつた樣に聞くが、此歌の文句は決していゝ出來ではない。

歸路トーシキの鼻と云ふ處に岩に寄する波を卽寫して居る時、突然學生服の靑年が「御願ひです、御願ひです」と傍へ來ておろ〳〵聲を出して頭を下げたのに驚かされたが、同伴の人達が片わきへ引張つて行つて譯を聞いた處によると、それは畫の修業を志願するの

であると分つた。併し其頓狂さはうつかりすると三原山ものになると云つて私達は笑つたことである。

椿の並木は差木地から野增あたりへかけて最も豐かに輝かしいやうに見えた。椿は十月頃から咲き初めて三四月に至ると云ふからほゞ一年の半ばを咲き通すのである。

私は差木地の或民家のかげに、連れて行つたアンコの一人を立たせて其形を手帳に收めた。近所の家から借りて來た桶を頭上に載せさせたのであるが、彼女は其なかへ一個の石を入れて重みをつけた。アンコ達も都會の風に浴する此頃は必ずしも舊俗を保たず、頭に被る手拭の如きも普通のものを使つたりして居るが、正式は紺地に白の模樣を染め拔いたそうめん絞りを用ひるのである。衣服は紺飛白の筒袖に帶なしで、兩緣に黑繻子をつけた前垂の同じく黑繻子の紐を二重に廻して締めて居る。其緣取りの前垂れが一寸珍らしい。

其晩私達は觀光ホテルの晩餐の席にアンコの唄を聽き踊るのを觀た。其等は藝者と云ふ名義でなしに遊藝師匠として宴席に侍するのであるが、普通アンコ藝者として通つて居る。元村にさう云ふアンコが十數人居るとの事である。二人來たなかの若い一人は純粹の

島娘、他の一人は他所者であつたが、筒袖に三味線はあまり不調和なので私達はそれを止めさせた。袖がなく帶もない筒袖姿での踊りも可なり無理なものであつた。それは戸外の盆踊りならよからうが、座敷にはうつらぬものであつた。

あくる日は方角を變へて泉津の方へ行つた。其朝は曇つて陽氣も暖くなかつた。松の生へて居る處に立つて岩に打寄せる波を卽寫する間も一寸うす寒かつた。

動物公園を大急ぎで一瞥したが、私達はたゞ離し飼ひにされた鹿の群と七面鳥などの間を通り、又猿の集まつて居る處を見下しながら落花生の餌を與へたりした。猿の大きいのはきつたてのコンクリート壁を攀ぢ登つて觀客に餌をせがんだりするので、此頃は檻に押込めてあるとのことであつた。小熊が二疋も飛び出して行方が知れないと云ふやうな噂も立つて居たが、動物園の管理者の話では矢張檻へ押込めてあるとのことである。

湯場で自動車を降りると馬子が居て馬を勸めた。併し私達はそれを斷つて外輪の峰傳ひを御神火茶屋まで歩いた。霧がなければいゝがと心配した三原山の姿はつきり見えて居たのはいゝが、生憎御神火茶屋に着いた時から北東の風に吹かれた霧が茶屋の硝子窓を打

つて、畫を描くどころではなかつた。併し其なかを馬に乘つた夫婦の客が各一人づゝの子供を抱へて火口に向つて行く勇氣は私達を呆れさせた。子供が風邪を引きはしないかと心配されるのであつた。其日は天氣の惡い所爲であらう、駱駝の姿も砂漠には見えなかつた。外輪から瞰下される砂漠から火口へかけては全く鉛の一色に塗りつぶされて、其處に此世の色は無かつた。矢澤氏は三時の船で歸らねばならぬと云つて其處で私に分れて元村への道を降りて行つた。

元村への降りは仲々急な所もあるから登りには樂であるまい。併し其途中に十數軒の茶屋が出來て居て憩み場所は多過ぎる位である。アンコがサーヴィスに唄をうたふ歌の茶屋に寄つたら、其處に鐵金家岡崎氏の息なる人が居り、其近くに建てた地藏を見て呉れと云はれるので、まだ折々降ちる雨の中に其線彫りの石地藏を拜したりした。歌の茶屋から人に護られて降りて行つた一少年があつたが、それも救はれた自殺未遂者であると云ふ。もう今春になつて火口に飛込んだ者が二人あつたと云ふことである。

私は元村の椿並木のもとに前日のアンコの一人を腰かけさせて、夕方近い光線のあるう

ちに急いでこれを寫した。それは豐島屋と云ふ椿油の賣店の娘でお春さんと云ふのであつた。

椿油は髪に用ひるばかりでなく、天ぷらに使ふと美味であると云はれて居る。

私は其夜頼まれて色紙に畫を描いたり、又それに次ぎのやうな戯歌を題したりした。

三原地藏

死をいそぐ人をまもると冬ざれの三原の山に立つ佛かな。

山裾の椿並木のもとに居る島の乙女の顔の白さよ。

袖もなく帶もなければ島の子の踊りは腰を隱すすべなし。

春の近江路

今年の春は少し遲れ氣味であつた。三月の末から四月の初めへかけての近江を旅して私

は春の暖かさに觸れることが少かつた。

靜岡濱名湖蒲郡に一と晩づゝを寄道したあと、一先づ大阪へ出て販神の間に用足しをして、それから大津へ引返して琵琶湖ホテルの客となつた。それは三年ぶりであつた。三年前に來たのは五月のこと、たま〳〵雨に降られながら、深く突出た日本式の庇に掩はれたホテルの廊下から湖畔までの靑々した芝生に點綴される紅い躑躅と一本の大きな楊とを畫にしたのであつたが其大きな低く枝の張つた楊も今度はまだ全くの枯坊主であつた。

私は叡山の裾と比良ヶ嶽とを望む北側の室を希望して、其處からも一枚をものしたが、其反對の南へ向いた二階からも大津の方を望むのが決して惡くないことを知つた。

殊に朝陽を受けた山なみ——其うちの或高みに三井寺のある——の朝靄にほんのりとかすんで、波立たぬ靜かな水に影を映して居る姿は中々よく、陸軍病院や學校などの洋式の建物も殆ど苦にならないのであつた。私の畫の左端は紅葉館を以て劃られたが、警察の注意で其宣傳文字を消させられたと云ふダンスホールや、陸から續く舟座敷なども明るい影を倒まにして一層靜かさを增して居た。

岸に生ふる枯蘆、これを除かぬやうに吳々もホテルの當事者に頼んだ。枯蘆と其前の芝生に立ち列ぶ杉の木の一群とを私は前景に收めたが、滿足に育つたと思はれぬ其杉も私の畫にとつては却て一種の異趣を添えた。

曾てもしたやうに、私はまた坂本からケーブルカーによつて叡山へ登り、ケーブル曜の階上露臺から湖水を俯下ろす一圖を作つた。それは實によく晴れた穩かな日で、まだ客の少い屋上の緣臺には充分に薄べりも敷かれず、「どんぶりに水を」と云つた私に、「どんぶりものは出來まへん」と答へた女給は、其代用としてのコツプと洋皿とを貸すのも澁々であつたし、二時間足らずを緣臺に坐つて畫をかく私に坐蒲團をも與へなかつたが、注文した二杯の紅茶の代を拂つて辭したる時、別　何がしかの錢を與へた私を怪訝らしく見まもるのであつた。其無知をにくむことも出來ない。無動寺の方へ行く道の、入口に立つ鳥居の片脚は崖崩れの爲めに宙ぶらりんになつて居る、其邊を今人足がなほしかけて居る。珍らしい好晴にケーブルの叡山驛は京からと近江からとの人出に相當の賑ひを呈して、賣店では絕へ間もなしに鶯笛が鳴らされて居た。

安土へは縣廳のN氏が同行された。彦根へは幾度か足を運びながら、私は今まで安土を見舞つたことがなかつた。役場の前で雇つた自動車には役場の人も乘つて細い道を幾曲りして先づ摠見寺へ寄つた。御寺では私達の着くのを夕方かと想はれたさうであるが、辨當を携へなかつた私達は先づ午食を饗ばれてそれから城址へ行くことにした。摠見寺の今在る所はもとからの位置ではなく、其處は昔武家邸の址であつたさうである。此寺の改築には小杉放庵氏が與つて大きな力を致し、其襖畫にも「石山人」や「山行」、松の日の出、竹に月などの諸作があり、他に尙岸浪百艸居氏の衝立杉戸等がある。廡擧一門の畫堂の觀がある彼但馬の應擧寺にも類して、亦畫家の作品が斯く一纒めに後代へ遺るのは面白いことであると思ふ。

役場からの人とN氏と三人して先づ三重塔のある安土山の一端へ行つて見た。摠見寺はもとこゝにあつたので今尙礎石がある。こゝも中々眺望がよく暖い陽を浴びて女子供がクレヨンで寫生をして居た。それから信長の墓に詣つて石のごろ〳〵した天守の趾から八角平と呼ばれる見晴らし臺へ出た。崖畔に生えた松樹の間から伊庭内湖一帶が俯下される。

内湖には蘆の洲が帶狀をなして、小さな辨天島が其處に點ぜられる。それは風のない實に長閑な日であつた。安土山は松茸の產地であるさうで、茸狩時の爲めの小亭は今閉されて居る。私は淡靑い長命寺山を遠景とし、內湖と八角平の松とを入れて一圖を作つて見た。內湖は彥根にも長命寺にもあるが、此處のが一番大きいと云ふ。

あまり天氣が良過ると思つたら、其翌くる朝は小雨が降ちて居た。放庵、蘇峰二氏が泊つただけで私が三番目　と住職の言つた、其茶室へ寢かされた譯であるが、床には摠見寺御留守居へ宛てられた小堀遠州の書簡の軸がかゝつて居り、また大雅堂定亮が墨畫で布袋を畫き、それに田村月樵が唐子を添えた銀地の風呂先屏風が置かれて居た。住職が自慢された筧の水にしてはちと音が過ぎると思つて、明け方近く眼を覺まし雨戸を繰つて見たら雨が降つて居るのでがつかりした。

朝飯の用意が出來る間を寶物の置かれた室へ入つて、與二郎の釜とか信長の羊袴——葡萄牙から贈られたと云ふ——などを拜見して居たら、住職はなほ蓋をとつて永德の筆と傳へられる寓意的のさとし畫や扁額や信長公の陣羽織等を見せて呉れた。

摠見寺の緣側から俯下ろされる細い水は內濠と外濠とで其間を朝鮮人街道なるものが通じて居る。常盤木の幾本と枯木とを越して綠の畑のなかに挾まれた濠の水が白く光り、セミナリオの趾から遠く模糊たる安土の部落、其うしろになほ淡いかゞみ山や瓶割山などが望まれる、春雨の趣は私の畫興を促すのであつた。

雨にも拘はらず私とN氏とは豫定通りに長命寺へ廻ることにした。たゞ昨日舟で內湖を過ぎると云つたのを止めて、自動車で八幡へ出て、それから長命寺へ行つた。併し八百八段とか聞く石段の數に恐れをなして下からそれを仰いでばかり、松ケ崎の見ゆる店の奧座敷に雨を避けて、其處から屋後に咲く梅の木を前景に湖を隔てた八幡山を望む一圖を作つた。畫いて居るうちに雨は止んで曇りから淡日となり、丁度入つて來た白鳥丸に乘る頃は、もう空も隈なく晴れて、松ケ崎の方の、私が今の先畫を描いて居た家のあたりは逆光になつて、梅の花が僅かに光つたりして居た。此邊は蘆が靑くなる最夏でも水鄕趣味の掬すべきものがあるであらう。湖畔に立つ家　も藏造りや外に壁を見せた樣式などの貧弱でないのがよい。

湖水一周の遊覽船は竹生島の方から此長命寺へ寄航して、參詣の間約一時間をこゝに留まるのであるが、出帆の汽笛に忙しく石段を降りて來る人達は大汗になるらしい。

江若線で湖北を今津の終點まで行き、其處から自動車を雇つて海津に着いた。この行にもN氏の同遊を煩した。其日ははじめはよく晴れて居たが、後には雲が出た。

海津の大崎樓で午食の支度を待つ間に大崎の山を畫いて見た。本當は入る筈の汽船の棧橋を前景から省いた。鷗が白い翼を頻りに翻へして居た。大崎の鼻を右端にする其草山は枯木と共に茶褐色をなし、杉が畫的に其表面を點綴した。

隧道の幾つかある大崎は近づいて見るとあまり畫趣はなかつた。雪のある伊吹と竹生島とが離れ過ぎるのも具合の悪い一つであつた。

それで私達はぢきに其自動車を引返させて、今津の棧橋に近い料亭の二階から伊吹と竹生島とを遠望する一圖を作つた。其時はもう陽が射さぬやうになつて前景湖面を切る梅の色も明るく引立つては見えなかつた。

私はまだずつと北の方を知らないが、今迄見た湖岸は大體に於て内湖などの入組みのある湖東の方に趣が多いのではないかと思ふ。

大阪回顧

十月一日興亞奉公日のよく晴れて靜かな午後、上本町七丁目に住む舊友を案内に頼んで、其附近の舊蹟を訪ね、それが昔と今とどんなに變つて居るかを見ようとした。明治三十八九年私が眼を病んで大阪に滯留して居た頃は、暇にまかせて其邊を歩き廻つたのであるが、其後幾度となく此地を訪れながらついぞ其邊の舊蹟を顧ることをしなかつたのである。

私は藏鶯庵のあたりが今どうなつて居るかに先づ興味を持つたのであるが、友はそれよりも前に西鶴や椀久の墓に私を案内した。大軌の驛前上本町の電車通を北すれば、左の方誓願寺に中井竹山同履軒等一門の墓と西鶴のそれとがあるが、其寺の門内は今工事中で混

雑して居た。北條團水等の建立にかゝる其文豪の墓は仙皓西鶴と深く刻んである。それから尙少し北しての右側實相寺に椀久松山の墓があるが、それは新派俳優高田實が葬理を加へたもので、其傍に高田自身のやゝ誇大であまり好趣味とは云へぬ墓もある。

尙此寺には寺域内を一段高くした處に住友家の墓所があり、同型の墓石が列んで居る。其石段の下兩側にも泉屋と刻まれ或は井桁の紋の彫られた一門の墓石の多くが列んで居る。斯う云ふいゝ檀家のある御蔭であらう、此寺の境内はよく清掃され整然として居る。

それから東へ折れて契沖阿闍梨の住んだと云ふ圓珠庵を覗いて見た。天井など昔のまゝですと其處に姿を見せた婦人が云つた。これに隣りして鑑八幡と云ふものがあり、祈願の主の捧げた古鎌が堆く積まれて居る。時節柄相當な分量の屑鐵であるなと思つた。

產湯の稻荷にも詣でたが、此傍に旅館產湯と云ふのがある。眞田幸村城の拔穴と稱するものが其地域の一隅にあるが、幸村が拔穴を造つたと云ふ傳說があつて、尙何處やら掘つて見た事もあるさうである。石の段によつて其境内を出ると高津中學校に接して高津宮鉦がある。これ迄のところは實に今度はじめて見舞つたものである。

藏鶯庵は昔寶舟（今の倦鳥）同人から子規忌の句會に招かれて一度來たことがあるのだが、行つて見ると上の宮のとなりの其禪寺は舊態を保つて居る。其狹い庭には萩や鷄頭や黃蜀葵が咲き柿も實つて相當に雅味をもつて居る。併し其頃野屋いと思つた周圍にはこまこました民家が建てこんでしまつて蓮池など跡方もない。子規忌に此處へ來たのはたしか三十九年の秋であつた。其時には芒十句の題を出されて苦吟したことや、會果てゝ桃谷驛へ出て其處から城東線によつて歸つたことなどを覺へて居る。電車は築港のしかなく、あとの交通機關としては城東線の汽車と巡航船とがあるだけであつた。味原池畏沙門池などは其頃はあつたが今はすべて消滅した。

藏鶯庵で既に淡暗くなつて來たが、尙上本町の電車通を天王寺に向つて南し、西へ折れて愛染堂と其多寶塔とを見た。此丘の下にある近代的の建物は夕陽ケ丘女學校のあとに建つた青年塾堂である。家隆塚は此塾堂の構内にあると云ふ話であつた。其傍の大江神社は改築されて眞新らしいものになつて居た。此處にも見晴らしの堂があるが、私淺は新清水へ行つて其舞臺のベンチに漸く腰をおろす事が出來た。もう堂が閉され參詣の客もなく、

御びんづる樣が門を入つて間もない片隅に氣味惡く坐つて居られた。一日だから餘計に自肅してネオン・サインを消したのであらう、舞臺から見降ろす大阪は常よりも暗かつた。たゞ南海ビルなどの燈光が遠く多少の光を放つて居た。

天王寺から新清水愛染堂へかけての一帶は大阪の有數な名所地域であるが、訪客はあまり多くないと友の話で知つた。電車の便がよくなつたので、人は大軌などを利用して奈良や赤目其他へ遠出をして、之等の古くさい、手近の舊蹟を忘れるやうになつたのであらう。それもやむを得ない。併し他處から來る觀光客の爲めに大阪市は之等のものを今少し吹聽することに力めてもよいのではないかと思つた。

私は前に松山牛山の畫いた「浪華の賑ひ」などによつて、高津神社から新清水に至る此邊の丘陵を歩き廻り、曾てあつたと云ふ著名な料亭の浮瀬（うかたせ）と云ふ其名をなつかしんだりしたものである。瀧があると云ふので、清水堂のわきの墓石の間を通つて月明りに危かしい石段を降り瀧の音のする方へ行つて見た。瀧とは云ひながらそれは細い水が三筋落ちて居り、塀で圍まれたなかに祈願をこめてそれに打たれる人を見るのであつた。今しも一人の

女は腰巻一つで瀧から出て來て衣服を着ようとして居た。暗いなかを幾個所に灯がともつて、人が何か唱へながら瀧にかかつて居る、其處らに迷信的空氣の滿ちて居ることを感じた。

私達は興亞奉公日の午後幾時間を斯かる大阪回顧のハイキングに費して少し足を痛くした。

富士箱根

箱根は種々の季節に何度となくこれを訪れて居るが、畫に描くとしては矢張蘆の湖のほとりが一番だと思ふ元箱根の町へ降りやうとする蘆の湯からの道のほとりで離宮跡の方を望んだ圖が中々よく、私はこれを既に二度も畫にした。もとは其路から一寸入つた晴らし臺に車の埃を避けたのであるが、近く出來た山水樓からも概同じ圖が眺められる。昨年

の夏行つた時は樓前の土を崩して廢地にしつゝあつたが、今それはどうなつて居るか。たゞ其處の湯が湯の花澤から引かれて居る硫黄泉であることは、私をしてすぐにその油繪具に於ける影響を氣遣はしめた。宿に就て質したらば雲の低く垂れたやうな日でなければ大丈夫であると云ふ。それはさうかも知れない。

駒ケ嶽の下を湖尻へ傳ふ自動車路を私はまだドライヴして見ないから、其處にどう云ふ景觀があるかを知らない。たゞ富士見樓と云ふ、東京の某邸宅を移したと聞くだゝ廣い感じのする家から、權現のうしろの山の樹々を越して、湖水を隔てた三島へ越える峠の方を望んだりしたに過ぎない。其名のあらはすやうに其家からは無論富士もよく眺められるのである。

元箱根の町其ものからは此湖水のいゝ眺めは得にくいやうに見える。併し町の家並を通り抜けて杉並木へ入らんとする所で私は逆富士のいゝ圖を得た。繪葉書などになつて居るのは今少し塔ケ島寄りの處であるらしいが、私は昨年の夏風のない二た朝を利して、其處で一枚の油繪を仕上げた。箱根ホテルを出る時かゝつて居た霧がうまく霽れあがつて、富

士の姿もあつらへ向きに湖面へ映つたが、私の畫を引立てたのは右手から喘く出る權現の森ばかりでなく、シルウエツト風に湖面を切る前景の草叢であつた。

私の畫いて居る時アマチュアの一人も寫眞を寫さうとして、頻りに筆を執る私と富士とを收む可き構圖を工夫して居た。

ホテルの室から畫いたことも幾度かある。關所址の杉の森と駒ケ嶽とを入れることも出來る。ホテルに泊つて居る外客の一人が偶岸に繫がれたヨツトをおろして湖面に縞を描きもするが、併し結局は靜かなものである。

また富士が姿を隱した或午後雲間を漏る光線が湖南の一部を照らすと云ふやうな浪漫的な一瞬を見やられることもある。兎に角歐洲に事變が起つては、之等の西洋人を顧客とするホテルは書き入れの夏季と云つてもそれ程賑はつては居ないので、却つて我々のやうなものには都合がよかつた。

ホテルから見る富士は借いことに前山と重なり過ぎて面白くないが、ホテルの東の方の高みへ登るならばそれは、餘程增しになる。前には山の傾斜に生ふる杉、中景には關所址

の杉並木の杉と段々にスケールを減じて、右に駒ヶ嶽の裾左に富士と云ふ寸法になる。蘆の湖から十國峠への途中で富士を見た經驗はない。私はたゞ熱海から其峠までを往復したに過ぎないからである。三島への峠へ行く途中で湖水を顧みた圖は中々大きくもあり美しくもある。これは是非一度ものにしたいと思つて居る。

富士五湖のうち私はまだ精進・本栖の二湖を知らない。西湖を一瞥したのも明治の末のことで隨分古い話である。其時は河口湖の水が溢れて湖岸の家々がみな水びたしになつて居るのを見た。今は落し口が出來て居るからいゝが、其頃はさう云ふことがないので、蒸發するのを待つより外なかつた。私は其南岸を傳つて西湖へ行つたのであるが、路が出水に遮られる時は山手の細道をたどるのであつた。其時私は船津へは泊らず、吉田の宿を根城として一日河口と西湖のほとりを歩いたのであつたと記憶する。

船津へは其後學校の遠足に附いて行つたことが一度あり、それから次が去年の夏であつた。河口湖ホテルの樓上からは、一方の窓に近く迫る富岳を望み反對側の窓からは雲のかげによつて折々陰らされる山と端艇やヨットなどの浮ぶ湖とを見ることが出來た。水に沒

する黑々とした熔岩の塊は此處の特色であるが、其熔岩の間に放し飼ひにされた山羊の鳴くのを聞くのも異樣な取合せであつた。

此時は妻と末の男の子とを伴れて行つたが、其幼兒の乘せてとせがむモーター・ボートを宿から出して呉れて、私達は鵜の島へ上つて見た。神社の近くの富士を見晴らす崖の上にフジビユウ・ホテルに泊つて居る若い女達が輕樂器を弄んで歌を唱つて居た。

フジビユウで食事をしたが、此處には相當數の外客が泊つて居た。此處からも位置の關係上富士と湖水とは別々に眺めるより仕方がない。ホテルの敷地にある松を前景に鵜の島を入れた湖水の眺めは中々美しい。故人岡田三郎助も晩年こゝに暫時足を留めて居たことがあり、こゝで幾枚かの圖を得たのを知つて居る。ホテルは流石に近く出來ただけあつて建物其外すべてが進んで居る。窓硝子が大きくなつて居ることもよい。

山中湖も明治の末行つたのが其最初であり、其時はまだ馬車の時代であつた。私は村の或宿に泊つたが、恰度養蠶の忙しい時で、宿のなかにも蠶のにほひが漂つて人々を困らせた。旭ヶ丘と云ふ方はまだ開けて居なかつたので私は其宿の近くでスケツチをしたに止ま

つた。

山中湖へは此春まだ寒い頃久しぶりに一度行つて、雪後落葉松の枯枝に雪の積つたのを前景とする珍らしい富士の一圖を得たが、つひ此間も再遊してこな屋の樓上から今度は新緑の落葉松越の湖水を寫した。春行つた時よりも水は餘程減つて居た。私は其宿で常客の山本鼎氏に會し、又これも偶然に東大總長各部長等の一團とも出會つた。其等の人々は朝早くから湖上へ出てうぐひを釣つたり其魚粕を取つたりした。

埼玉ところどころ

最近埼玉縣下のところどころへ屢々行つたので、其等のことを記して置く。先づ十月の十九、二十日は文化學院美術部の若い人達をつれて寄居と武藏嵐山とへ行つた。天氣は二日續いてよかつた。私達は寄居へ先きに行つて武藏嵐山を後にしたが、此日程は寧ろ逆に

した方が本當だつたと後になつて氣が附いた。何故かなれば二十日は日曜で嵐山の方は雜踏するにきまつて居たからである。

寄居もうつかり町まで行つてしまつたが、それも其手前の玉淀（たまよど）で降り方が私達の寫生には都合がよいのであつた。玉淀と云ふ驛は後から出來たのであつたらう、私は其存在を知らなかつた。電車の鐵橋に近い堤の上に「勝地玉淀」と記した大きな杭が立つて居たが、これは邪魔になると思つた。其杭の間近に一寸公園風に手を入れた所があり、其處に亭なども出來て居るが、雜草の茂るに任せて荒れて居るから、寧ろ私どもには適して居た。

寄居の荒川には上、中、下の渡しがあるが、其處は下の渡しである。白つぽい廣い河原を赤く枯れた草が色づけて居る、其なかに青い水が流れ、二個の船水車が繫つて居る。これも昔から此位置にあつたものである。岸にある樹葉には黃色になつたのも褪いのもあり陽光を浴びて美しく輝いて居た。

私と今一人の女生徒とは其處に畫架を立てたのであるが、他は河原に散在したり、或は川沿ひを上つて行つた。私達二三人は彼の邪魔ものの杭の近くの茶店で辨當を使つたが、

他の人達は外で食べたらしい。

中の渡しの　幸四郎の別邸――それは他に譲られてから焼失した――のあつた所を通つて、吊橋を渡つて、私は南岸の陰に入つて、また横長い一枚を畫いた。私は傍に立つ男と上の渡しにある松村翠雲の家の噂などをしながら筆をとつて居た。もう故人となつた其日本畫家は鮎を得意として居た。さうして其息子のTは洋畫を描く。私は其家の座敷から川の景色を描かせて貰つたことも一二度あるが、此日は生徒を連れて居ることだし、寄ることも出來なかつた。

夕方私達は玉淀から東京迄の切符を買つて菅谷で途中下車することにした。菅谷から自動車で武藏嵐山へ着いた時はもう日が暮れて居た。松月樓の廣間で夕飯を濟ましてから、私は生徒の一人と聯珠を試みたが、私は到底其人に勝てなかつた。男女生は二組になつて向ひ合ひ、錢渡しの遊びに興じて居た。渡さぬと見せて渡し、渡すと見せて渡さぬ、其とりどりのインチキ振りは他で見て居ても仲々面白かつた。

あくる朝は皆手近の川沿ひ其處此處に思ひ思ひの圖を選んだが、若い人達には寄居の荒

川よりも武藏嵐山の方が描きよいと云ふことであつた。廣々とした景色は此頃の若い人達の苦手とする所であるらしい。

S字形に彎曲する川堰かれて緑色に澱む水、長灘程でなく少しばかり露出する青つぽい石、丘に生ふる赤松、崖に茂る雜木の黄紅葉、之等が武藏嵐山の景を形造つて居る。茶店から草津節などのレコードが繰返されて居るうちに、段々團體なども繰込んで賑かになつて來た。私等は芝原に坐つて辨當を使つたが、其時偶然にも丸山瞰霞氏の夫人と令息とに會つた。本郷區の信州人會の連中に加はつて來て見たと云ふことであつた。生徒達は食事のあと「子を捕ろ子捕ろ」などをして其の上を轉げつまろびつしてキヤツキヤツと子供らしい遊びをして居た。

私はYと一緒に越ヶ谷へ行つた。それは十一月の二十三日で、よい小春日和であつた。早春のころ吉川へ行つたことはあるが、越ヶ谷大澤の方は久しぶりであつた。街道を北へ行つて橋を渡らずに元荒川のほとりを左りへ停ふと、欅と杉との樹立が中心となる、ドーピニー風の平たい穏かな景色に逢着した。かう云ふ圖は明治美術會の昔盛んに畫き古され

たものだが、其痕を絶つた今日になつて見ると、これも又一個の新味でないこともない。

私はこれを地平線の低い横長の水畫にした。風がないので其欅と杉との樹立は川に影を映して居る。此對岸を傳つて行けば梅林や桃林、さては宮内省の御料場の方へ導かれる譯である。前景の洲に繋つて居る船は道路に面した小料理店の生簀である。畫が濟んでから私達は其料理屋の二階で鰻を食べた。緣側に太鼓が置いてあるのを見るゝ此處らで藝者を招んで遊ぶ客もあるらしい。女中に訊くと藝者は大澤の方に二十人位居るゝ云ふ。

Yに道具を持たせて先きへ歸し、私は草加で電車を降りたら、一人の紳士が「Tさんへ御出でゝすか」と云はれる。それに諾いて私はハイヤーに同乘し潮止へ行つた。重態と知つて私も見舞に廻るのであるが、其人が今朝T氏危篤の電報を受取つて今馳けつける所であると聞いては其急迫に驚いた。潮止のT家には親類其他の關係者が多勢詰めかけて居た。T氏は前に腦溢血の極輕いのをやつた。家への歸途街道で倒れたのを人に援けられて家に送られ、其後靜養を續けて漸く恢復し、春には起床祝ひに私の下畫を描いた牡丹の扇子を配つたりされたのに、最近又過勞の結果倒れて今度は肺炎を併發し、重態に陷つたの

である。

病床をも一寸見舞つたが、何分熱は高く昏睡を續けて吐く息は忙しい。食を攝らなかつたので衰弱したが、一兩日前から流動食を攝つたりする樣になつたので、此分なら持返すかと思つて居る内に肺炎になつたと云ふ。

T家の末男が與謝野氏に就いて短歌を學んだり、又此頃は畫も描いたりして居る關係上私の家へも頻繁に出入して居るのであるが、T家と私の處とは間接に緣が繋がつて居る譯でもあつた。私の母の方の親類が二合半の戸ヶ崎と川崎とにあるが、甘川崎の先代がT氏の媒酌をしたと云ふし、又T家と續いても居るのであつた。それからT家の長男の夫人は大相模のS家から來て居るが今巴里に居る二科會創立者の一人S氏は其夫人の叔父に當るのであつた。實に田舍の緣組は四方八方に根を張つて居て、遠い所まで遡れば近隣緣者ならざるなき場合も少くないらしい。T氏は潮止の名村長として種種縣下のことに盡した人であり、まだ六十代でもあるし、精々其壽命を延ばしたいと誰しも思ふのであつた。

那須

那須溫泉の名はかねて知つて居たが、つひ機を得ずに今まで行くことをしなかつた。今度風景協會の觀勝旅行に加はつて六月の第一土曜日から日曜へかけて其處へ一泊の旅をした。一行には副會長の田中阿歌麿子や坪谷水哉、杉村楚人冠、爲藤五郎の諸氏「冬柏」關係の島谷氏夫妻、近江滿子、辻和歌子兩女史等があり、畫家は高木背水、吉田秋光の二氏と私とであつた。さうして司會の役は「風景」編輯の黑田朋信氏、寫眞家の阪井政次郎氏であつた。

一時二十分上野發の臨時列車で一行は四時十七分黑磯に着いたが、新らしい客車の、而かも快速列車であるから、沿道の平凡な割に退屈もせず、黑磯から二臺のバスで五時前に新溫泉山樂の客となつた。

休息して先づ一と風呂といふのが常識であるが、高木氏と私とはまだ高い日を利用して一枚の卽寫をやらうと、山樂莊の分讓地になつてゐる山手の方を歩いて見た。前の樹林に妨げられるからといつて高木氏は手近の草原に腰を下して了つたが、私はなほ登りのぼつて、谷を隔てゝ湯本の方に對ひ、黑谷山のスロープと樹海とを入れた一圖を描いた。夕方近くなつて水畫が思ふ樣に乾かず、加ふるに何といふか知らぬ小虫に妨げられて、畫作はあまり樂でなかつた。

山樂は其晩幾つかの團體客があつて相當に込み合つてゐた。私と背水氏とは皆よりも遲れて食膳についたが、縣から好意の鱒の鹽燒が遲れたので、これも贈りものゝ酒をゆつくり飲むことが出來た。座談會に移つては坪谷幸六氏の那須火山に關する御話と叔父君水哉翁の殺生石の碑に關する忠告的熱辯があつた。今殺生石のほとりに立つてゐる「飛ぶものは雲ばかりなり石の上」の句は芭蕉ではなく麻夫といふ人のものであるから芭蕉の二字は削つて慾しいとの希望を彼の低い皺枯れ聲に熱を籠めて述べられるのであつた。

あくる朝も好晴に五時頃起床、二階の廊下から宿の入口を前景に御用邸のある丘か　福

島茨城の方面淡青い連山を取入れた一圖を作つた。本當の朝飯前の仕事である。食後數名のもの丈が縣廳の自動車を利用させて貰ひ途中殺生石を一覽しておだん茶屋まで登つた。湯川の湯花を取る裝置のしてあるあたりには、黄の香が鼻を衝いて石は蒼白くなつて、如何にも賽の河原らしい趣をなしてゐる。殺生石の手前に木柵がしてあり、あまり長く其處らに留まるなの注意が札に記されてゐる。水哉翁憤慨の芭蕉句碑と稱するものは成程其處に立つてゐるが、守田寶丹の書だから、あまり上品なものではない。殺生石といふものを何かもつと平らな處にあるかのやうに私は想像してゐた。國芳筆の家藏の錦繪の一枚などが先入となつてゐたためである。「石の香や夏草あかく露あつし」といふ眞の芭蕉の句碑は殺生石とは大分離れた處に立つてゐる。楚人冠は芭蕉としてこれはまたつまらぬ句だといつてゐた。

おだん茶屋から谷一つ越して八幡濕泉へ行く路は歩きよく、又それ程の道のりもないので、私達にも樂であつた。先着して午食のための座敷を定め、一休みする中に徒歩の連中が着いた。躑躅の花は生憎數日前の强風に吹き飛ばされたといふがそれでも風を除けた陰

のやうな處に多少咲き殘る花は美しかつた。躑躅と那須岳との構圖を種々工夫したが、どうも旨く行かず、辨天温泉の方へ行く道ばたの花を新緑のなかから浮かして可なり面倒なものを描くより仕方がなかつた。朝のうち奇麗に晴れてゐたのが、次第に雲を增して遠望も利かないやうにさへなつた。併し三時山樂へ歸着するまで雨滴は落ちずに濟んだ。

東北の初夏

無理に暇をつくつて、此間數日を東北に行脚した。それは私の專賣にかゝる水墨淡彩畫の旅であつた。

先づ夜行で一氣に松島へ行つたが、東北大學へ講義に赴かれる文學部の原田敎授と偶然同車した。北支の考古談などをしたあと、うと〳〵して、仙臺で同敎授に別れた私は、松島の觀光ホテルの客となり、其樓上からの眺めを、其日と翌朝とへかけて三枚描いた。庭

の松の間から福浦島を望むのと、五大堂を中心としたものと、雄島を入れたものとである。翌朝は曇つては居たが、墨繪には却つてよかつた。

電車でまた仙臺へ引かへして、北四　丁に醫學部の佐武教授を訪ひ、廣瀬河畔の東洋館へ案内を乞ふた。佐武邸の庭で寫眞をとられる時にポツポツ降つて居た雨は、料亭で私が筆を執る頃一層降りつのつて、多少は風も伴つて私を困らせた。斷崖になつたこちらの岸はいゝが、對岸の低い處に出來た工場は風景を破壞する役に立つた。勿論私、それを畫の外に置いた。逆流を描くのは洋畫でも樂でないのであるが、日本畫的の表現は一層むづかしかつた。

夜福島へ着いて馴染の松葉館へ車をつけた處が門を鎖されて居て、運轉手も休業中であると云ふ。それなら何故はじめに言はぬかと詰つても仕方がなく、これも舊知の福島ホテルに泊つた。あくる朝「福島民報」の社長に電話して案内を乞ひ、矢張同じ阿武隈河畔の偕樂から上流を望む一圖を作つた。出水のあと川の流れが大分前と違つて居る。こゝで縣出身の畫家萩生天泉氏に會つた。また本宮から伊藤氏も來合せて、夕刻飯坂に回遊した、

いつもと違つて湯野町の一番上に位する旅館を宿とした。花水館桝屋等の建物を左りにして上流穴原の方を望む趣が悪くない。

前景には花の咲かうとして居る栗の樹に、藤の葉がもつり合つて居た。其日の午後私はもう本宮の蛇の鼻遊園へ來て居た。牡丹の客をあて込みの園内の茶店は其日ぎりで皆閉ぢることになつて居た。

あくる日　白河である。白河の城趾を汽車で見て居ながらこれ迄其處に下車することをしなかつた私は今度はじめて南湖を見て、其勝景を賞めた。蛇の鼻ではもうしまひになつて居た藤がこゝではまだ湖畔に咲いた居たし、松樹のもとに躑躅も盛りであつた。

よく晴れては居たが、少しかすんで居たので、私はこゝから遠望されると云ふ那須岳の姿をほんの淡くしか眺めることが出來なかつた。睡蓮の浮ぶ風のない湖面は、靜かに樹や丘を映して居た。

南湖は白河樂翁の創設にかゝると云ふが、共樂亭と云ふ平民的な名稱が示すやうに、公衆と共に樂しむと云ふ公園の先驅をなすものであつた。

佐渡

佐渡へ大正十一年の夏行つた事があつた。國中の畑野の渡邊湖畔氏は、與謝野さんの方の歌人であるが、その人の所に厄介になり一緒に小木港にいつた。小木には一週間位居たと思ふが、それから河原田、相川、夷港等の邊を見た譯であるが、その中で一番面白いと思つたのは、小木港である。あいにく天氣が惡くて、その地方でくだりの風といふのが毎日吹いてゐた。この風は雨を伴ふので、これが吹いてゐる間は晴れなかつた。小木のはづれの方に矢嶋經嶋といふ嶋があるが、その中の矢嶋に山本悌次郎氏の別莊があり、そこに紹介されて滯在して、一週間位居た。海岸には金冀のやうな岩がちらばつて居て、その上をあるいて行くと、一寸した橋があつて、そして別莊である。はじめは渡邊君も居たが、しまひには私一人になつて少し退屈したやうであつた。この別莊はこれを建てた大工の趣

味であるらしいが、無暗にひねくれた木の根の樣なものを使つたりしてあつて、あまり敬服は出來なかつたが、位置は非常によい處を占めてゐる。この港には、日蓮の弟子の日朗が、日蓮赦免の敎書を持つて上陸した處だと言ひつたへられて居る舊蹟があつて、そこに日蓮宗の寺で安隆寺がある。それから舊蹟といへば、この矢嶋から近い處にあつて、一寸高臺になつてゐるが、承久の帝のお手植の櫻があり、可成りの古木であるが、或はあとで植ゑ繼いだものであらうかと思はれる。そのあとで、港の方の宿屋に移つて一週間程居た。小木は内の淵、外の淵とわかれ、間に城山嶋があつて、それが境になつてゐ、それが何れも面白い。この港には妓樓があつて、もとは遊び場としてにぎはつたものであるが、今はさびれてゐる。この頃は此國の港が船のつきが少くなつてさびれたので、この港もこの一般の例にもれないのである。このさびれたのが、かへつて一種の趣を持つてゐる、尾崎紅葉がここに來て居て氣にいつた女があつたといふことなども傳つてゐるが、「煙霞療養」の頃のことであらう。この港は大體漁業が主であつて、ことに烏賊がとれ、烏賊の新らしいのが食べられる。町をあるいてみると烏賊がほしてある。この邊のよいことは晩と

つたものを朝たべることである。烏賊の本場だけあつて、少しでも蒼いのはたべないのである。味もほかの處のとはちがつてゐる。私はある丘の上の寺の境内から港と人家とを見下ろした畫をかいたが、港の家家の屋根がよかつた。屋根がただの瓦と、赤い瓦と、それに板葺のとがまじつて居て、それを上から見下ろした處に興味があるのである。この地方には言葉のなまりがある。町はづれにこの時輕業がかかつてゐたが、それを土地の人の言ふのをきいてゐると、「かじわら」と聞える。

それから順德天皇の御陵にもお詣してこの御陵のある處から西の方に向かつた河原田に行つた。ここには俳人の中山烏賊氏がゐて、趣味の深いお醫者さんで、御厄介になつた、ここには越の松原がある。平坦の處でそこを畫にかいた。一般にこの嶋は、嶋の中は景色が平凡で、周圍に面白い處があつた。河原田に來た時に、丁度盆踊があつた。着物は普通の浴衣であるが、往來でこの邊の若い人達がおどつてゐた。唄はおけさである。

この盆踊もさうであるが、佐渡には一般に古風が殘つてゐる。ある寺で人形芝居があつた。唄は說教淨瑠璃風の文彌節でそれを寺の境内でやつてゐる。かういふ人形だとか、金

平、說教だとかいふやうな舊いものの殘つてゐるのが面白い。

河原田から澤根をとほつて相川に行つた。相川にゆくと、町の向きが西になるので、畫をかくには海に向ふと逆光線になつて、午後はまぶしくて困つた。地形は惡くはないが、この逆光線に困つた。北に向つて町をはづれた處に、辨天嶋があつて、そこで私は海と岩の畫をかいたが、この邊は一寸面白かつた。それを傳つて北にゆくと海府があつて、さみしい景色であるが面白いといふことである。相川には朱泥風の無名星燒がある。私も三浦常山家にいつて燒物にかいたりしていたづらをした。その息子さん二人は彫塑をやつて二科に出品してゐる。

私は行きにもかへりにも、夷港を通つたが、ここには加茂湖がある。加茂湖はかなり大きい潟であつて、それに接して夷の町がある。町は細長くて一方は海、一方は湖で、面白い地形である。その間が一箇所きれて、橋がかけてある。小學校の上から加茂湖を見下ろして畫をかいた。そこから金北山がみえる。畫にかく場所が中々おほく、私は可成り畫を作ることが出來た、(昭和四、七)

京洛三景

山端

去年の夏水害後の「茂川に接して其荒れ果てた姿に先づがつかりしたのであつたが、其時行かなかつた荒神から上の方の冬枯を今度見ては一層其思ひを強めた。

出町の袂で高野行のバスを待つ間、近くの河原を見ると、其處に土工の幾人かゞ改修の工事をやつて居る。加茂川は深く掘り下げられるさうであるが、それによつて出水は防げるにしても昔ながらの趣は保たれぬことにならう。聞くともなく聞くと傍の機械屋か何かの店から戰時の歐羅巴に關する放送が漏れる。どうも其話が美術關係者らしいので此間歸朝したうちの誰であらうかなどゝ思つて居る、其うちに漸くバスが來たのでそれに乘る。

バスの勝手も分らぬので、女車掌に質して泉町と云ふ所で降り、川を渡つて高等工藝に

都鳥氏を訪ねた。學校が吉田から此處へ移つてから一度來たことがあり、其時は試みに陶器の繪つけなどをしたのであつたが、今度は京都驛で乘つた自動車が此處まで來ることを嫌ふので私は出町から先きをバスに乘換へたのである。

かねて打合せて置いたので、土曜の午後授業はないにも拘はらず、氏は教官室に私を待つて居て呉れた。氏の保管して居る淺井師の遺作のうち、來る可き三月の太平洋畫會に特別出陳される水彩素描の類を豫定したり、また師の作品の重なるものを博物館美術館等の公けの場所に寄託しようとすることに就ての相談もした。

見廻す室のなかには柘榴の畫の畫架に載せられたのがあるが、それは隨分時が經つて居るのであらう。其モデルとなつた柘榴其ものは小卓の上にしなびたまゝになつてまだ取捨てられて居ない。其外の畫で湖畔で網小屋のやうなものが立つのや、柳の樹が列ぶのなどを琵琶湖の景と察したが、私は氏に質して其前者が大津附近であり、後者が彦根の内湖のほとりであることを知つた。

少しゆつくりしてもよいでせうと誘はれるまゝに、夕暮近い薄暗くなつた校外の野道を

私は都鳥氏に尾いて山端の方へ行くのであつた。學校の樓上から比叡の姿を寫すために最近石川欽一郎氏太田喜二郎氏などが來たことを私は氏から聞いた。なる程比叡を見るにはいゝ足場であるなと私には思はれた。

少し肥料の臭ふやうな冬枯の野道――本道でないを――歩く時、斯ふ云ふ畦道などをよく畫道具を持つて景色を探り歩いた昔のことが自から想ひ出されるのであつた。漸く松ケ寄の本道へ出た。黑つぽい山を指して、此上に池があるかと訊けば都鳥氏はまだあると答へた。

昔京都に居た或秋のこと、私は暇にまかせて上加茂の蟻ケ池、みぞろ池、それから此松ケ寄の山の上の池などを廻つたことを覺へて居る。松ケ寄の邊にはレプラが多いからあまり其邊へ御出でにならぬがよいと、其時他に云はれたこともある。今はどうなつて居るか知らぬ。

突當りを左折して平八茶屋に入つた。街道に面する店つきは舊態を存して居るが、川に沿ふ座敷は全く建て替へられて、而かも一間位地上げをされて居る。平八へは二科を京

都で開いた頃行つたきりで、其時は高野川に架けられた板橋の上に立つてカメラをいちつて居る舞子の姿をそれ程高くない座敷から眺めて居たと記憶する。高野でも加茂でも岸をきちんと石がけで固められては和らかな趣が無くなるわけである。そればかりでなく、此附近の岸に生ふる樹木の多くが流されて非常な變りやうである。たゞ田舍風の服裝をした仲居の姿と川魚の料理とは昔のまゝである。

上　京

朝河原町の小山氏を訪ねたら、中支で戰死したその二男の友達であると云ふ青年が、應召の赤だすきをかけて故友の靈に一禮すべく立寄られたのに會ふ。小山氏の藏書は、相變らず坐邊に堆く、その幾つかの山に布片がかけられて居る。床には「もろふりの山藍の袖あらはれてむかしをいまにかへしけるかな」(或は多少の覺え違ひがあるかも知れぬ)と云ふ、御合に字の大きな賛歌の下に、石清水の祭の東あそびの舞が墨畫で描かれて居る爲恭の幅がかゝつて居た。

大きな福祿壽の三字を黑々と書いた、蕪村の畫幅は、平凡社から出た俳人筆蹟の全集の

一卷「蕪村」（碧梧桐編）のなかに收められて居るが、私は此原物をはじめて見た。斯う云ふのは珍らしい方に屬するらしい。

なほこれは一寸むづかしいものでと云ひながら、氏は蓑笠を被てうしろ向きに歩いて行く雪中人物の半打を示された。其畫風は四條系統で、「あなさむしたひちのうちやみのかさのゆきはらふ手もまづ氷けり」の贊句があるが、其花押によつて呉春ではないかと思ふとの事であつた。

なほ其話の序から最近手に入られたと云ふ四條派の寫生帖數十册を示された。八木奇峯と云ふ人の手になつたものも其他の畫人の手になつたものも交つて居る。其或ものは文鳳ではないかと云はれる。いづれも半紙を綴ぢた帳面へ矢立を以て花卉風景を寫生したものであるが、其京都附近の風景寫生には中々忠實に手をかけられたのもあるし、また今は既に無い建築物などの、史料となるべきものもありさうである。

名所畫の話から、松川半山が大阪から招かれて挿畫を描いたと云ふ「再選花洛名勝圖會」と云ふ書物の、丁度坐右にあつたのを取出されたが、私はこれをはじめて見た。私自身も

持つて居る「都名所圖會」よりも後から出たので、それに對して再選と冠されて居るがこれは「都名所圖會」よりも精細であり、其東山の部數册を刊行したゞけであとが續かなかつたと云ふことである。

「狂詠都名物集」と題して狂歌狂詩等に青洋君章と云ふやうな畫人が挿畫を描いた三册もの、これもはじめて眼にしたが、小山氏の話では其青洋と云ふのはどうも素人畫かきで、其道樂的な出版ではないかと云ふ。用紙や色刷など相當贅澤を極めて居るが、畫には素人臭い所がある。君章と云ふ方は筆法に四條臭が多くやゝ達者でもある。

午過ぎ大分冷えて來たなかを、なほ廣小路の親類朝永博士へゝ廻つた、其處でも又酒飯を饗されて、大分長坐をした。博士の話は明治初年の工部大學に廻つて、其校舍の位置が今虎の門のどの邊に當るかと云ふやうなこと、あの建築材料は船底へ入れて輸入された煉瓦をはじめとして木材其他みな舶來であつたとか、維新當時の叛將として知つて居た校長大鳥圭介が意外にも佛蘭西學のハイカラであつたとか、鹿鳴館が出來るまへ其ホールが外交團の舞踏場に貸されるのを學生達が憤慨したものであるとか、學生の制服は胸高のバン

ドにつめ襟で船形帽であつたとか、私の知らない節圍に亙つて諄々と說かれるので時の移るのも知らず、夫人が泊られてはと云はれるのを辭して木屋町二條の宿藤岡に歸つたのは十一時頃であつた。

山　科

山科と云ふ處は大津から京都への途次屢々通りはするものゝつひ立寄る機會がなかつたのであるが、これも緣者の一人である小林氏の邸宅が其處に在ることを知りながら訪ねたことがないのを思つて、急に寄つて見ることになり、三條から出るバスに乘つた。

蹴上げの都ホテルの下を通つて藥專の門前を過ぎり毘沙門通の停留所で降りて其赤屋根の洋館はすぐに知れた。それは電車の線路を跨ぎ省線のガードをくゞつて山手へ登りかけた所である。主人が應召して八日市の飛行場に勤めて居れらる留守を若い夫人がその幼い子達と共に暮して居られる。私の訪問はやゝ意外であつたと思ふが、私は今殆ど使つて居ないと云ふ其二階の廊下から大津の方角を眺める處が畫になると思ひ、早速ながらそれを水畫の小品に描かして貰つた。國道をはさんで右左から迫る山、其前の常綠樹の群、それ

が邸内の庭樹に續いて居る。

傍に火鉢を置いて描いて居るうちに雪がちらついて來たが、永くも降らない。櫻もあるし、若葉の頃は嘸美しいことであらうと思ひ、その午過ぎのツバメで歸京しようとする私は畫き終へてそこからそこ〳〵に辭した。

自動車で木屋町の宿に送られてからまだ一寸時間があるので、私は川向ふを卽寫した、その時にまた少しばかり白いものが降ちた。此處から見る加茂川も細くなつて、夏になると其上に床の建つ岸邊の小川は水が涸れて居るので、宿の隣りの別莊を過ぎつて其水の通ずる高瀨川も今は全く水なしになつて居る。

此宿は先代の女主人が亡なつて丁度三回忌を濟ました處であると云ふが、其若い娘さんが主人となつて業を續けて居る。室に置かれた與春の二枚折屏風はまだ蕪村の畫風を繼いで居る頃のもので芭蕉の幻住庵の記を三個の圖を入れて二枚に書いたものである。賣らぬかと勸められる客もあるが、折角先代の大事にしたものであり、家の飾りにもなるから手離すことを躊躇して居るとの話であつた。

此家には今故人となつた靈華百穂の作品もある。私の泊つた次の間の襖間にも百穂が知人を紹介した、ユーモア交りの畫入手紙が額仕立にされて懸つて居る。

最上川

山形に開かれる展覽會の審査を頼まれた其機會を利用して十月の末數日を最上の僻地に暮した。新庄から西南七里ばかりを隔てた最上郡の肘折と云ふ溫泉場の客となつて居たのである。

其地方出身の若い畫家の二人と態々迎へに來て呉れた肘折溫泉の惠比壽屋主人と同乘の自動車で先づ本合海に出で、最上川を渡りそれに注ぐ所の支流である烏川に沿ふて段々山路にかゝるのであつた。稻田の刈入は既に濟んで、稻の束は杭に掛けられて居る、それが田面に點々と列つて小春日に照らされて居た。

一寸自動車の具合が悪くて山坂を進みかねたりしたがそれでも無事に溫泉に着いた。國より山村の僻地であるが、湯の宿が其處に十餘軒もあらうとは思はなかつた。私達の宿と定めた惠比壽屋は同行M君の親類になつて居るので極めて心易く客となることが出來た。

私は着いた日の午過ぎからすぐに鄕土人物の畫に着手した。もとバスの車掌をしたこともあり、今はなめこ茸の罐詰工場に働いて居るもんぺ穿きの娘をモデルに賴んだが、眼の細く頬の赤いおんぼりした顏の少女であつた。私は其女を宿の後の倉の石がけに腰掛けさせて寫した。其處は午すぎずつと日陰になつて居るので畫くには樂であつた。倉の彼方は日のあたる小路でそれに境する亂れた柴垣がある。もんぺも土地によつて一樣ではなく此邊のは米澤あたりとも又少し違つて居る。併し布地などに概して古風が失はれて行く樣に見える。私は四日ばかりかゝつて此畫を仕上げたが、午前中は銅山川（烏川を此邊では斯う呼んで居る）に架る橋の袂にある蕎麥屋の二階からの眺めを横畫に描いた。幸ひに好晴が續くのでこれも豫定通りに仕上げられた。右は銅山川に沿ふ臺地から、其うしろの逆光を負ふて靑い陰をなす山なみ、淡黃から黃、橙黃、朱、紅等の色とりどりの雜木もみち、

其間に立つ杉の木、ところ〴〵瀬をなして白波の立つ銅山川の青い水と河原、左りは温泉村のうしろの倉と堤防とが入つて居る。それは隨分廣い圖取りであるが、私はこれを寧ろ古風に嚴肅に寫さうとした。

蕎麥屋とは云ひ條それは此邊の茶屋らしく、夜更しをすると見えて、私の行く朝九時頃女達はまだ一室に寢て居ることが多い。併し其等の女達も起きて家のことを働く時は矢張もんぺを穿いて居る。

宿の食膳にはなめこやまひ茸がよく出るが、なめこの小さいのは皆鑵詰になるので、宿が使はれるのは傘の開いた大きいのばかりである。坂田方面から來るので山間でも魚類にさう不自由はしない。

其宿には内湯がないので私達はすぐ向ふの共同湯へ入つた。それは疵湯と云つて疵によく利くと云ふことになつて居る。肘折と疵湯何だか聯絡があるかに見えて面白い。

一夕戰捷を祝ふ提灯行列が此山間にも行はれた。小學生などの交つた少人數のものであるが、暗い溫泉村に提灯の火、却つて引立つて見えるのであつた。

畫きかけの畫が一段落ついた日の午後私達は宿の主人に案内されて官行と云ふ所まで紅葉見に行つた。矢張銅山川の上流に沿ふて谷を分け入るのであるが、其道の果てに官の製材所があり、道其ものも製材所の爲めに近年作られたのであると云ふ。其製材所へ行くまでに楢、橡、山毛欅等の黄紅葉の非常に美しい樹林を過ぎつた。殊に山毛欅は幹と云ひ葉と云ひ形容しにくい程の美しさをなして居た。道の所々に架けられた橋が皆カーヴをなして居る、それを宿の主人が流線型ですと云つた。

肘折の歸りに私達は最上川舟遊を勸められ、本合海まで引返して最上川沿ひに古口まで西した。其處から舟に乘つて川を降るのであつたが、其の日も極めて穏かな小春日和であつた。ところ〴〵小浪の立つ瀬を乘り切るのであるが、大體に於て舟は流るゝに任せて悠々たるものである。舟人はたゞ櫂をもつて少し水を掻くに過ぎない、

私は兩岸山の迫る高屋と云ふあたりに一寸上陸して紅葉の川下を上から望む一圖を作つた。芭蕉の「奥の細道」にある白糸の瀧と云ふのは現にそれから少し下つた處に懸つて居る。それにしても芭蕉は何處から舟を下したものか判然しない。五月雨頃だから「水みな

ぎりて舟あやふく」もあつたのだらう。「五月雨をあつめて早し」の句の趣は此季節では全く味はれない。

古口清川間は汽車の一帳場であるが、それは相當に長く、舟行二時間を費すのであつた。清川の町を庇ふ屏風のやうな趣をなして居る松林には維新戰役の時銃彈もあつたと云ふ。清川から汽車に乘り途中下車して津谷のN氏の家を訪れ、新庄に着いたのは夜に入つてからである。

歐洲の旅

英國に關して

今決烈に頻して居る日英會談に際して、人は英國の考猶を云ひ、反英の運動に加つたりして居るが、私は自身の經驗に徴して、こゝに聊か英國の長短を語らうとする。

我々美術人の仲間には佛蘭西學のものが自から多數である結果、英國を下値するものが少くない。巴里まで行つて居ながら海一つ彼方の倫敦をすら訪れないで歸つて來るものが多いのであるが、私は英國なり英國人なりを好まぬにしても、倫敦にある美術の大蒐集、卽ちナショナル・ギヤラリーの名畫やブリチツシュ・ミュージアムの古彫刻を見ないのは非常な損失であることをよく云ふのである。ルーブル宮の豐富は云ふ迄もない事であるが、美術部として倫敦のナショナル・ギヤラリーがそれに比べて經まりよく、又其列品の粒ぞろひであることは衆知の事實である。

巴里の住みよさは定評のある所であるが倫敦も決して住みにくい所であるとは思はないセントポール寺や取引所あたりのビジネス中心の街路の狹さ暗さなどにも或古色があつて面白いと思つてゐるし、昔の乘合馬車時代の面影の殘つて居る二階のバスなどにも或趣味があつたと思つて居る。尤も私のは一九一一年、同一二年の頃と一九二三年頃と二回の外遊經驗を其礎としての話であるから、最近それがどう云ふ趣になつて居るかを知らない郊外の新住宅などは巴里のそれ等に比べて倫敦附近のものゝ方が概して好趣味であると云ふ印象を受けた。

美術家仲間には英語を話すものが少いと云ふことも、自から彼等をして英國に親しましめない原因であらう。私の知つて居る或佛蘭西文學者の如きも、「英國へは行きたくないですな」と漏して居たが、それには格別な理由があるのではなく、たゞ佛蘭西語の話せない國へは行つても面白くないと云ふだけの偏見から、そう云ふのであつた。私はどの國に對してもそんな先入觀を持たないので、英佛獨伊西等にはそれ〴〵の面白さを感じつゝ旅行することが出來るのであつた。

米國の禁酒――それは到頭貫けになつたが――は馬鹿げて居たが、英國の節酒はなかなか具合よく行つて居ると思つて感心した。時間の制限をして酒を賣ること、小さな料理店が酒類を置いて居ないことが節酒に役立つのである。鄕に入つては鄕に從ふ流儀の私は、佛蘭西、伊太利で葡萄酒、獨逸で麥酒を呑みながら、英國では酒を呑まずに過ごす日も多かつた。

併し英人に酒好きの多いことは夜間のバーの繁昌によつても容易に察することが出來る。故人石橋和訓が私を其等のバーに導いたので、私は其光景を觀察した。これも石橋に連れられて、アカデミーの畫家ヒューズ・スタントンを其畫室に訪れた時彼はすぐにウイスキーの盃を出した。

乳母が幼兒を載せた乳母車を道傍に置いて自身酒屋に入つて行くやうな圖も見たがこれは却て歐大陸の方で見なかつた現象であり、英國に飲酒家の多いことを證する一例であると見た。要するに酒好きが多いから節酒の必要もある筈である。

私が行つた一九二三年の夏は英吉利としても特に暑かつたさうであるが、いくら暑くて

も冷い飲料を要求しないのが英國民の習慣である。リツチモンドの川邊などに茶店があるがそこで注文したレモンスクワツシュのたまぬるいには閉口したし、又場末の酒屋で飲んだ麥酒も生ぬるかつた。彼等は冷藏庫で冷す等の方法をとつて居ならいしい。ハムステツド方面の私の宿の附近にしても氷を買はうなどゝ云ふことは思ひもつかない。いくら暑熱が嚴しくても彼等英人は茶ばかり飲んで居るらしい。

眞に冷いビールを飲まうとすればピカデイリーあたりの獨逸ビールを賣る店に行かねばならぬが、美術館の閉館後位にはまだ其店が開いて居ないので困つたことを覺えて居る。

スタウトの方はまだいゝが、バスとか云ふ英國ビールのまづさと云つたらない。それは全く馬の小便に近い。然るに永く英京に住む日本人などで其バスに贊意を表して居るものがあるのは意外であつた。無論それに比べれば、日本の麥酒が數等優れて居る。

英國の食事の單調無味なことも定評がある。"Toujours Roastbeef"（いつもロース・ビーフ）と佛人が冷評する通り、其ロース・ビーフすらが中產階級では日曜の御馳走になつて居る位である。尤も朝飯にベーコン・エグスや魚の乾物などを攝つて佛人よりもヘヴイ

ではあるが、大體食膳の變化を求めることが少い樣である。つまり馬などが毎日同じやうな藥を食つて平氣で居るのに近いのである。これも善く云へば單純素朴と云ふことにならう。慣ひ性となることは恐ろしいもので、これも永く英京に居る日本のビジネスマンなどは、佛蘭西料理は濃過ぎる、平常喰べるには淡泊な英吉利料理が却つていゝなどゝ絲護して居た。それにつけても日本の食べものの變化に富んで居ること、材料の範圍の廣いことなどをつくづく有難いことゝ思ふ。

道を尋ねると丁寧に敎へて呉れ、こちらがそれに對して銅貨を握らせるとサンキューと微笑む英國巡査は感じが悪くないが、一體英國人は容易に親しめない人種である。一つ處に住んで居ても人から紹介されない限り挨拶を交したりしない。其點が佛人とは大分違つて居る。こちらもまだ若い時で應待にも慣れなかつたが、ジョージ・ヘンリーと云ふ貴家の、チエルシーの私の宿の近くに居るのを紹介もなしに一度訪ねたところが、戸口へ出て來て澁々應對し、自分の畫を見て呉れと云ふ私に對して批評なんか出來ない、忙しいとけんもほろゝの挨拶であつた。

一九一一年の冬倫敦に遊んだ時、私は日本から着て行つたつりがねマントを羽織つて街を歩いて居た。さうすると出會つた看護婦等がクスクス笑つた。それは多分自分等の被て居るマントに似たものを私が着て居ることを異樣　風俗として笑つたのであらうが、西班牙などでは皆マントを被て居るのだし、それは結局彼等英人の世間見ずの致す所としてこちらは寧ろ憐れむ外はなかつた。

巴里などではどんな異樣な風俗をして居ても、人が笑ふなどゝ云ふことは滅多にない。それはあらゆる國々の風俗を見慣れて平氣になつて居るからである。

英人は美術上に於ても同樣世間見ずの點がある。自國のものを一番いゝと思つて居る樣な處がある。それは英語と云ふものをノーブル・ラングエージと稱して誇つて居るに等しい。若い畫家でまだ英海峽を越えたことがないやうなものも相當に多い。

併し島國的であるだけに十八世紀以來の其國獨特の傳統を保つて居る處はある。所謂ジエスメルマンリーの手際のいゝ又さう下品でもない肖像畫などはたしかに御國の藝である。ロイアル・アカデミーの畫をけなす人も多いが、公平に見て佛蘭西の春のサロンにあ

るやうな大甘もの、いや味なものが少いだけアカデミーの方がまだ辛抱出來る樣な點もないではない。日本では石橋和訓が肖像の名人と云ふ樣な評判を取つたけれども、あの手でもつとずつとうまい畫がアカデミーに澤山出て居ることを思はねばならぬ。

準會員中から投票によつて會員が補缺選擧されると云ふ其制度も依然續けられて居るが、夫婦共畫家であるナイトの夫人の方が一足先に正會員に擧げられたなどの面白いこともある（尤も最近夫君も遲ればせに會員になつた樣であるが）此ナイト夫人は日本の上村松園に相當するであらう。現代英國第一の女流畫家で畫もなか〳〵巧い。

美術上の新運動なども歐大陸に比べて英國への入り方は非常に遲れて居る。日本に比べても遲い位であつた。

曾て日本に來て居たベーナード・リーチの如きも日本に居る間に後期印象派の洗禮を受けたりしたものである。

釋迦や孔子やジンギスカンや亞剌比亞の歐洲侵略などにかなりの頁が費されて居る所からエヲチ・ジー・ウエルズの「世界略史」をあまり嬉しく思はぬ英人もあるらしい。基督

と同程度に釋迦や孔子を重視することが氣に入らぬのであらうが、實は其方が公平なのであつて、我々には首肯されるのである。

要するに彼等は白人の優越感と云ふ先入見を棄てなければ駄目である。これは英人ばかりでなく歐米人全體に對して云はねばならぬことであるが、白人の永遠的優越と云ふ偏見を止めて歴史上世界の文化が廻りもちになつて居たやうに、今後も廻りもちになり得ることを自覺する必要がある。

歐洲公園雜觀

歐洲の公園を見て羨ましく思ふことは冬季に於ても綠色を保つ彼芝草の美しさである。風土上あゝ云ふ芝草は日本では不可能なのであらうか。倫敦や巴里に於ても其黑ずんだ建築物鋏柵枯木等と此芝草との對照がたまらなくいゝ。霧の現象と綠草の散在とが其等の都

市の多の寂しさをどれ程補ふて居ることか。

巴里の公園と倫敦の公園との對照も仲々面白い。無論例外もあるが、巴里のは主として森の下道をドライヴさせたり歩かせたりする樣に出來て居る。ボア・ド・ブーローニュなどが其代表的のものである。倫敦のはづれにある、例へばハムステツド・ヒースやリツチモンド等の大公園は其廣大無邊な芝原の上を何處でも自由に歩き、坐り又は寢ころび得るやうになつて居る。此方がより多く解放的である。英國のそれには尙其上にオークの大樹が點在して其低く張つた下枝によつて夏日絶好の日蔭がつくられる。これは巴里のリユクサンブール公園其他にもあるが、鏡椅の貸腰掛が倫敦の諸園にも放置してあり、自由に人の使用に任されて居る。それに腰かけて居ると何處よりとも知れず番人がやつて來て低廉な料金を徵收して行く。あの制度も日本の公園に學びたいものであるが、公德心の乏しい日本に於ては實施出來ぬものかどうか。一寸した小品の卽寫などには畫架を携帶せずに行つて、さういふ腰掛の二つを借りて私は其一つを畫架の代用にしたこともある。兎に角公園はなるべく人をゆつくり休ませる筈の場所であるから、ベンチや貸腰掛の類を精々豐富

に配置したいものである。

其荒されることを恐れて日本の公園は大體に於て芝生のなかに入れない主義をとつて居るが、それにも拘はらず亂暴な子供達や田舎者によつて可なり荒される、實に困つたものである。

羅馬のボルゲーゼの園のやうなものは何しろ古色を帶びて樹木もよく茂つて居り、人工が既に自然化されて居るから落着きもよい。傘のやうな形をした松なども其處に點在して有力な特色をなして居る。矢張森の下道主義が勝つては居るが、人の入るに任せた草原も相當にあつたかと記憶する。

水邊の公園としては北歐ストツクホルムのものなどが最も美しかつたと思ふ。皇族にして畫家である所のプリンス・ユーゲンの御殿のある處なども實に清潔で美しかつた。水邊と云へばこれは公園とはなつて居ないかも知れぬが、獨逸のボツダムの湖畔の景色なども公園的に美しいものである。夏行つたのであるが其湖にはヨツトが浮べられ、湖水をめぐる丘のうへにはよく茂つた樹々に圍まれて別莊が散在して居る。

南獨逸ニユルンベルヒの、圓い又は角の塔の所々に附いた堅固な城壁の外濠のあつたあとが青々とした散歩道になつて、花など植ゑた美しい公園になつて居たのも羨ましく眺められた。江戸城外の如きも濠の水が美しくなつて居るならそれでよいが、若しそれを清麗にして置くことが不可能であるならば、寧ろニユルンベルヒ式の花園的散歩道にでもした方がよいのではないかと思ふ。

ミストラル

——南部の旅——

一九二三年、彼關東大震災のあつた冬十日ばかりを私は南佛諸地の旅に暮した。其旅行があまり樂しいものでなかつたのには種々の原因があつたが、其一つは確かに季節の南佛を吹きまくる烈しいミストラールの風であつた。

寂り旅と云ふことに私は寧ろ平氣な方で、寂しさもある代りに氣樂さのあるそれを悦ぶのであつたが、十二月二十二日マルセイユを出帆する箱崎丸で歸朝の途に就くと云ふ、先きのつかへた旅であるが、私の氣持ちを落つかせぬ所へ此ミストラルの風が祟つたのである。

私は十二月十二日十時二十五分の夜行列車で巴里のガール・デュリョンを立ち、翌日の午後オランジュに着いた。オテル・ド・ラ・ポストの客となつて羅馬の遺跡たる凱旋門と古代劇場の跡とを見たが、疲れても居たし、風も吹くしするので畫など描く氣にもならなかつた、又畫になる程のものもなかつた。

さうして其翌十四日にはもうアヴイニョンへ行つて居た。佛蘭西の汽車は此頃どうなつて居るか知らないが、其頃は發着が實に不定で、時間が過ぎても構はぬから兎に角驛へ行つて見ろ、間に合ふかも知れぬと云ふ樣な有樣であつた。其日も九時四十分の發車時刻を過ぎて居たが、これが一時間も遲發した爲めに優に間に合ふのであつた。アヴイニョンの宿はブラース・クリョンにあるオテル・デュ・ローブであつたが、午後早速法皇宮を見物

して、前に「美術新報」などの紹介で知つて居た彼特色ある壁畫を觀た。それは土田麥僊などの日本畫家を悦ばせた筈であるが、其多少近東趣味を帶びた自由な筆は東洋人全體に訴へる所がある。

翌日も風が吹き而かも曇つて居るなかを市中の見物に暮した。ドームの寺へ入つたり、又ローヌの河畔を逍遙したり、城壁に沿ふて歩いて見たりした。ブランギンの畫いた法皇宮は何處から見たのであらうかと頻りに物色したのであるが、どうも其見場所が分らなかつた。尤もブランギンのは彼一流のやり方で此建物を精々莊嚴化してはあるのだらうが。

ヴイルヌ・ーヴ・レ・ザヴイニョンの廢市を見舞つて、シヤートルーズ僧院とミューゼエとを一覽したが、何だか白つぽけた寂れた所であつた。十六日マルセイユに着いて舊（ヴイユー）港（ポール）に沿ふオテル・ナウチイクと云ふのに宿をきめた。此側に幾軒か列ぶ宿の窓からよく畫家達が舊港を瞰下ろして畫くのであつた。

翌日午過ぎの列車でクラスコン乘換ニームへ行つた。こゝではアレーヌのそばのオテル・シュヴアルブランを宿として、さう遠くもないメーゾン・カレーから泉の方までを一

巡して見た。宿屋の名としてシウヴアル・ブラン（白馬）とかローズ・ドオル（金薔薇）とかリオン・ブラン（白獅子）とか云ふ古風なのに私は至る所興味をもつのであつた。楕圓形をしたアレーヌは宿の窓から見えるので、私はそれの一端と枯木とを鉛筆でやゝ克明に寫したりした。巴里のマドレーヌ寺の手本となつたと云はれるメーゾン・カレーの内部にある古典彫刻の斷片のなかには面白いものがあつた。ヂアナの殿堂のある「泉の圖」は季節のいい時であつたら可なり美しいものであらう。ラブラードなどの好みの題材である。私は此園と其近くの高みにあるツール・マーニュとで二枚の小さな水畫を畫いた。ニームには二泊した譯である。

翌十九日の朝八時半の列車でモンペリエーへ行つたが、こゝでの主なる興味はミューゼ・フアーブルにあつたから、すぐにそれを觀た。併し其中で最も面白いのは彼クールベーのパトロンであつたブリュアスの蒐集である。其なかにはドラクロアのものもあつたが、クールベーのは「浴みの女」「ブリュアスの像」「出會ひ」などの重要な作である。併し此「出會ひ」は彼の作品中上位にあるものではないと思つた。此ミューゼーには尙スル

ベランやリベラなどの西班牙派もあり、又ダヴイツト・アングル、其他ペルビゾン派のものがあつて、地方的美術館としては見應へがある方である。

ヴイクトルユーゴー街の一料理店に午食して後凱旋門植物園本寺のあたりを歩き午後三時過の列車でアールへ行つた。オテル・ヂュ・ノールに着いたのは夕六時過ぎであつた。アールでも天氣はよく晴れたが相變らず風が吹いて弱つた。二十日の日はミューゼー・ラビデールとサン・トロフイームとミューゼー・アルラタンとを一覽し、午後はアレーヌとコンスタンチンのチルメと古劇場とを一巡した。アレーヌあたりは馬鹿に明るく白つぽかつた。

ヴアン・ゴーグの畫いたやうな古風の服裝をしたアールの女は今何處にも見られず、たゞ僅かにミューゼー・アルラタンの番人の女が或らにそんな風をして居るのを見る丈であつた。私は其處で小さな風俗人形の一つを土產に買つた。アリスカンの石棺の置いてある並木路はヴアン・ゴーグの畫とあまり違はぬ趣をなして居た。翌二十一日の朝レボーとモンマジュールとへ自動車で行つたが、レボーのやうな民家の廢趾と云ふものも珍らしい。

其晩マルセイユへ歸つて漸くミストラルのなかの南佛旅行を終つたのである。

マラガ

西班牙の南のはづれマラガの港へは其處からジエノアの方へ行く船に乘る爲めに行つたのである。それはもう二た昔も前の一九一二年の春であつた。

グラナダに數日滯在したあとで、私が其港に着したのはたしか三月の七日であつたらう普通列車の三等に乘つてダラ〳〵で行つたからでもあらうがアルハンブラの丘を朝早く降りた私は其日の二時過ぎにマラガへ着いた。當時の「三田文學」に寄稿した「旅カーパ」と云ふ私の西班牙記行の末の方に私は此市のことを次ぎのやうに書いた。

『フランセス・エリオツトと云ふ女の書いた西班牙旅行記には、マラガのことが散々に罵倒してあるが、成程其通り風つぼく汚塵ぽくて日影の少い騷々しい市である。大體商業

の地で我々の來る可き處ではない。人氣の惡いこともナポリに似て居るが、其興趣に於て到底比べものにはならない。グラナダの首寺院にも閉口したが、此處のは外觀がそれ以上にひどいので中を觀る氣になれなかつた。巴里の流行に似て非なる異樣な服裝をした女を此處の町に見るが、セヴイリヤなどには殆稀れであつた。たゞ兩腕に紐の長くついた魚の籠をぶら下げて、町を賣り歩く魚賣は一寸珍しい風俗で、それが人形にもこしらへてある。アルカサバ（城砦）の廢趾はジプシーの住むに任せてある。それは海を見晴らす小高い處にあつて、最形勝の位置を占めて居る。町中に畫材を見出し得なかつた予は好んで其アルカサバの近くを逍遙つた。

予の乘つてジエノアに向はうとする甕逸の船は三月六日出帆と云ふ昨日の日附けになつて居るから、急いで其汽船會社へ行つて聞いて見れば、まだ入港して居ない、明日入るだうと云ふ。西班牙獨特の明日明日（マニヤナマニヤナ）でこんな面白くない處に長く滯在することにならなければいゝがと少し心配になつて來た。』

一寸市を外れた川沿ひに行つて一枚水畫を畫いて見たが、それはどうも旨く出來なかつ

た。すべてが汚つぽく白つぽくて明る過ぎるのが取扱ひにくいのであつた。一つ海を隔て向ふが亞弗利加なのだから砂漠的なのも仕方がなかつた。

だから二三日滯在する間外にすることもないので、よくアルカサーバと云ふ廢趾のあるあたりへ行つては二三枚の水畫を描いた。其一つは「我が水彩」の中へ收めた。「アルカサーバの下」と題するものである。

「我が水彩」に「二月の末つかた」と書いたのは私の思ひ違ひであつたので、三月の初めと云ふ方が正しい筈である。

「アルカサーバと云ふのは昔の城かなどでこの畫の右の家並のうしろに立つのは其崩れの一部分である。其崩れのなかにもジプシー等が住んで居るさうである。此道は爪先上りに登つて其廢趾の傍迄行けば海の方へ降りるやうになる。此赫々たる南方の日光に對しては私も平常の地味な色調とは打つて變つた花やかな彩りのものを畫くやうになつた」と私は此畫に就いて記したが、南國の强い日射は表はれて居ると思つて居る。陰になつた白壁も道路からの反射があるので、それは可なりに明るく、庇裏などは暖い橙黄色をして居た。

蒼空に風に追はるゝ僅かの白雲の飛んで居ることも此畫を引立たせる一つの條件となつた。

私が「ヂエホ」（Diego）と題する、だらしない服裝をして胸にカーネーションを挿して屈托のない微笑を含んで塀の前に立つ一人の若者――それもジプシーらしい――を卽寫したのも多分此場所の近くであつたらう。それは「アルカサーバの下」を描いて終つてから其あとで描いたか、或は他の日にであつたか今記憶は不確かである。

周圍に人立ちがして居たが、畫き終つてポーズをした其男に錢を與へたあと、幸ひにも其等の群集のなかに錢を欲しがるものが出たりしなかつた。

マラガの宿の想ひ出の一つとしては西班牙の海岸料理「アロース・ア・ラ・ヴアレンシアナ」と云ふのを其處で食べたことである。これは米の飯にあさり貝を貝殼のまゝ炊き込んであるのが異樣の觀を呈するのであつたが味は仲々旨かつた。「ヴアレンシア風の飯」と云ふ名である。

明日明日（マニヤマニヤ）と引延ばされた船のマラガを出帆したのは三月十日の晩であつたから、丁度四

日ばかり滯在したことになる。その獨逸船は荷物船で、ハンブルヒからビスケーを廻る途中暴風に會つたとかで豫定より遲れたのであつた。十人ばかりの御客を便乘させるに過ぎない其船はオリーヴ油の大樽をマラガで一ぱい積み込んだ所爲もあり、又天氣もよくて、私はバルセロナ、マルセイユ等に寄港してジエノアに着くまで暢氣ないゝ航海をした。船で獨逸料理を味ひ、又船の人達から獨逸語を敎はつたりした。

マラガは今政府軍叛軍いづれの據る所となつて居るか知らないが、碌な建物もない市のことだから假令壞されても惜しくはない。アルカサーバの廢趾と其附近の畫的な民家が殘るなら其外にあまり惜いものはない。併しトレドの如きは全市が美術品と云つてもよい位な所で、叛軍の籠るアルカザルを爆破する云ふやうなことをやられては堪つたものではない。それは單に西班牙の損失ばかりでなく、世界の損失となる譯である。

北歐の思ひて

壁かけの模樣めづらし北歐の雪の象を材としたれば

これは私の古い歌の一つであるが、一寸註解がなければ意味の通じない所があるだらう。これは一九一一年の春羅馬の萬國美術博覽會內瑞典の部で見たフエスタ(Fjaestad)の圖案を詠じたのである。

フエスタなどと云ふ人は日本に殆ど知られてゐないが、特色ある裝飾畫家であると同時に、懸毛氈、敷物、椅 などを自ら圖案してもゐる。樹幹の倒に水へ映つた處を、懸毛氈にしたり枯芝と落葉とを敷物に織り出したりする所に彼の自然主義を窺ふことが出來るのであつた。私は彼の畫を通して北方自然の時殊の詩趣と神秘とを味ひ得たのであるが、遺憾ながら冬のスカンヂナヴイアの實際を知らないから、これ以上何も云ふ資格がない。

北歐の雪を寫した近代畫としては印象派の大家モネエの一作が日本の黑木蒐集に入つて居る。また私はアンデルス・ソーンのスキーする人物を點じた一風景を知つてもゐる。

その國の土のおもてをいつよりか穿てる湖の敷知れずして

これも六かしい歌である。穿てると云つてもこれは人間業ではなく、まだ人間などが生

れて來る前の地球の表面が出來つつある際のことを歌つたのだから一寸見當がつきにくいであらう。實際、那威、瑞典あたりの地圖を披いて見ただけでも如何に無數の湖水が其處に在るかは解る。然し私の短い旅は其等の湖水を訪れる暇を私に與へなかつた。

ベルゲンからオスロー（其頃はクリスチアニアと云つた）への夜行列車の途中にヴオツスと云ふ湖水を見た譯であるが、丁度眞夜中で暗く、ただ湖畔の家々の比較的賑かな燈光を望み得たに過ぎなかつた。

同船の客の云ひけり故郷を斯くも離りて君來しかなと

これは英國のニュー・キヤツスルから私の乘つたベルゲン航路「レダ」と云ふ船に同船した一英人が私に對つて言つた言葉を材料としたものである。實際英國人が那威に渡る位は大した旅でもないが、極東の日本から北歐と考へると隨分果てから果てになるので、英人の此長嘆も無理ではない。

ニュー・キヤツスル――ベルゲンの航路は三〇時間乃至四〇時間と云ふことになつて居る。ベルゲン近くなつて船が島の間をくぐつて行くやうになつてから案外手間がとれた樣

に記憶して居る。ベルゲン港へ船が入つたのは時間にするとたしか午後九時半頃であつたと思ふが、まだ日が暮れきつてゐなかつた。然しそれは七月末だから、もう日の長い頂上を大分過ぎて居た。

ベルゲンはオスローに次ぐ那威の市であり、畫的な港であつたが、惜しいことに一九一六年の大火の爲めに建物の大部分が燒けた。一體木造が多かつたのであるが、これから出來るのは防火建築になるらしい。丁度日本などと同じ事情である。

其昔獨逸商人が勢力を振つたと云ふハンサ商館の建物の列ぶあたりにはまだ舊ベルゲンの面影が殘つて居る。木造の破風は紅殼色黃土色綠色白色等思ひおもひに塗られて畫的である。

那威の西岸は山が截立てになつてゐる。魚市場の先からケエブルカーに乘つてフレイエンに昇ると、すぐに人氣を離れた山の景色になるなども變つて居る。此丘からビェフィヨルドを見下ろすのは畫にしにくかつたが、私は石山傳ひに少し歩いて、谷を隔てた向ふに聳えるウルリケンと云ふ峰を水畫に寫した。

洞門の數をくぐりて幾曲りすれどフィヨルドに倘沿へる道

これはベルゲンからオスローへ向ふ列車での所見を詠じたのである。ベルゲンに居る間に或代表的なフィヨルドを見に行きたいと思ひながら、それが出來なかつたのは、單線の汽車の回數が非常に少い爲めであつた。從つて私はオスロー行の列車でフィヨルド風景を眺めることを以て滿足しなければならなかつた。

其寢臺車は午後六時二十分に出るので夕方三時間ばかりは沿線の風景が見えるのであつた。

ベルゲンを出た列車はネスツン迄南してそれから大迂回に山と山との間をガアネスと云ふ處まで北すると、ソェルフィヨルドのなみ〳〵とした水にぶつかる。それからの線路は北フィヨルドに沿ふて行くのであるが、奥へのぼるに從つて山は奇聳さを加へ、其姿の倒まに水に映るのが凄い程の深味を見せる。實際畫に描いて見たい美しい景色である。

隧道が幾つかある。隧道へ入つてもうフィヨルドにもお別れかと思つたのは幾度であつたか　とう〳〵スタンゲルと云ふ處から汽車はフィヨルドへ注ぐ溪流に沿ふて走る樣になるのであつた。那威にフィヨルドの數も多いが、北ソェルフィヨルドも其優れた一つであると云はれてゐる。

低きより船を擧ぐると閉したる堰を餘りて落つる水かな

これも説明なしには解りにくい歌であらう。私はストツクホルムを立つてヨータ（Göta）運河によつてヨーテボリー（Götedorg）へ行つた。私は一九二三年の八月十一日午前十時パラス號と云ふ小さな汽船に乘つたが、此船は運河と湖水とを航路として瑞典の東岸から西岸へぬけるのである。

船は極小さくて僅に三十人の客を容れるに過ぎなかつた。けれども純然たる遊覽船でふ奇麗に出來て居り、又食事も旨かつた。

ソオダアビンと云ふ處から運河に入るのであるが、其頃私はもう寢臺に横はつて居た。翌朝ベルクからボレンスベルクにかかる、其處に閘門が幾つか設けられてゐて、船は逐次に高い水に登つて行く樣になる。水門は中々大規模に旨く出來てゐる樣に見えた。一方を閉めて他の一方を開けると云ふ手續に相當間が要るので乘客は其間勝手に堤上を歩いたり

した。私の歌はこれを種にしたものである。謂はば船が山に登るのである。

ヴェテルンと云ふ瑞典一の淡水湖に沿ふヴァステナには古城があるが、此城見物の間、汽船は暫時待つて呉れる。城の角にある圓形の建物の靜かな水に映るのがよかつた。

折々は夕立もした。あまり狹くない沼のやうな處を通る。松の生えた浮島のやうなものがある。蘆も生えてゐる。甲板に出て見ると、非常に美しい虹が沼に向つて垂直に近くかかつた。虹は二重になつてゐて湖面へも鮮かに映つた。（昭和七、八）

印度支那の話

私は小説を讀むことが嫌ひではないけれど、その暇を持たないため、充分現代作家のものに眼を通して居ない。日々の新聞にのせられる小説を、気紛れに幾日か續けて讀みもするが、忙しさに途絶えて居ると、もうそのあとを讀むことが面倒になつたりする。女達は

よく眞つ先に續きものゝ小説を讀み、それから社會面に移るやうであるが、私達は政治面社會面などにまづ眼を通して居る内に外出の時間が來たりして了ふ。

電車の中でも書籍雜誌を讀むが、それは多く專門書の方に屬する。稀に風邪をひいたりして微熱のために床にでも就くとすれば、それは小説を讀むに絶好な機會を私に與へる。

夏季の長い旅行は私達には製作のためで、決して靜養ではあり得ないが、然し暑い日中を室にごろごろして居る間や、雨に閉ぢ込められて居る日などは、長い小説を讀むに適せぬでもない。私はかういふ風にして、數年前福島縣蛇ノ鼻の伊藤氏別莊にある間に、何時か讀まうと思ひながら果さずに居た長塚節の「土」を讀了した。今の人には回りくどいかも知れぬその丁寧な描寫を私は一々嚙みしめながら讀むことを樂んだ。今日の階級鬪爭意識を以て描かれたものよりも、長塚の「土」などの方が農村の下級民生活に屬して一般の同情を喚起する所が多いのではないかと思ふ。それは意識的な誇張がなく、ありのまゝに客觀的に寫されて居るためである。森田恒友君も「土」の推奬者の一人であつたと思ふが私達がこの小説に味方するのは、平常寫景のために田舍を歩き回つて、「土」に寫されて居

る様な光景の細目を知悉して居るためもあるだらう。

知らぬ土地のことを取扱つたものにあこがれるといふこともあり得ると同時に、知つた土地の風物を描いたものに尙深く心をひかれるといふこともあるはずである。さういふ意味で、私はスカンヂナヴイアに遊んでから、諾威のハムヅンやボーエルのものが尙よくわかるやうに思はれて來たし、またスペインの風土を知つて居るために、ブラスコ・イバニエスやパロハなどの小說をも一層面白く思ふのではないかと思ふ。イバニエスも無論英譯でばかり讀むのであるが、さう高級ではないにしても、兎に角面白く讀ませるといつていいのではなからうか。私の讀んだのは「小屋」「死者は命ず」「地中海」「アレナの血」「裸體のマーハ」「メー・フラワー」「ラ・ボデガ」等であるが、日本人向きであるにも拘らず邦譯が割に出て居ないのはどういふ事情か知らぬ。（全集等には入つて居るだらうが）

「死者は命ず」の舞臺であるマヨルカ島へ私はまだ渡つたことはない。たゞ一九一二年の春私と一緒にマラガから乘船した女子供の一家がバルセロナに上陸してマヨルカに向つたのを知つて居る。私はその人々の話によつてその島の美しさを聞いただけである。

イバニエスの主題としたのは、その島に住む特別の部落の娘と戀に落ちた勇敢な貴族の青年の冒險であるが、映畫にしても面白さうなものである。「小屋（チョジン）」の舞臺となつてゐるヴアレンシア地方も私のまだ知らぬ所であるが、其處に田舍のさびしさや住民の偏狹さや迷信などが如何にもそれらしく寫されてゐる。

今年一月の末から二月のはじめへかけて私は別府に十日ばかり滯在した。宿の龜の井は寧ろ空いて居た。毎日外へ出ては畫を描くことに追はれる、非常に忙しい旅であつたが、私はそこの書架に偶然一册のフランス小說を見出して、暇々にそれを讀んだ。字書なしで細かい所まで分るやうな私の語學ではないけれど、どうにかこの體の意味は取れるのであつた。それはたれか外客が遺して行つたものかも知れない、昨年あたりパリーのクレスから出版された“Beau Navire”叢書の一つでカツスヴイルといふ人の“Sous sighe le de Boudha”と題するものであつた。（「佛陀の合圍のもとに」とでもいふのか）カツスヴイルの何人であるかも知らない癖に、何故それが特に私の注意を引いたといへば、その小說が佛領印度支那に關するものであつたからである。印度支那については、一九一〇年の昔、私

はたゞMM汽船の寄港地なるサイゴンに上陸して一夜を過ごしただけであるが、それでも安南土人を見て居るためにそれが私の好奇心を動かしたのである。

この小説は四つの短篇を集めたもので最初の二篇が「淨」（Pures）次ぎの二篇が不淨（Impures）となつてをり、その各のはじめに佛陀がうなづいたとか微笑んだとかいふ詩的な序言めいたものがはさまれて居る。前の二つはその主人公が安南人であり、後の二つはそれがフランス人になつて居る。

私はこの小説を讀みながら、びんらう樹の實をかむことのために安南土人の唇と齒ぐきとが血にでも染まつたかのやうに眞紅になつて居るのを見て異樣に感じたことを思ひだした。それは熱い國の人に涼味を與へるものだと聞いたが、自身試みたことはない。そのエキゾチツクな趣はこの作者をも動かしたかのやうに見える。

巻頭の物語りはアノイの兵舍に勤務して居る土人兵の「ドイ」（陸兵の階級を意味する樣であるが下士位な所に相當するかどうか）の一人が雲南境の山地の護りにつくべく、妻子をアノイに殘して行く、その任地で土地の女に通じ、一男を擧げ、後任滿ちてアノイに歸

るといふ筋である。この物語によると、日本におけるやうに、安南人が如何に男の繼嗣を熱望するかといふことが分る。そのドイの本妻は女子かりで男子のないことをひどく苦にして居た、だから彼女にとつて夫が任地で他の女に通じたことに對する嫉妬よりも、男子が出來たといふ悅びの方が勝つて居るやうに見える。

その男の子を生んだ女は、もと支那雜貨商の妻となつて居たが、それを振棄てゝドイの許に走つたものである。ドイを追うてアノイに出でその留守宅に我子を訪ふのしほらしいくだりもあるが、彼女はまたそれと同時にその先夫たる支那商人から賴まれた商用をアノイにおいて果すことを忘れもしなかつた。今私の眼のまへにちらつくのは、サイゴンあたりで出會ふ所の黑い衣裝をまとふた安南女の姿であるが、それ等はいづれも下級のものであつた。またサイゴンに比べてトンキンの方は風俗容姿を異にして居るかも知れない。

二番目の物語りはフランス政府のもとに働く安南人の役人の妻が夫の任に就いたタイといふ地方固有の豪族に横戀慕され、死を以てその汚れを償ふといふ筋である。然しその豪族は尋常手段で思ひの遂げられぬことを知つて、意に從はねば夫をどうかするといふやう

に脅迫したために、女は覺悟を定めて、全く動かないしかばねのやうな身體を犧牲とし、そのあとで毒を用ゐたのである。死を以て操を守りおはせたのではないが、可憐な節婦といへないことはない。

三番目の物語は矢張僻地の任についたフランス官吏と「コンガイ」とに屬するものであるが、これは彼れにコンガイの媒をした一人の安南女に對して書かれたといふ形を取つてある。コンガイといふのは本における洋妾（ヨウシヤメン）と同意味の安南語であるらしい。

この官吏はカフエー兼雜貨店のやうな所に足を繁くしてそこの主婦と親しくなるが、これと特別の關係を結んだ譯ではなく、それの媒（なかだち）によつて他人のコンガイを世話してもらつたのである。これ等の安南女は皆片言のフランス語を話して、どうやら意味は通じるらしい。この官吏は佛人と關係のない女を欲しいと思つたのであるがカフエーの主婦は却て洋妾の方が自由になるといふ意味のことをいつて居る。

四番目はフランスの一將軍とそのコンガイとの物語。ところがそのコンガイは甚食へない女で他に一人のドイを情夫とするばかりでなく、將軍が目つけ役のやうにしていれた料

理人の一兵士をも味方とすべく、それとも通じて居る。然るに三人の男を相手とすることは如何にも無理なので、コンガイはやがて料理人を袖にするやうになり、料理人の女に對する反感ともなつた。

コンガイは將軍に向つて料理人を讒訴したが、半信半疑の將軍は一日これを試むべく、外出と稱して實は室にこもつて居るとも知らず、留守と思つて又謀反氣を起した料理人がコンガイの艶姿に戯れかゝると、一目許すと見せた女が急に男を締つけて置いて大聲に將軍を呼ぶ“Coehon”といふ將軍の大喝となり料理人のお拂ひ箱となるといふ筋である。

小說として大した價値のものではないかも知れぬ。曾てドイツの友フリツ・ルンプはゴーガンの「ノア・ノア」を評して「私あまりすきません、ロチ眞似しました」といつたが、これもロチ系統のエキゾチズムの一種である。

たゞこれがはからずも別府の宿において、私にサイゴンの明るい空と赤い土と安南土人の唇の赤とを想起せしめ、印度支那に關する好奇心を刺激したことをいふまでゝある。私が今毛筆畫の手ほどきをしつゝある所のイギリス娘ミスGは、此間から一人の老婦人と共

に香港、印度支那、ジャワ等の旅を續けてゐる。歸つて來たらこの人について委くあの邊の印象を聽くことが出來ようと思つてゐる。

眼

或國の代官が正義の爲めに自分の眼と息子の眼とを抜かせた話。

ヴアレリウス、マキシムスの第六册に、或國の代官をして居たカロニユスと云ふものが或種の罪を犯したものは其兩眼を失ふ可しと云ふ法令を出したことが記してある。

少し經つと代官自身の息子が其罪に陷つた。民は免しを乞ふて止まない。慈悲の有難いものであることを思ふと同時に、正義の忽諸にす可からざることを省み、又しきりに彼れを說く人民の愛情を思ふて、彼れは正義と慈悲と兩立するやうな取定めをした。

彼れは一つの眼を息子から、又今一つの眼を自身から抜き取る可しと云ふ裁判を下した

巡禮と醜婦との話

一人の巡禮が或罪を犯して囚はれた。彼れは千フランの罰金を出すか、兩眼の使用を禁ぜられるか、何れかに服さなければならぬ。

巡禮は金を拂ふことが出來なかつたので、其土地の習慣通りに繫られて眼隱しをされることになつた。

彼れが刑場迄街中を引廻されて來た時、大金持ではあるが非常に醜い一人の女が此巡禮の若く且綺麗なのを見て、其何故刑場へ引かれるのであるかを訊いた。さうして彼れが千フランの金を拂へぬ爲めであることを知つた。

女は若し自分を妻にするならば千フランを拂つてやつてもよいと云ふことを人を以て傳へさせた。巡禮は承知した。彼れは女の面前へ出された。

處が女のひどく醜いのを見た巡禮は、女の見える樣に眼隱しをはづして與れた人達に向つて云つた。

『早く、早く、又眼隱しをして下さい、こんな不愉快なものを始終見て居るより寧ろ何にも見えない方が結構ですから』と。

其國の主は巡禮の言を聞いてこれを嘉し、彼れを呼迎へて其罪を容し、自由の身としてやつた。

女と梨の木との話

或所に一人の金持があつて正常に美しい女を妻に持つて居た。此男は馬鹿に妻を愛し又嫉妬深くもあつた。

ところが神意によつて此男は眼を患ひ、日の光りを見ることの出來ぬ盲目の身となつた。さて此しつこい男は女が逃げはせぬかと心配して、妻の傍を離れず、其手の屆く處から遠ざかるをさへ容さない。

こゝに其土地の或男で此女を慕ふものがあつたが、いつも其夫が傍に居るので女と物を言ふ機がない、悶へに悶へてつひには頭も亂れやうとした。

男の己れを思ふこと深いのを見て女は云つた『御覽の通り此人が離さないのでどうすることも出來ません』

斯うして男は、どうしたらいゝか、どう云つたらよいか分らない。戀こがれて死ぬかとも思はれた。彼れは女だけと會ふ方法を思ひつかなかつた。

女は此男のなす所を見て、それを助ける一法を案出した。彼女は藤の長い管をこしらへてこれを其男の耳にあてがひ、夫に聞えぬやうに話をすることにした。彼女は男に云つた『どうもほんとに御氣の毒です。私一寸旨いことを考へました。庭へ行つて澤山實の生つて居る梨の木に登つてしばらく待つて居て下さい、後から行きますから』と。

男はすぐに庭へ行つて梨の木に攀ぢ登り、女の來るのを待つて居た。

さて女が庭へ出る時間になつた。さうして彼女は其夫を伴つた。夫は矢張其傍にくつゝいて居る。妻が云つた『其梨の木の頂邊にある旨さうな梨が欲しい』夫は『誰か呼んで取らせなさい』と云つたが妻は『自分で取りたいのです、自分で取らなければ面白くない』と云つた。

それから女はそれに登る可く樹の傍へ來た、夫は一緒に樹の根の處迄來て外のものが後から登らぬやうに兩手で樹をしつかりと抱へて居る。

さて女は梨の木へ登つて其處に待つて居た友に會ひ、二人は樂しく語らつた。二人の重みに木が搖れて梨の實の幾つが夫の頭の上へ落ちた。

そこで夫が云つた。『おまへは何をして居るのだ、梨の實をみんなはたき落すつもりか』

これに答へて女は『私は或枝についた梨が欲いので斯うしなければ取れないのです』と云つた。

此時上天に在す主とペテロとが此出來事を見て居られたが、ペテロは主に向つて云つた

『夫を欺いて勝手なことをして居る此女を御覽ですか、妻の所業が見える樣に此夫の眼をあけることを御命じになつては如何』

其時主は云はれた。『ペテロよ。夫の眼があくが早いか女はきつと言拔の辭を見出すだらう。今男の眼をあけてやるから、おまへは女がどう云ふかを御聞き』

そこで男の眼が急に開いた。さうして見上げては女が何をして居たかを見た。おまへは

其處で其男と何をして居るんだ。おまへはおまへ自身と私との名譽を傷けて居る。これで女の操はどうなる。』と云ふと女は卽座に答へた。

『私が斯うしなかつたら貴所の眼は開かなかつたでせう』

夫はこれを聞いて滿足した。世の女が如何に貞節であるか又如何に速かに言拔けをするかと云ふことが此話で分るであらう。("Levellino")

ブルジェを讀む

木村太郎君からブルジェの譯書二種「大戰と女たち」と「愛」との寄贈を受けながら、年の終りの繁雜にまぎれて容易にそれを讀むことが出來なかつたが松過ぎての正月大阪への旅にそれ等を携へて行き、其前著の大半を車中で讀了した。一體私は書物を讀むことが嫌ひな方ではないが、單行の書物や雜誌の寄贈が重なると、つひそれを卽坐に讀むことが

出來ず、坐邊に積んで置くやうになるのであつた。特に文章の細部までを味はふとするやうな書物は、忙中の拾ひ讀みを物足らず思ふの結果彷徊しにもなるのであつた。

ブルジェの名は聞いて居たが、恥しながら私は今迄その作品に接する機會を持たなかつた。フローベール、モーパッサン、ゾラ、アナトール・フランス、ピエール・ルイ等のものは英譯を通して多少知つて居るが、ブルジェは今度木村君の飜譯によつて其面影を窺つたに過ぎない。木村君の記す處によると辰野隆君がこれを漱石に比し君自身はこれを鷗外に較べると云ふ。兩君の評はいづれも當つて居るのであらう。

兎に角それは大人の文學であり、また健全なる文學である。道德主義とカトリシズムと傳統主義とがそれを一貫して流れて居ることは誰にも看取されよう。併し又其手堅いなかに或和らかみもあり、相當寫實的な描寫があると同時に空想も無いではない。その決して難解なものでなく、而かも廣い範圍の讀者を持ち得るであらうことも漱石鷗外二巨匠に似て居ると云へる。

一體カトリシズムに就ては私は全く門外漢である。それに就て何事を云ふ資格もない。

晦澁と傳へられるクローデルのカトリシズムに就ても何等知るところはない。近代繪畫の方でモーリス・ドニーのカトリシズムなどなら、其處に格別な神秘もなく、大體が甘美なものであるからこれを受け入れるに難くはない。私はたゞカトリツクの流れを汲んで居る木村君がブルジェの譯者として極めて適任ではないかと察するだけである。

ブルジェは數年前八十三歳の高齢を以て逝いたので、「大戰と女達」も「愛」(我く者)もみな其晩年歐洲大戰以後の作品である。其等のものが今次世界動亂に際して譯されたことも時宜を得て居ると思ふ。

ブルジェの之等の作品に出て來る主要人物はみな良心的で一方からは頑なにさへ思はれるであらう。而かも作者はそれ等に味方し、それ等に對する同情を以て書いて居る。南佛海岸に住む退役老軍人エムリイにしても其二人の娘マドゥレエヌとラザリーヌにしても、またラザリーヌと相思の仲なる、過去の秘密をもつ所の青年將校グラフトオ大尉にしても何れもみな良心的で義理堅い。

小說「ラザリーヌ」(大戰と女達の原題)の舞臺はブルジェ自身が別莊をもつて居たと云

ふ南佛コストゥベルであるが、假令私は其邊を知らないにしても、ラザリーヌの姉娘マドゥレエヌが其郊外に住んだとあるアヴィニヨンあたりは知つて居るし、また一九二三年の冬マルセイユから日本への船に乘らうとする前、其邊の烈しいミストラルの風は經驗して居るので、可なりの實感を以て吹き荒ぶミストラルの描寫を受け入れることが出來た。

東海道の急行車内で、さう云ふミストラルの描寫と、ラザリーヌとグラフトオ各の惱み、グラフトオと前妻との葛藤などを讀んで居る時、窓外には今迄晴れて居た青空をかき消して急に吹雪が起り、名古屋邊へ來ると地上が白雪に掩はれて居るのを見た。前妻を殺して自殺の恐れのあつた、グラフトオ大尉を救ふラザリーヌの熱情は此小說のやまであるが、彼女をして勝たしめたのは卽ちカトリシズムをして勝たしめたのに外ならない。三部に分れて居るうち、其第一部と第二部とを書信の集合にしたことも技法的に面白いと思ふ。

「裁く者」の主人公ブレエズ・マルナの頑さ、其偏狹な正義觀は、弟アメデのやくざと對照する多少の漫畫的誇張を以てよく寫されて居る。弟の死をも冷遇し、其妻の賴みを斥けたブレエズではあるが、前に弟から其妻に與へた手紙を示されて、漸く反省する所があり、其遺兒を世話するやうになると云ふ筋であるが、此主人公のストイシズムも可なりに徹底的なものである。

「秘めし寶」の主人公ミシェル・クウデルクと云ふ若者も、其偶然に得た手がゝりによつて、先祖の舊主の城館に忍び入り、其處に隱された寶石函を取り出しながら、それを舊主の後裔たるクロード・ド・シュルシュモン孃に渡し、以て其寶石函を私したと云ふ疑ひを受けた先祖の寃を雪ぐと云ふ馬鹿堅いものであるが、今は家庭教師に身を落しながら其寶物を受取ることを斷るシュルシュモン孃もそれに負けずに良心的であつた。結局寶石函は此二人の手を離れたが、若者はシュルシュモン孃と云ふ得難い寶を得るやうになると云ふ筋である。

ブルジェによつて書き現はされたストイシズムや正義觀や義理堅さに似たものが、私は日本にもあつたと云ふことを思ひ出した。例へば西鶴の「武家義理物語」などのなかにもさう云ふものが見えたと記憶して居る。東西共通するところがあるのは面白いことである。

木村君の譯文は明瞭であり穩雅であつて、誰にも讀み易い。例へばラザリーヌなどの女性の場合わたくしとせずにあたくしと言はして居る如きにも其心づかひが窺はれる。これは無論小さな間違ひであるが、私をして指摘することを容されるならば、巴里で賣立の行はれる場所オテル・ドゥルオーをドゥルオー邸と譯されたのは當らない。邸よりも寧ろ館であるが、館とも邸とも云はずに單にオテル・ドゥルオーとされた方がよいのであつた。

木村君の二譯書によつて興味を惹き起された私は引續いて廣瀬哲士氏譯の「死」をも讀んで見た。それは成程五十版と云ふやうな驚く可き版を重ねたことの首肯はれるほどに面白いものである。こゝに描かれて居る神經外科の大家オルテーグ先生の無宗教的現實主義も可なりに徹底したものである。其若い夫人カトリーヌも先生の思想に共鳴し、先生の死期迫るを知つて心中を約したりするが、戰傷を受けて入院した夫人の從兄弟ル・ガリツク中尉の眞摯なカトリシズムの感化によつて心中を思ひ止まると云ふ筋である。

これは傍觀的立場に居るオルテーグ先生の門下マルサル博士の手記の形をなして居るが、其無宗教主義實證主義に對し又一方の精神的なカトリシズムに對し均しく中正な立場

をとつて居ることが、此問題小說に臭味を持たしめない所以である。

オルテーグ先生の一こくは、彼「一年有半」の中江兆民が癌を自覺しながら死期迫るともあくまで宗教の救ひを斥けたことを聯想せしめる。讀者は中尉の信仰にも敬意を表すると同時に老醫の一こくを憎くまず、寧ろ其悲壯な生涯に同情せしめられる。

其第三章オルテーグ先生の邸宅にある西班牙古畫の蒐集のくだりは、私の專門に關することでもあるから、試みに原書と照合はして見たが、"Le maître Catalan be Saint-Georges"をカタラン・ド・サン・ジョルジュと記したのは明らかに間違ひである。これは十五世紀のフランコ・フラマン畫派中カタロニアの失名大家で「聖ジョルジュ」の畫によつて知られて居る一人を指して居るのであるから、カタロニアの「聖ジョルジュ」の畫家とでもしなければ意味が通じない。"Ces nom de artsites"は「これらの藝術家の名前」となつて居るが、此場合は畫のことを丈を言つて居るのであるから、「これらの畫家」とする方が妥當である。美術術語に通じない譯者は往々斯う云ふ譯し方をする嫌ひがある。

この續きにある"Panneau"も第八章の改造された病院を見舞つたル・ガリック中尉の

言葉のなかの"boiseries"Peintes"をも同じく畫板と譯してあるのは甚だまぎらはしい。前者は板に描かれた古畫であるから板繪とす可く、又後者は塗られた板壁であるから塗板壁とでもす可きであらう。之等はいづれも些細なことであるが、聊か老婆心までに書き添えるに過ぎず、此譯書全般を傷けようとする意は毛頭ないのである。

東京雜記

環境の美醜

私自身としては環境の美醜と云ふことが始終氣になつて居る。自分達の今住んで居る東京の如きは、大震災を經由して居るから止むを得ないと云ふかも知れないが、人が其外貌の醜さに麻痺して居るやうに見えるといふことが、私を憂へしめるのである。

震災後の假建築の許容期限は疾うに經過したのであるが、其の醜いバラックは平氣で立つてをるし、人はいゝ氣になつて、防火的の本建築に着手しようとしない。これには無論經濟事情のあることも認める。併しそればかりではない。都市を美しくしようとする熱が缺けて居る爲めもあると私は思つて居る。

都市美協會と云ふ半官半民的の會があつて、私も其一員となつて居るが、折々抗議をしたりすることはあるにしても、まだ大した積極的の働きをして居るとは云へない。これも人が斯う云ふ會の存在を必要とする程都市の美醜に關心をもつて居ない爲めに充分仕事が

出來ないのである。

要するに都市の美醜に關心を持たせるやうな教育が肝腎だと云ふことになる。西洋に旅した人ならば、どんな最貧眼見ても、日本の現在の都市が彼地のそれ等に比べてすつと醜いことを感じるであらう。地震がなくて古代からのいい建築が殘存することも西歐の諸市を美しくして居る條件ではあるが、住民達が其環境を美しくしようとする念が代を追うて働いた痕を認め、羨ましく思はざるを得ない。

若し外貌が醜くとも精神的に美しくさへあればと云ふやうなことを考へるものがあるとすれば、それは明らかに誤りである。醜い外貌のなかに美しい精神は宿る可くもない。市中へ出て省線の高いプラツトフォームから民家の屋根なり裏口なりを瞰下ろす時、その汚さ醜さに心を暗くしない日とてない。

立看板を立てたりポスターを貼つたりすることを、美觀を理由として警察はやかましく云ふが、市營になつてから却つて一層ひどくなつた街頭の糞桶陳列は、美觀上差支へなしとするのであらうか。

電柱の撤去は久しく叫ばれながら、いまだに行はれない。例へば電柱の立つて居ない日本橋の三越と三井との間や、三菱の事務所區域の或道路などの如何に美しいかを、他の電柱亂立の街路に比べて察す可きである。

すべては資金の不足に歸せられるかも知れぬ。又今非常時に際してそんなことを云つて居られぬとも云ふであらう。それは尤もであるが、私は美しい都市の姿が、毎日人の腦裡に描かれてそれが理想とされて居るのでなければ、假令資金が樂になり、事變が濟まされても都市美の進歩は望まれないと思ふ。

私達の住む都市――其處には宮城をめぐる御濠の美しいことなどの例外はあるが、――の醜さがどれ程私達の生活を惡くして居るかは實に圖り知れないものがある。殊に私達美術に關係するものにとつては、其環境の惡さがどんなに害をなして居るかを察して貰はねばならぬ。

かへすがへすも恐ろしいのは醜いものに對しての痲痺である。既に此痲痺にかゝつて居る人々は、早くそれから脱却しなければならぬ。さうして美しい環境の建設を心がけねばな

らぬと思ふ。

愛市心

「市會府會なんて云ふものゝ此頃の有樣はまるで亂痴氣驚きだね」と成席で正木美術院長が云はれたが、實際あゝ云ふ機關の改革は何時になつたら出來るのであらう。

これは無論一面觀に過ぎまいが、私は愛市心の缺乏と云ふことが其一原因をなして居るのではないかと思ふ。實際又今日の東京には愛市心を勵ますに足るものが甚だ少い。城壁の類を別として、日本の建造物に耐久性のものが少いことも、愛市心を旺ならしめない一因となるのであるが、關東大震災が下町一帶を灰燼に歸せしめたことも亦他の一因に數へられるであらう。コンクリート、アスハルトを以て鋪裝された道路が自動車を滑らかに走らせるやうになつた美點は誰でも認めるであらうが、中心を外れた街々の家並の貧弱な單

調さは、假建築とは云ひ條實に人をうんざりさせて、理想と現實とのあまりにもかけ離れて居る爲めに、これをどうしなければならぬと云ふやうな眞劍な考へを人に抱かしめず、どうにもならぬから放つて置けと云ふやうな悲觀的な棄鉢な氣持に人を導くかと思はれる。

例へば私の生れた下谷御徒町のあたりなど、昭和通りと云ふ幅廣いものが出來たり、伊豫紋がつぶれたり、しのぶ川が無くなつたりして思ひ出の種となるものは綺麗に一掃されて了つた。震災の暴威は實につく〴〵と感じられる。其點假令市區の改正があつたにしても、山の手の方には何かしら古い目印がまだ〳〵殘つて居る。

それで下町としては、其中央部に震災で（燒けたにしても）破壞されなかつた建物、例へば東京驛とか丸ビルとか三越とか、又それから後に出來た種々の大建築とかが目印にもなるし、又段々其等に古色がついてなつかしみが加はりもする。愛市の心は斯う云ふ新らしいものによつて養はれて行く外はない樣になつた。

佛蘭西語の教官として日本に來て居る詩人ノエル・ヌエツト氏の手ずさびになるペン畫の東京百景が昨年暮青樹社に展觀されたが、其或物は既に繪葉書として刊行されても居

り、又ジャパン・タイムス紙上に載せられもした。スピリチュエルな筆ではないが、其處に自から詩的の感懷が寄せられて居ないでもない。私の最も珍とするのは、尋常の西洋人と違つて氏が日本の舊物ばかりを愛でることをせず、新らしいものをも取扱つて居ることである。ポール・クローデルと均しく、氏は江戸城の濠端の美しさを認めては居るが、それと同時に有樂町日比谷あたりの近代建築をも寫して居る。新舊文化の對照のやうなものも氏に訴へる處があるらしい。兎に角氏は日本人の或數を友人として居るし、よく現在の日本を理解して居る。格別畫を習つた人とも聞かなかつたが、其素描は割合に確實で又根氣にも勝れて居る。ヌエツト氏程の愛撫をもつて東京を眺める人が今少しあつて欲しいものである。

芝公園が改造されて其處に德川文化博物館なるものが出來る豫定であると云ふ。其博物館の内容に就て知る所はないが、それが私の望んで居たものゝ一部の實現となるならば幸である。私は巴里のカルナヴアレー博物館のやうな、東京市沿革博物館の必要を前から感じて居たのであつた、月島の埋立地へ市廳を新築しようとした東京市當局にさう云ふ考へ

が少しでもあつたかどうか。

芝の德川文化博物館には江戸城の模型などは當然列ばねばならぬ筈と思ふが、歴史と風俗とに亘つて其處に入る可きものは相當にあらう。江戸時代の地圖や風景畫なども當然其列品とならねばなるまい。明治時代のものは其處に收容され得ないが、小島烏水氏は頻りに明治時代の東京を寫したものを蒐集して居られるさうである。兎に角さう云ふ蒐集が完備され公表されるやうになることは、一般市民の愛市心を勵ますに有效であると私は思つて居る。

外濠

都市の美觀を問題とする或集まりの席で東京の堀のことがそれ〴〵に論ぜられた。神田の邊から芝の土橋に至る下町の外濠は史蹟上からも美觀の方からも大したことはないし、

第一汚くて困るからそれを埋めて建物の敷地にしたらどうかと云ふ案が市の方にあると聞いてそれに對する贊否兩樣の意見が出た。

贊成論者の方からはあの濠によつて丸の内有樂町一帶のビジネスセンターと日本橋京橋の商業區域とが兩斷されて居るのがよくないからと云はれたが、それには既にあの濠に沿ふて電車の高架線があり、特に長大な東京驛の建物があるのだから、濠を埋めたところで兩斷の事實が止まる譯のものでないと私には思はれるのであつた。

或は其中間をとつて、濠を埋めるなら埋めてもよいが、それを建物の爲めの敷地にしようと云ふやうな、しみつたれた考へを起さずに、西洋の或都市などでやつて居るやうに、これを空濠に乾し上げて、凹んだ公園を設け、花壇を作りなどして大人の散歩場所にも子供の遊び場所にもするがよいと云ふのもあつた。

私は先づ市の河川課長に對つて、あゝ云ふ堀や川の淨化が果してどの程度に行はれるであらうかと質したが、課長は親切に其等の堀や川の不潔の現狀を示し、不潔物が何によつて生ずるかを說き、また其淨化の方法に關して調査されたところを細かに說明されたので

あつた。それによると東京を貫く其等の堀や川を淨化することは必ずしも不可能でないことが分つた。數百萬圓を投じて兩國附近の墨田川と荒川放水路、それから日本橋川の或場所とに水門を設け、潮の干滿を利用して其等の堀や川に水を廻せば、淨化は或程度迄行はれやうと云ふのであつた。

私はまた其等の堀の水の汚さにも幾つかの等級があつて、最ひどいのは九段下飯田町から水道橋方面に亙るものであり、市で埋めようと考へた所謂下町外濠はそれに次ぐものであることを知つた。

若し淨化の方法が立つならば、其等の川や堀を埋めて了ひたくないと、其時私は唱へたのである。何故かなれば大震災の爲めにそれでなくもつまらなくなつて居る下町一帶に、若し其等の水が無くなつたら、それはどんなに乾燥無味なものになるか、想像するだにたまらないことである。震災で一掃されて下町には目じるしのやうなものがすべて無くなつて居る。淺草觀音の殘つたことなどは實に非常な有難さである。私のやうな東京生れのものにはそれが特に著るしく感じられる。

御茶の水の水は今實に汚く臭くなつて居る。いゝ形をした樹木の減つた、省線の線路に一方を壊された御茶の水は、見るかげもないのであるが、それでもあの水は保存したい。その水をたゝりにしてニコライと聖堂とをつなぐ聖橋のアーチなどが新らしい景觀を作りつゝあるのではないか。

一つ橋あたりの河岸は少年時代の私達に畫的だと思はれて居たが、それから神田橋鎌倉河岸一帶へかけてすべて壊れて了つた。常盤橋のなつかしい石の欄干も過去のものになつた。併しどうにかして水を淨め河岸に或設備を施してあの外濠を保存したい。

數寄屋橋のほとりにもなれば、獨逸寫しにしろ何にしろ船のやうな趣を帶びる朝日新聞の建物と水とのなじみ具合も萬更ではない。

あの邊には既に都會に住むものゝ目標となる可き一つの新らしい風景が出來て居る。水を廢しては朝日の建物は死ぬことにならう。

東京の市は隅田河口に位置することから、必然的に堀や運河の多くをもつ運命になつたものであり、それが都市の相貌（フイゼオノミー）を形造つて居る。その相貌を歪め、特性を減ずることは、其處に住む者をして市に對する愛着を失はしめる所以である。

ポスター税

ポスターの使用は段々增えるにも拘はらず、仲々傑出したのはあらはれない。尤も今は其本場の西洋に於てもさういゝものばかりある譯ではない。佛蘭西の廣告畫（ナフイシシ）の全盛を極めたのは、一九〇〇年前後で、彼ツールーズ・ロートレクやスタンランやボナール・シエレーなどが自畫石版のものを描いた頃であつた。たしかシエレー其人の處でさう云ふ藝術的なものが刷られたのであつたと記憶する。其等過去の廣告畫は今骨董的價値を生じて居る。委しい事情を知らないが、佛蘭西あたりでは廣告畫が皆街頭の壁に貼られるのであるから、版畫として蒐集されるやうなのは、一旦使用されたのでなく、何かの都合で貼られずに殘された分であらうと思ふ。貼られたものは決して剝すことは出來ない。

巴里の場末街のくすんだ壁の上に貼られた刷物は、其綺麗な色どりを以て街頭に畫趣を添えて居る。それは曾て巴里に客死した日本の畫家佐伯祐三に絶えざる資材を供給した。其畫趣は一つは横文字によつても生じて居る。だから日本で其眞似をしても漢字や假名を以てしたポスターであゝ云ふ畫趣が生ずるかどうかは疑問である。

大正八年上海に遊んだ時、丁度彼地に居合はせた波蘭の畫家ジエニエウスキーと聯合の展覧會をパレース・ホテルに催したことがあるが、私は自畫石版の大きなポスターを作つて、それを街頭の壁に貼らせて見た。上部に龍華の塔と榮花とを描いて下に歐文を入れた。街を歩いて見たが、或處には、それが三四枚續けて貼られて居て、仲々印象的であつた。

上海では一枚幾何と云ふ税金を課されたと記憶するが、既に貼られたあとのある壁は何處へ貼つても差支ないことになつて居た。あれはいゝ考へだと思つて居る。

巴里あたりにも可なり貼る可き處は多い樣であるが、處々の建物には 'Defened' affi-cher" (貼紙を禁ず) と書いてもある。

日本でも土地によつて、例へば大阪などは或塀の上に廣告を貼つてよいことになつて居るらしい。

實際汚らしい塀の上には廣告を貼つても美觀上何等差支ない筈である。東京でも破れかゝつた板塀、亞鉛塀或は工事中止中の普請場の板圍ひなどの上は廣告を貼つてもよいことにしたらどうかとかねゞ思つて居る。貼ることになると用紙の厚さを減じ得ると云ふ經濟上の利得もある。

たゞ大阪に於ける貼札があまり美しく見えなかつたのは、ポスター其ものが如何にも醜劣であるからであつた。

東京の如きも市の美觀の上から街頭のポスターを担む謂れはない。電柱や看板などの爲めに美觀は既に破れて居るのであるから其方からは問題にならない。

建物の所有者の承諾があつても貼つてはならぬことになつて居るらしいが、私には其意味が分らない。

單に一日位の短いものであるから、發見しても咎める暇がないと云ふ理由だかどうか知

らぬが、これ迄政談演說などの廣告が街頭に貼られて居るのを見たことは屢々ある。

あゝ云ふものを默認して、他のものに嚴しくするのは不當である。

私は寧ろ他國の例に倣つてポスター稅を課したらよいと思ふ。

一枚幾何の稅を徵して其しるしにポスターの端へスタンプを捺すなり切手を貼るなりすればよい。

これは一つのいゝ財源にもなるであらう。それは無論街頭のものばかりでなく屋內に吊されるものにも及ばねばならぬ。これがポスターの濫發を防ぐことにも役立つであらう。

自由と束縛

すべてのものに絕對の自由はあり得ない。生活でも藝術でもそれは同じことである。或束縛を受けながらそのなかで精々自由を得ようとする、それを稱して簡單に「自由」と云

ふのである。

彫刻ならば大理石なり靑銅なりの材料上の制限を受けるし、若しそれが戶外に建てられる記念像などの大作であるならば建築と共通する安定性（安定感ばかりではなく重心の實質的安定を意味する）の支配を嚴しく受けなければならぬ。

繪畫藝術にしても、それが壁畫であり額面畫であり、掛軸であり、屛風であるに拘はらず、皆其用途からと材料用具からとの制限束縛を受けねばならぬ。而して東西古來の名作は皆さう云ふ束縛制限のなかで最善を盡されたものである。

工藝になると其束縛制限は一層甚だしいものとなる。支那朝鮮の螺鈿の雅越は、貝の小片を稍不器用に殆ど同型に切つたものゝ繰返されたる使用に基いて居る。刺繡が其材料と技法との制限を越えて繪畫の模倣に傾くとき其墮落は始まるのである。無線七寶に雅味なきも同ノの道理からである。尙工藝に於ては繪畫などに比べて用途からの束縛を一層强く受けなければならぬ。

演劇は無論のこと、文學に於てもそれは同樣に云はれることゝ思ふ。小說など比較的自

由は多い譯であらうが、例へば日刊新聞の連載ものには其一日の掲載分に或きまりのやうなものが要ると云ふやうな束縛はある。

これは吟味の方の必要からであるが、漢詩は平仄と押韻との制限を受けて居る。短歌や俳句のやうな短い詩形も三十一字十七字の五七五調の束縛のなかでこれ迄働いて來た。たまに字餘りはあるにしても其例外は音調に障りとならぬ限り許されて來たので、決して原則とはならない。

「新傾向」が唱へられて以來俳句の字餘りは夥しくなつた。十七字の制限内では古いものしか出來ず、新思想はすべて字餘りか字足らずにでないと盛れないかの樣に思ふものも出來て居るらしい。併しそれは誤信ではないか。例へば「俳　研究」七月號卷頭の「草茂る」に列べられた一碧樓君の諸句の如き、皆其着眼は面白い、其處に季感もある。たゞ私共が之を誦しにくいのは必ずしも舊慣に捉はれて居る爲めとは思はない。君自身にしては其處に俳句の傳統的節奏があるとして居られるのであらうが、其節奏は一般に通りにくいものではないか。「草茂る」の諸句中十七字に盛られ得るものもあると思ふ。十七字の制限を受

けて必ずしも古臭くならぬ方法もまだ考へられる餘地があるのではないか。

若し如何にしても十七字の制限が窮屈であるならば、俳句の詩形を全く脱却して（俳句精神をもちながら）短小の新體詩とする方が、鑑賞上好都合であると思ふ。

私の此意見は俳句ばかりでなく、三十一字の制限を受けたくない字餘り短歌の作者に對しても同樣に呈さなければならぬ。

美術季漫談

政治家と美術と云ふ樣な題目で何か書いてみようと思つたが、どうも充分な材料がない。政治家との交際が少いからである。

曾て中橋德五郎が二科會を觀に來た時誰かに紹介されて挨拶をしたことがある。それは震災前竹之臺陳列館のバラック時代で、たしか其室は露人シェルバコフの奇妙な、模樣め

いた、又版畫めいた水繪の陳列されてゐた邊であつたと記憶する。所が其時の彼の態度が寧ろ傲慢であつたので、私はすぐこれに反撥し、碌々場内を案内もせず、またあまり會話を交すこともなしに分れたのであつた。

又今一度は國民美術協會が獨逸美術展を上野の日本美術協會に主催した時、私は委員の一人として日獨協會の會頭であつた後藤新平に獨逸の新美術を說明したことがあるが、其時の彼の態度にも全く謙讓が見えず、私はこれに對して或反感を抱いたのであつた。

中橋の場合は單なる見物であるからどうでもよいが、後藤の場合はそれと違つて、獨逸大使其他と話の交へられる爲めの、獨逸美術に關する豫備知識を得可く私に敎へを乞ふ立場であつたのだから、もつと謙讓でなければならなかつた筈である。固より私は彼に何等の恩惠を受けて居る譯でもない。年下であるからと云つて無暗に他を小僧扱ひにするのは間違ひである。美術と云ふ專門からすれば彼は全くの素人で玄人のこちらに頭を下げるのが本當である。例へば地位ある素人の碁打が年若き故を以て吳淸源を輕く扱ふことの出來ないのと同じである。

若いものを見下す此二人の態度は美術の輕視と無關心とに基づいて居るか、それとも單なる慣性であるか、何れとも定めにくい。後藤も中橋も相當偉い人物ではあつたのだらうが、私の第一印象は極めて惡かつた。

私は會話を交へたことはないが、展覽會を觀て居る態度としては加藤高明などの方が遙かによかつた。どの位の鑑識があつたか知らないが、彼のは美術と云ふものに相當敬意を拂つて居る樣に見えて居た。

其創立當時（明治二十幾年頃）唯一の洋畫團體明治美術會の幹事をして居た原敬が、後年政友會總裁として大をなして居た頃どの位美術に關心をもつて居たか、或はまた其等の趣味を全く忘却して居たか、機があつたら其近接者に訊ねて見たいと思つて居る。

帝展開設の時期にあたつて、よく私などに、此頃は御忙しいでせうと云ふ挨拶をするものが仲々多い。批評をしたりする爲めに忙しからうと云ふのではない、私も帝展に關係して居るかのやうに思つての挨拶であるから困つたものである。

我々が政友會、民政黨、國民同盟の差別を知つて居るやうに、政治界、實業界などの主

なる人々にも帝展と在野團體との簡單な差別位知つて居て欲しいものである。

日本畫彫刻で日本美術院、日本畫で青龍社、洋畫彫刻で二科會、洋畫彫刻及工藝で國畫會、洋畫ばかりで春陽會、獨立美術協會、彫刻で（繪畫もあるがこれは問題とされまい）構造社、朝倉塾等の在野諸團體の幹部は皆帝展と絶縁して居るものであつて、其出品者達も之等の民間展覽會へ出すと同時に、帝展へも出すと云ふことはして居ない（極めて僅かの例外はあるかも知らぬが）のである。だから今日文部省の美術奬勵事業は美術界の全部に亙つて行はれて居るのではなく、僅かに其一半を分擔して居るに過ぎないと云ふ事實を知らなければならぬ。

美術展覽會としては單に年一回帝展を觀るだけと云ふ人も仲々多いことであらう。新聞紙上に他の民間諸展のことが出て居ても、其等を不注意のうちに看過して了ふのであらう。地方人などになるとそれは一層ひどく、例へば或男が二科會に入選したのに對して、「御めでたう」を云ふのはいゝが、「今度は帝展ですな」を附加へたりする。二科を以て帝展への段階と見て居るのだからたまらない。

展覽會と云へば帝展、學校と云へば東京美術學校と、官尊民卑思想がまだ〳〵亡びては居ない。美術家の養成にしても、東京美術學校の收容する人員の數は微小なものであるから、それにあふれた人達は、日本美術學校、帝國美術學校、文化學院、京都の繪畫專門學校、太平洋美術學校、川端畫學校其他三都の數ある私立研究處私塾等でそれ〴〵に教育を受けて居る。これも官立の學校から最優秀なものが產出されるとは限つて居ない。

私が學校へ行くと云へばすぐ東京美術學校と早合點する人がある。つまり官立以外に美術を教育する場合がどれ程あるかの知識を缺いて居る爲であらう。私は文化學院と二科技塾とを見て居り、尙帝大工學部の建築學科にも繪を教へて居ることを此機會に吹聽して置く。

話は別なことになるが、少し美術品を集めたりして居るやうな鑑賞家がよく云ふことは專門の畫家に畫の眞贋は分らぬ、自分で畫を買つて見て、贋物をつかまされたりした擧句でなくては其鑑識が具はるものでないと云ふことである。これにも一面の眞理はあるだらう、が決してこれが全部ではない。

畫家が鑑定を誤ることもあるだらうが、技術上の經驗から、一瞥して眞贋可否を判別し得る强味もあるのである。鑑賞家が骨董屋などばかり信じて、畫家の鑑識を蔑視するのは間違ひである。

美術に於ける茶道の功罪は相半ばするものゝ樣に私は考へて居る。茶道の爲めに美術品が大事にされて今日に傳はつたと云ふ功もあるが、茶道の狹い標準から美術品の價値を定めたこと、美術品死藏の習慣を作つたことなどは其罪の方に數へられてよい。曾て信實の三十六歌仙繪卷が切賣りされた彼の事件の如きにも、茶道の累ひする所があつたと私は見て居る。其高價な爲めもあつたではあらうが、三十六に切つた方が茶席に使用しよいと云ふ功利的な考へが働いたと解するのは必ずしも僻目ではあるまい。西洋なれば恐らくはあの人數がこれを分賣する代りに醵金して、其完全なまゝを購入し、美術館に納めたであらう。

美術を公共的に樂むの風が日本では茶道其他に妨げられてまだ充分に興つて居ない。展覽會だけは先づ西洋から移植されたが、常設美術館の遲れたのも、美術を公共的に樂み且研究する習慣がないことに基いて居るだらう。

繪雙六

晩春の一日

四月の二十四日を私は種々のことに忙しく暮した。朝は本科の入學式と創立記念日とを一緒にやると云ふので、九時迄に文化學院へ行つた。今度女學部を卒へて本科の美術部に入學する四女をも伴つた。時間をキツチリと特に云はれたのであつたがいつも遅れがちの私が校長や文學部長の佐藤春夫君よりも先着したことは珍らしかつた、

何しろ今改築中で工事の音も騒がしい樣なわけであり、本科の校舍の半ばは取除かれ、狹い所で無理な授業をして居る有樣だから入學募集にも氣が引けたのであるが、それでも去年に比べて入學者が少しは多かつた。

校長と佐藤君と私とは其入學式の方にもまたそれに引續く創立記念日の方にもそれ〴〵

にスピーチをした。いつもなら晶子女史も何か話される處であるが病氣靜養中で其姿は見られなかつた。

晶子女史が見えて居ないのを幸ひとして私は記念日の御祝ひに次ぎのやうな戯歌を詠んで會衆を笑はせた。

學院と同じ齡をもてる子の業卒ふるまで時經ちにけり。

騒がしき音もしのばん新らしき學びの園の成ると思へば。

神田川堤の櫻あと絶へて文の華のみこゝに香れる。

此日私の同伴した四女は全く其第一の歌にあるやうに、學校の出來た年に生れて今年十七になるのであつた。

女學部の第五回卒業生生越千枝子の彈いた蘇聯ショスタコヴイツチ作のソナタと云ふのは音樂に通じない私などが聽いても可なり激しい所のある曲で、演奏者も相當骨が折れさうであつた。尙其あとで去年の卒業生本多信子がダン道子女史の伴奏で獨唱をした。

三樂病院や醫師會館などのある後ろの通は別として、文化學院のある通の中では今度改

築される學院のコンクリート造が最も宏壯なものとなつて周圍を凌駕することになるであらう。

私は食後二時から三時迄に行はれる高木長葉君の告別式に麻布四の橋の西福寺へ行つて焼香した。其寺は電車通に面して居てすぐに知れた。高木君は永年勤めて居た資生堂を辭してまたもとの畫生活に戻ると云ふことを聞きながら、つひ會ふ機會を得ないうちに此意外な訃報に接したのであつた。高木君とは大正のはじめ「藝術」と云ふ雜誌の刊行に協力した頃からの知己であつた。梶田半古の同門と云ふ關係から前田青邨小林古徑二氏の名が其死亡通知の友人總代中にあつた。前田氏は式場に列して居た。

車を丸の内に引返させたが、時間が少し早過ぎるので丸ビルに入つて、丸善支店にラテインイングリツシユの字典をたづねたら、幾通りかあるので本店の方から取寄せて置くとの事であつた。

海上ビルの東和産事の試寫室は可なり滿員であつた。例によつて高村豐周、田邊孝次、森田龜之助、それから南薫造諸君の顔が其うちに見出された「我等の仲間」(La belle

equipe）と云ふ佛蘭西映畫は仲々面白いもので、前の「巴里の屋根の下」などよりも出來がよい樣に思つた。ヂュヴイーイエーと云ふ監督の頭もいゝのだらう、、俳優達の自然な演技とすべてを貫く佛蘭西精神とを我々は味ふことが出來るのであつた。併しこれには別段の新らしい思想が盛られて居る譯ではない。斯う云ふ人間は十九世紀末頃から既に佛蘭西の下層に居つてそれが現代にまで續いて居ると私は見て居る。ジナと云ふあばすれ女が訪ねて來たジャンへの誘惑氣味に足を出して靴下を穿くところはカツトされはしないかと、海上ビルを出てから森田君などゝ話したことである。併し其位なエロ味は巴里のグラン・ギニョールあたりでは平氣で演じて居ることである。

其夜私は東京會館に於ける大倉男爵のオークラロ發表會に臨んだ。音曲のことに疎い私が斯う云ふ會に招かれるのは稍場ちがひの感もあつたが、日本畫に川合、横山の二…輩と深水、忠夫の二君や、小松信時、高等の音樂專門家や、臨風、大學、秀雄等の文學家や、知人の多數が居たから、さうてれもしなかつた。併し失明の樂人達、各流名取の女達などゝ同席する會は私にとつて珍らしいものであつた。

尺八の音色を取入れるに苦心されたと云ふ新樂器オークラロは性質上どうも琴三味線の日本樂器よりもピアノ、ハープ等の洋樂器とよりよく調和するかのやうに思はれるのであつた。

會果てゝ私は長田秀雄君と銀座をぶらつき、或酒場の薄暗い燈のもとで久しぶりに盃を重ね矢張バンの會時代とあまり變らぬ會話に夜の更くるを忘れたのであつた。

一日

昨日あんなに曇れたことだから今日は快晴と思ひの外、まだ天氣がぐづついて居る。借りになつてゐる諸方への返信をあらかた濟まして、十一時近くなつたから衣服を着替へて居ると玄關へ誰か來たやうだ。取次ぎのものに、もう會つて居る時間がないが何の用向かと訊かせたら、それを判然とは言はない、何でも靖國神社云々と云ふことだけは分つた。

自動車を呼ばうとして電話をかけたら生憎車が出拂つて居る。其處へ横濱のS君が來て、これから上野の二科會へ行くと云ふので、田端から省線に同乘する。同君は京成の地下線に乘換へる可く日暮里　降りた。京成の地下線は寛永寺などの反對を押切つて上野まで引込まれたのであるが、どう云ふものか乘客はあまり多くない。私の處から美術館へ行くには便利だから、此間鑑査の爲めに日參する頃もよくこれを利用した。

私は東京驛で降りて新海上ビルの八階に佛蘭西の商務官を訪ねた。甚だ迂遠なやうであるが、私は此新海上ビルなるものに初めて入つたことである。商務官の氏は私を迎へて、私に會ふ前既に私の繪を知つて居ると云つた。二科會で私の「松浦川朝靄圖」を見たが、單なる西洋模倣と違つて、西洋の技法を用ひながら日本精神をあらはして居る所がよいと云ひ、又藤田君の「メキシコに於けるマデレーヌ」其他一組の近作油畫の畫風が變つたのはよい、前の畫風は見馴れ過ぎたと云ふ樣なことを云つた。藤田氏のものも遠山陽子女史のものをも持つて居ると云ふ、畫の趣味豐かな此商務官とは大變話が仕易かつた。

巴里の一畫商から來春日本で佛蘭西美術の展覽會を催したいと云ふことを私の所へ云つ

て來ると同時に商務官の許へも云つて來た、それに就て商務官が一度私と會つて話をたいと云はれるから、今日午前十一時の會見を約したのであつた。既に十八日の評議會で、國民美術協會が前の佛蘭西展の場合のやうにまたそれを開催すると云ふ議決を經たことであるから、其旨を商務官に告げて其賛同を得た。ブロンズの大きいものは持つて來ない方がよからうと氏が云ひ、私もそれに同意した。佛蘭西の現代畫は抽象主義的のものが此間持來され、又マチス、ピカソ、ドラン、ルオー等のものを主とした福島氏蒐集が展觀されたりして居るが、曾てデルスニス氏の將來したやうな綜合的な大規模のものは數年間中絶して居る、だから今度の催しも愛好者と美術家との渴望を充たすに足るであらうと思ふ。

私は海上ビルを出て午食をとるべく丸ビル地階の竹葉食堂へ入つた。それは殆ど滿員に近かつたが、入つてすぐの所に漸く座席を見出し鰻を食べた。ラヂオの野球かなどの放送がうるさく耳へ響いて來る。私は野球を見たことがなく、從つて其興味の如何を知らないが、少くともあの氣忙しいアナウンサーの放送を聽いては反感が先に立つて、野球其ものを見ようと云ふ氣になれない。私の食事は其放送によつて大分妨げられた。美術季節に於

ける野球は特に我々に邪魔ものゝ感を與へて居る。

タクシを雇つて上野の美術館へ走らせた。土曜日の午後だから、幾分觀衆は多いやうである。併し今年は惡い天氣に祟られて、今迄の所では去年に比べて二千人近くの觀客を減して居る。事務所へ入ると東郷君が燕樂軒のランチを喰べて居る所であつた。併し君は其半分位を殘して女に片附けさせた。今日は東郷君と二人して京都行の畫を決定する役目をもつて居た。私達は第一室から順々にそれを定めて行つた。會員會友のものは二點以内、一般出品者は一點づゝと云ふことにしたから、仕事は單に同一出品者の二三點のうち一點を選ぶに過ぎない。荷物のかさばらぬ爲めに、私達は同等の出來なら成るべくより小さい方を採つた。藤田嗣治君のものと故古賀春江の遺作とは特に數を多くした。あとで勘定して見ると繪畫彫刻を通じて百五十點近くが減らされることになるから、多分京都の新美術館に都合よく收まるであらうと思ふ。

其處へ「美術通信」の記者が來たので、私は東郷君と共に、ありもしない二科の分裂とか紛擾とか云ふやうなデマを飛ばすことは止し給へと云つた。「審査の内容を漏らさぬやう

に會員の口を封じた云々」と書いてあつたのに對して、私は審査の内容を漏らさぬのが常識である、常識を知らずに變な書き方をしては困ると云つた。

美術館を出て北側に廻つたら菊地鑄太郎、坂井犀水、中澤弘光三君の來るに會つた。美術研究所を指して「まだ彼處は開いて居ませうね」と訊いたら、坂井君が「まだ開いて居ます」と答へた。

研究所の二階の室は、既に懇話會の和田校長の御話が濟んだ後であつたが、私は其四壁に掲げられた故人久米桂一郎先生の遺作を觀て廻つた。先生の畫はいづれも丁寧な上品なもので、概して筆は細かい。「燈臺のある風景」(一井氏藏)はたしか第一回の白馬會に出たものと記憶するが、當時の目錄にある「雨後の牧野」と云ふのが或はこれに當るだらうか。判然したことは云へない、久米先生の佛蘭西で描かれたものは二十八年の明治美術會と二十九年の第一回白馬會とに出し切られて、第二回の白馬會には小濱、江の浦、片瀨等の日本での所作が列べられて居た。此陳列によつて其頃の我が洋畫界のことが今更のやうに追懷されるのであつた。

矢代君と一緒に見て廻るうち「巴里郊外風景」と題されたものが二十八年の明治美術會出品「秋陽海村に上る」と同圖であることを思ひ出して、私は其題名の誤りであることを告げた。それは矢張ブルターニエのブレハ島での所作であるが、明治美術會出品の方はもつと大きかつた。それはたしか其後一九〇〇年の巴里博覽會へ送られたものであつたらう。原嘉道氏藏の「ブレハの海」岡田三郎氏藏「ブレハの少女」今村繁三氏藏の積藁のある風景なども皆結構なものである。

室の中央の卓に凭つて御菓子など喰べながら、私は頭にまだ繃帶の取れない和田校長や菊地鐐太郎岡田三郎助等諸氏と話して居た。長田秋濤の半成の像を指して、皆は「とんとセザンヌですね」と云つた。「併し其頃久米さんがセザンヌに感心する筈はなく、それは暗合でせうね、其頃はマネ!、バスチアン・ルパージュと云つた時代でしたらう」と云へば和田氏もこれに同じられた。尚私達は久米氏が表紙に「白百合」を描き、なかにピュヴイス・ド・シャーヴアンヌの紹介をされた文學雜誌「白百合」のことを話して居た。それは二三號で廢刊になつたもので今は珍本の一つである。私ももと其一冊を古本屋に見つけて

持つて居たのであるが、今は手許にない。

其處に列べられた作品は、二三の水畫を除けば大抵明治の二十四五年から三十年位迄のものである。此位にいゝ畫を描かれた久米先生がどうし後年畫筆を見棄てられたのか、誰もこれを不審に思つて居る。

もう薄暗くなつた記念室のなかで私は高村光太郎君の作である黑田先生の胸像を見た。又矢代君の室にかけられた同先生の百合の小品をも見た。今夕は久米先生の作品陳列を機として精養軒に舊白馬會關係の人達の會合があると云ふ。

外へ出ると雨がぽつ〳〵降つて居る、そのなかを多分モデルの娘だらう、二三つれ立つて美術學校の門を出て行く。私は其處でタクシを拾つて「雄辯」の美術座談會に出席すべく音羽の講談社へ向ふ。私の前に榛名で描いた油畫が此間大賣捌組合から同社に贈られたのであつたが、私はまだ其どんなに懸けられて居るかを觀に行けずに居たのである。

新築の講談社は話に聞いて居たよりも宏壯を極めて居るが、其受付に居る小僧さん達が依然として坂下町時代と同じ絆纏着であるのを面白いと思つた。私の畫と中澤氏の海景の

懸つて居る貴賓室は木のパネリングをもつた落着いたいゝ室である。其窓から外を眺めるとこれはまた一面の木深い岡で其向うの道場から「メン、メン、メン、ドウ」「メン、メン、コテ」と云ふ樣な劍道の發聲教練が聞えて來る。宏壯な洋風建築に絆纏着の少年雇員と、劍道と、大衆的雜誌と、一寸私の頭のなかで交錯した。（九月二十二日）

旅館

今讃岐の小豆嶋土の庄のすみや觀海樓の客となつて、生憎の小雨に戶外の仕事が出來ない、其閑を利して私は此原稿紙に對つた。窓外には餘島が落着いた鼠色をして靜かに浮んで居る。其靜かさを破つて、料理部の方からは、昨夜から泊つて居る客達が藝者をあげて唱つたり踊つたりして騷いで居る。斯う云ふことが日本旅館の一つの特色である。

東西諸國に旅して私は隨分種々な旅館の經驗をして居る。其處には一長一短があつて、

簡單に一を排し他を擧げることは出來ない。西洋流にあまり構つて貰はない流義が自由でいゝとも考へられるし、また日本流に行き屆く客の世話を必ずしも嫌ふ譯ではない。私はその何れにも適應することが出來る。

亞米利加の大旅館のやうに大抵のことを電話で便じ、洗濯物は扉の內側に入れて置くとそれが外へ示され、默つて居ても洗濯に廻されると云ふ風で、一日でも幾日でもボーイを呼ばずに濟むと云ふやうな、客と旅館との無交渉に近いのも世話がなくていゝと云へないことはない。但室外の廊下は道路に均しいから、扉の開閉其他に餘程注意を拂はないと、惡漢の襲來を受けぬとも限らぬなどゝ威される。日本旅館の習慣を以てこれに對するとんだ間違ひになる。日本流に些細なことに迄ボーイを累はしたりして居ては、其度毎にチップをやらねばならず、向ふでもそれを悅ぶかどうか分らない。

歐洲にも米國流に近いものがない譯ではあるまいが、其大部分はまだ舊風で、佛伊の小さい市などではまだ水栓の室にない處も少くないであらう。ボーイが水差　水を湛へて陶器か金器かの盥と共にそれを洗面臺の上へ置いて行くのである。室に附屬した便所や風呂

などもなく、寢臺側の燭臺を載せる小棚の中に便器が入れてある。

甚だ尾籠な話であるが、私は可なり此便器の使用に慣れ、朝など眼が覺めてそれで用を足して又床に入ると云ふ氣持よさを味つたものである。日本の洋式旅館には此小棚が形式的に具へてあつて、中に便器が入つて居ないのが少くない。西洋人がそれを要求しはしないかと私は曾て或旅館で支配人に質したことがある。

風呂好きの日本人は困るであらうが、歐洲の田舍旅館などではうつかり風呂を要求して飛んだ目に會ふことがある。風呂を頼む人が滅多にないから一人分だけの湯を沸かして一ぱいの風呂を作る。ぐず〳〵して居ると湯が冷えて來て補充の道なく風を引きかねないのである。併し私などはそれ程の風呂好きでないから、可なり長く入らずに辛抱することも出來るのであつた。

昔巴里の小旅館（と云ふよりも寧ろ室貸し）に新來の友人達と泊つて居た時面白いことがあつた。新來の友は日本流に室へ集つては頻りに茶を入れる爲めの湯を請求して居たが、支拂に當つて湯代とあるのに驚いた。事實湯などを頼む客はないので注文の度毎に

一度瓦斯かなどで沸かしては客の許へ運んで居たのであるから其請求も無理からぬことであつた。

それから開放的の日本宿の癖がついて居る日本人は兎角室を閉めることをしなかつたり、又鍵と云ふ觀念が乏しく、バタンと閉つて開かなくなる仕掛の扉であることを忘れてであるから、今時あるかどうか知らない。

西洋流から見ると、襖や障子だけで、閉りと云ふものゝない日本の旅館は不要心に違ひないが、日本旅館の廊下は米國のそれと違つて決して道路と同じではなく、さう無やみとものゝ出入することがないのだから割合に安心である。私は貴重品を預けろと云はれて居ながら、これ迄帳場へ預かつて貰つたことは極めて稀である。尤も貴重品やら大金やらを持つて歩かない爲めでもあるが。

西洋でも日本支那でも私はまだ幸にして旅館で物を盜まれた經驗がない。紙入を鞄へ入れて錠をおろし外出するのを例として居るが、それで間違ひの起つたことが無い。ボーイ

とか女中とかゞ悪いことをしようと思へばいくらも出來やうが、東西ともさう云ふことは割合にない樣である。

多勢の團體が旅館へ泊ると云ふことは西洋にはあまり行はれない。いくら入れやうとしても一室に二三の寢臺を置く以上のことは出來ないのだから、どんな大旅館でも多勢の團體の團體客を收容することは出來ない譯である。日本では疊敷の室へ無理に床を敷けば可なり入れられるので團體客を歡迎するが、團體客の多い季節に獨客が虐待されるのは止むを得ぬとしても、其境遇となつては憤慨せざるを得ない。私は前に陽春奈良へ旅して何處の宿でも「御一人では」と斷はられて大に憤慨したことがある。經營上數でこなす團體客の歡迎もいゝが、獨客もそれと同時に迎へて貰はねば困る。

出入に際してあまりちやほやされることは私のやうなものには却て迷惑でもある。此點は洋式旅館がさつぱりしてうるさくなくてよい。例へば浦郡の常盤館のやうに、夜寢む時枕元に魔法瓶へ入れた熱い茶を置くと云ふやうなことは、如何にも行屆いて居ると、或客からは悅ばれるであらうが、魔法瓶なるものが趣味の上からは實用的に過ぎて面白くない

ども考へられた。

相當の旅館でありながら、便所の閉りが破れたなりになつて居る例を見ることも屢々である。水洗式便所の送水裝置が壞れたりして居ては不潔を極める。

名古屋の或旅館では洗面所の一つ一つにヘーア・トニツクとポマード櫛の類を具へて、一度使つた櫛は別の所へ置かせる設備がしてあるが、これなどは珍らしく行屆いたもので、若し大部分の旅館が斯う云ふ風になるならば、客は化粧道具の用意なしに旅へ出られる譯である。

溫泉

誰も知る通り、世界中に日本ほど溫泉に惠まれて居る國はない。從つて又日本ほどそれを利用して居る國もない。これは確に日本の一大特色である。私は歐洲の溫泉例へばベー

デンベーデンとかカールスベードとか云ふものを見舞はなかつたし、又南伊ナーポリに近いベニヨリのそばを通りながら、其湯を試みなかつたから、日本のと西洋のと比較することが出來ないのであるが、どの道日本のそれのやうに、大きな共同浴槽を設けて特に男女の混浴さへ默認して居るやうな國はないに定つて居る。私は一度その兩性同浴圖を畫にして見たいと思ひながら、まだそれを果さずに居る。それを歐洲の展覽會にも發表したら、人目を聳たしめるに足ると思つて居る。習慣上羞恥を超越して居るところが彼獨逸あたりに行はれて居る裸體生活主義と共通して居るので、混浴を其まゝ描寫しても淫猥感は出ないであらうと思ふのである。無論それは今日日本の展覽會に於ける公表を許されないであらうが。

羞恥に云ふことに關聯して考へられることは、混浴の行はれて居る溫泉に於て、男の多勢浸つて居るところへ「御免下さい」と云ひながら侵入して來る勇氣のあるのは髷を結つたやうな舊風の年增女であり、近代教育を受けた女性達は自から歐洲的習慣に感染して居る結果斯う云ふことを避ける。然るに若しさう云ふ近代女性の既に浴みして居る大きな浴

槽へ男客が入つて來るのを防げなかつた場合、手拭を以て掩ふことをせずに全裸をあらはして立上る勇氣のあるのは、却つて其等の近代女性であるのも面白い現象である、こゝに時代の變遷が窺はれる。近代女性は男性に對して卑屈な態度をとることを潔しとしないのであらう。それは必ずしも羞恥感を失つたのではない。羞恥感のあらはれ方が違つて來たのである。

溫泉は其種類に從つて種々の疾病を治する效能をもつて居るが、健康に惠まれてゐる私は其所謂湯治の意味で溫泉に行つたことがない。だから湯治の經驗に就て語るべき何物をも持つて居ない。畫作の爲めの旅行をする時、出來るなら溫泉に泊つた方がよいと云ふ所から自然に諸方の溫泉を巡つたに過ぎない。特に寒い季節の旅行にあたつて溫泉地が選ばれるのは常識と云つてよい。

私は昨年はじめて北陸の冬を見たが片山津の宿から藍墨色の紫山潟を眺めたものを畫にした。自分の室では、うまく行かないので、人の居ぬ廣間の緣先を使はして貰つた。

福井へ行つた序に芦原の客となつて、其旅館の大さには驚いたが何分にも畫趣がなく、

東尋坊へ行つても雪があつて崖を降りられないので物にならず、去つて三國の宿から折々吹雪にくもる日本海の陰鬱な趣を畫にして見た。

寒い時の溫泉地としては東の熱海、西の別府に及ぶものはあるまい。熱海へは何度となく行つて居るが、早春の別府へは一度しか行つたことがない。其時は由布院にある龜の井の別莊にも一泊した。砂湯と云ふものを私は單に龜の井で經驗したに過ぎないが、海濱で自から砂をかけるのと違つて、其處のは仰臥する身體の上へ、番頭が砂を載せて湯をかけて呉れるのであつた。暖いには暖いが、寧ろ異樣な感じで、それを度々試みる氣にもならなかつた。

早春湯ケ島の宿で猪鍋を食べたことや、あやめの湯を改造した修善寺の天平風呂につかつて光明皇后が御あらはれにならぬかと戯談を合ひ言つたことや、箱根仙石原の俵石閣に新詩社の人々と泊つて歌を案じたり金時山を眺めたり、また風に靡く薄原を分けて湖尻へ出る時の寒かつたことや、はじめて伊東の猪戸に泊つた時の同遊者のうち、三宅恒方博士と中川八郎氏と二人ながら故人となつて居ることや、種々のことが次々に思ひ出されるの

であつた。

スキーに興ずる若い人達に交つて上林へ行き、自分も一寸いたづらして見ようかと思ひながら、偶々浴室で一緒になつた畫友達に、スキーは若いうちのことゝ云はれて思ひ止つたこともある。それは特別に雪の多い年の四月であつたと覺えて居る。

淺間溫泉の西石川の三階から白雪の日本アルプスを眺望したり、春まだ淺い伊香保の木暮別館から落葉松の枯木越しにおの子二子の二山を望んだりしたのも大分古いことになつた。此正月伊香保へ行つた人の話によると榛名にはまるで雪がなくてスキーどころではなく、ケーブルカーの驛から湖畔までをバスが通常の如く通じて居たと聞く。

近頃見た映畫

映畫を見ることは嫌ひでないが、なか〳〵暇もなくてさうまめに見ても居ない。試寫會

にでも招かれゝば大抵都合して行くのであるが。

最近思ひ立つて一夜淺草の映畫街に出かけた所が、恰かも興亞奉公日にあたつて毎よりも人出が多く、これは悪い日に來たと悔んだのであつたが、花月劇場の二階でどうか斯うか觀ることは出來た。

それは「多甚古村」と「格子なき牢獄」の二本と「大滑走」と云ふスキースケートの實寫ものとであつた。井伏鱒二氏の「多甚古村」原作をまだ讀まないからそれと映畫とがどう違ふかに就ては何とも云へない。

田舍の駐在所に居る甲田と云ふ素朴な一巡査の生活を主にしたもので、原作の調子はどうなつて居るのか知らないが、此映畫には相當のユーモアが盛られ、それが適度だから別に反感は起らない。

野外の風景を寫したところは概してよく出來て居る。これに限らず近頃の映畫に於ける風景の撮影は一般に進歩したことを感じる。たゞセツトにはあまり感心しない場面のあつたことを認めざるを得ない。例へば其息子の大學生がカフエーの一女給と結婚しようとして父親の反對を受ける、其豪族の座敷の障子なども變なもので、鎗一筋の舊家と云ふことを示す館の大寫しの古典的なのとそぐはない。それから甲田巡査が行つて竹久千恵子の扮する女給を說きつけるくだりのカフエーも、光線の取りかたが拙いかして、屋内だか屋外だか不明瞭である。一つは日本の木造建築物に柱や桟のやうな錯綜したものが多い爲めに、石造煉瓦造塗壁で出來て居る西洋建築に比べて寫眞にとつた場合重厚な感じを缺くやうになり、又映畫面を大きな明暗に分けることも出來ないと云ふやうな事情もある。

池に泳ぐ鯉、家鴨などで田園的興趣を助けるのはいゝが、家鴨が卵を生むなどと云ふ景物が特に必要とも思はれなかつた。

波打寄する濱邊で二校の生徒達が喧嘩して居る場面、甲田巡査のはからひで笑つて其仲なほりするあたりは自然に又氣持よく見ることが出來た。清川の巡査瀧澤の和尙と藤間の老婆などは先づ無難と思つたが、竹久の女給は大學生を迷はしめる程魅力あるものにも見えなかつた。

「多甚古村」を見たあとで「格子なき牢獄」に移ると、日本映畫がすべての點で見劣り

したが、これは單に此二つを取上げて比較するのは無理であらう。

「格子なき牢獄」ではネリーと云ふ感化院の一少女に扮したコリーヌ・リュシエールと新任の院長イヴオンヌの役アンニー・デュコオいつまでも不良たることを脱しない二少女ルネとアリスとを演ずるジネツト・ルクレル、ジゼエル・ブレヴイル等みなよく其等の役柄を演じて居た。嚴罰主義の恐ろしい監督の "un deux" の號令を受け、兩手をうしろに組んで中庭を行進する少女達は何となしにヴアン・ゴーグの囚人の畫を聯想せしめ、散歩を許されて醫師の家へ使ひに行くネリーを二人の巡査が誤つて追かけるあたりは輕快な佛蘭西漫畫を思はしめた。

嚴罰主義と溫情主義との衝突を意味する、アベル夫人とイヴオンヌとの激しい口爭ひは中々きびしく、斯うなると佛蘭西語も決して優雅一方でなく、可なり强いものであることを感じさせる。

デュコオの顏も上品でよいが、新人だと云ふリュシエイルの深みある表情もなか〳〵に人を惹きつける。誰かも前に評されたが、色男役のギイと云ふ醫者に、感化院の仕事に打

込むやうな眞面目な性質をもつたイヴオンヌの情人たるに相應しくない樣に見える。相應しくないから其愛が褪めて二人は別れるやうになつたのだと云はれるかも知れぬが、其心理的推移の徑路がはつきりしない所がありはしないか。

醫師の家へ使ひに行つてネリーが誤つて醫師の帽子に矢を中てるのは、キユピツドの矢を利かして居るのであらうが、これ等にもウキレツトあたりの佛蘭西漫畫の流れが見えるキユピツトの矢と云ふことを知らずに見ては此意匠は分るまい。

牝牛の御產に立合つた醫師とネリーとの場面は牧歌的であるが、藁の上に身を横へるネリーの樣子には春のめざめが暗示されて居り自から其あたりのカツトを想像せしめる。

私はそれから間もなく、二月三日の夕獨逸大使の案内を受けて、東日の隣りの產業組合中央會館にウフア社製作の「最後の一兵まで」の試寫を見た。

前歐洲大戰の一場面を活演したものであり日本の武士道にも似た獨逸の愛國的犧牲精神の窺はれるものであるが、戰爭映畫としては前にサイレント時代に見た「ビツグ・パレード」などの方が感銘が深かつた。又これは大がかりな古代もので比較にはならぬにしても

彼伊太利のフイルムで「スキピオ」とハンニバルとのザマの戰を取扱つたものなどの方が戰爭の實感に富んで居た。

ヒンデンブルグのやうな老將軍の居る司令部と前線との間の通報などは少しくどいと思つたがこれは淡泊に行かぬ獨逸的國民性で如何ともしがたいものであらう。

廣重と五十三次

「私は幼時から廣重の畫を觀て居り、又可なりにそれを好んで居た。けれども私は決して其蒐集家でもなければ又特殊な研究者でもない。それだから私は考證的方面には全く嘴を容れる權利をもつて居ない。」

私はたゞ今私の前に置かれた保永堂版の模畫五十三次と佐野喜版の中判狂歌入五十三次との二つのシリーズに關して少しく所感を述ぶるに止めよう。此以外の五十三次シリーズ

卽ち丸清版の隷書東海道及江崎屋版の行書東海道等と前掲二種との比較研究をすることの出來ないのは不便であるが、それは他日に讓るより仕方がない。品の少ない爲めに隷書東海道の一揃へは今最高價であることを或蒐集家から聞かされた。

保永堂の模繪五十三次が廣重の出世作であると同時に彼れのあらゆるシリーズのうちで最著れて居ることは事實であるが、それを彼れの最傑れた作であるとすることに私自身で異存をもつて居る。或は此異見が他の人の口からも既に發せられて居るかは知らないが、一般にはまだシリーズが彼れの傑作であると信ぜられて居る樣に思はれる。

保永堂版の五十三次に北齋英泉等の影響のあることは止むを得ない。先進の影響があると云ふのは自然のことであつて必ずしも責む可きではない。たゞ私は純粹な畫家的の立場から其シリーズ中の或ものに構圖の散漫なのがあり、人物と風景との比較を失して居るのがあり、活動を畫いて失敗して居るものがある等のことを指摘しなければならぬ。

廣重は活動の畫家でなく、どちらかと云ふと靜止の畫家である。彼れの畫の特色は靜かな寂しい處にある。例へば『四日市』の圖に一旅人が風に飛ばされた笠を追つて行く處が

描かれて居り、『宮』の夜景に何か神事でゞもあらうか繩を縛りつけた馬を驅けさせて居る狂奔の諸人が寫されて居り、又『草津』の前景に早打を飛ばし　行く駕籠かき共が描かれて居るが、何れもあまり感心した出來ではない。點景人物が小さければ眼立たぬが、大きくなればなる程素描の不正確を示すやうになる。さうして其處には何だか卑野な彌次喜多趣味が見えるやうになる。「御油」の晩景に旅客の袖を引くおじやれの如きも其一例である。

人物其他近景の物件を大きく出して其向ふに小さく景色を見せる方法はよく北齋のやつたものであるが、北齋はそれによつて奇異な效果を收めて居る。廣重もそれを學んだかと思はれるが到底北齋には及ばない。足場のかゝつた城の櫓を右手の前方に出した『吉田』とか、土橋を大きく前方へ出した『掛川』の如きは北齋趣味のものとして比較的成功して居る方であらう。

構圖の散漫な例としては『水口』『鞠子』『見附』等がある。『見附』の前方に在る船は其上に居る二人の男と共に拙い。『鞠子』は一茶店と花樹とを曙色の空へ出したのである。

が最平凡にして且散漫である。

晩靄か朝霞かどつちだか分らぬが『三島』は一寸變つたことがしてある。駕籠をかく男、馬で行く人、歩く人等の一群をはつきり一輪廓畫で前方へ畫いて、彼方神社の鳥居燈籠家屋樹木人物等をすべて影畫で出して居る。併しこれも大した效果を擧げずに全體を散漫ならしめて居る。

さう云ふ譯で保永版の五十三次は傑作ぞろひではないが、そのなかゝら幾枚かの佳作を擧げることは出來る。普通『庄野の雨』と『蒲原の雪』とが群を抜いたものとされて（それは西洋人の擇擇に基いたものであらうが）居るが、其以外にも幾枚かの佳作はあるのである。雨景は庄野ばかりでなく『大磯』『土山』にも描かれて居るが、私の考へでは此二つを『庄野』に讓らぬ出來であるとする。『庄野』と『蒲原』との市價の馬鹿々々しく吊上げられて居ることなどは私等から見ると滑稽の感がある。

大磯には如何にも海邊の雨の感じがある。これは色版の數も極少く、墨の濃淡四度と黄赭、青の三色とで出來上つて居るが構圖も明暗もよく整つて居る。

『土山』は大雨のなかを、雨具に包まれた大名行列の先供が雨量の增えて瀧をなして流れる小川に架けた橋を渡つて居る處であるが、これは上部に樹の根を見せ下部に人の足を隱したところに働きが見える。

『品川』『程ケ谷』あたりも街道の家並を畫いたものゝうちで優れて居る。家根の勾配を急に畫くのも北齋の影響であらうか。『大磯』の家も矢張同じ傾向に屬する。

『沼津』は面白い着眼である。狗畔の道の疎らな並樹の下を長幼の巡禮女と天狗の面を背負つた道者風の人物とがとぼとぼ歩いて行く。白壁の幾つかゞほの白い町の上に大きな滿月が今のぼりかけて居る。これはまことに詩的な場景である。月と天狗の面との對照が面白い。全體の構圖に就ても申分がない。

『小田原』『金谷』等の川越しの鳥瞰圖は多くの場合廣重の成功する所である。のんびりした河原の曲線と平遠な山の線とに、往昔の旅行樣式の點ぜられたところがなつかしい。川越し人物を大きくして前景に收めた『府中』も惡ふざけがないので快く見られる方である。

『箱根』に其奇聳な山の描寫に北齋を偲ばしめるが、これも佳作のうちに數へていゝ。其處に火山岩の露出が觀察されて居るのもいゝ。『蒲原』の雪は無論惡くない。要するに五十三枚のうち約五分ノ一、卽ち十二三枚位が私の趣味に適つて居る。これは併し人々の趣味の異るに從つて撰擇も違ふ譯ではある。私の撰んだ中でも『程ケ谷』『大磯』『箱根』『沼津』『掛川』等は北齋の感化が善い意味に表はれて居る方のものであつて、結局此シリーズには廣重の本領がまだ十分に發揮されて居ないと云ふことになる。

さて佐野喜版の中版五十三次に轉ずると、どう云ふことが云はれるであらうか。私は此シリーズの刊行年代を明かにして居ないが、人物の形などで見ると行書五十三次などの時代に近いのではないか知らぬ。兎に角廣重一家の畫風がもうすつかり出來上つて、北齋其他の畫家の影響が痕跡を絕つて居る。

判の小さひ所爲もあるかは知らぬが此中判五十三次は概して構圖が緊縮して居る。それから遠近法の無理がない。前景中景から遠景に至る關係の辻つまがよく合つて居る爲めに今日我々が觀ては鑑賞を妨げられるところが少い譯である。保永堂版のに畫かれた點景人

物は多く頭がちで圓つこいものであつたが、此中判になつては其身長が著るしく伸びて歩みの足どりが自由になつて來て居る。

例へば保永堂版の『吉原』では、松並木の街道の幅に比して、三寶荒神と云ふ風に旅客を載せた馬があまりに大き過ぎて殆ど松とすれ〳〵になつて居り、とても通れさうもなく見える、そんな比例の間違ひが此中判の方には跡を絶つて居る。今度は寧ろ道路の幅が廣過ぎる位にさへなつて居る。さうして窮屈な感じなどは跡形もなくすべてが廣々として氣持がいゝ。

『神奈川』の棒鼻、少し高めの地平線に左りへ高みとなる街道、その崖ふちの黑い樹木、右の下端の掛茶屋までよく纒まつた構圖である。『藤澤』も保永堂版のより此方がいゝ。鳥居と家屋との遠近なども理屈に合つて居る。『箱根』これは傑作の一つである。箱根八里の夜道を松火を點じて二挺の駕籠が上つて行く。構圖と云ひ氣持と　ひ間然する所がない。『府中』の廓の賑ひも其變化ある點景の小人物を以て面白い圖をなして居る。こゝに歩いて居る人物は江戸名所の堅圖に此作者の畫いた猿若町に於けると同じ氣持のものである。

それは混雜して歩いて居る、けれども決して相妨ぐることなく、各が平氣に一つ空氣のうちに棲み、極めて、節奏的な群をなして居る。

此シリーズには左右から山が出てそれが街道を挾んで居る樣な相對的な構圖が比較的多い。『戸塚』『蒲原』『岡部』『見附』『藤川』等が皆それである。それから『藤枝』や『日阪』のやうに同じ形の平行した繰返しによつて節奏の與へられて居る例もある。『藤枝』では右手の假橋の杭と左り手の百はれて川を越す人の群とが相應じて居り、『日阪』では人家の四軒と擔夫の五組とが相應して居る。而して之等はいづれも佳作である。

『嶋田』『金谷』の大井川川越しやら『掛川』の土橋など保永堂版の其等に劣らぬ出來である。掛川の橋を渡る千手觀音の物乞ひと何かの建立勸請の僧とはいゝ點景である。

版畫の色調は必ずしも作者其人の嚴重な監督のもとになつたとは云へず、時とすると刷工の頭の働らきや、其用ひた繪具の性質やらに歸せらる可きものであるから、あまりデリケトな點に立入つて廣重の色彩感覺を云々することは間違ひを來す虞れがある。

けれども此シリーズのうちで『赤阪』の晩景や『土山』の雨景などの配景の美しさを默

過する譯に行かぬ。『土山』には雨の線が引かれて居ない。併しそれは如何にも濕つぽい、しと〳〵降りを表はし得　妙である。

保永堂版の場合にもしたやうに廣重は彼自身が目擊した御馬献上の光景を『地鯉鮒』の點景として畫き入れ、また石部の宿りにお半長右衞門らしい人物を點出することによつて輕達ユーモアを示して居る。

繪　雙　六

私達が子供の時分新春の弄びとした繪雙六は代々の使用を經て破れたり手ずれたり散々になりながらまだ殘つて居る。今それ等を引出して見ると思ひ出の盡きないものがある。

繪雙六は廻り雙六式のものと、飛びとびに上つて行く出世雙六式のものとに分れるが、昔のはいづれも木版の色刷で、其大さには大錦の四枚つなぎ等の種種があつた。今でも子

供雜誌の附錄などに趣向を新たにした雙六は行はれて居るが其藝術味に於ては到底昔のものに及ばない。

家庭の雙六中最も古典的で大袈裟なのは四尺四方もある「官職補任雙六」と云ふのでこれは何時頃の版であるか法眼周山の筆と記してあり、木版墨刷に筆彩色が加へてある。それ程部數の出たものでもあるまいから、これは相當珍品であるだらう。周山は吉村周山（探仙齋）と云つて大阪の畫工であつた。

骰子も普通の一六でなくこの雙六には祚品位階等級の六つが各の面に書かれたものが用ひられた。例へば松と萩と水とが畫かれて居る其振出しに記してある樣に、祚を振つて大舍人に、品を振れば兵部少丞に、等を振つて治部少丞に級を振れば神祇祐に任ぜられるの類で、頭、亮から大輔、卿、大將大臣と、段々上へ行くに從つて位が高くなつて居る。太政大臣が最上部の中央に居る。これは骰子が六かしく又有職ものである所から到底兒童の弄びには適せず、從つてよく保存されて居る。裏打して別に付けた其表紙繪は、署名はないが父鼎湖の筆に違ひない。

世雙六として常に面白く出來て居り、出世と零落との徑路が極めて自然的に仕組まれて居る一枚があつて、それは恐らく私の祖父頃の代のものであつたと思はれるが、どうしたものか今見當らない。

芳年の畫いた「開化黒白出世双六」は明治十一年の出版であるが、これは風俗史の資料としても中々面白いものである。

黒白の意味は勉强して居る青少年と竹の皮包みの握り壽司に酒を酌んで居る道樂書生とを配した其振り出しにもあらはれて居るが、骰子を振つて先づ士族、巡査、兵隊、大警視、水夫、懲役等に行き、それから外務卿、文部卿、華族、元老院、參議等に出世するのであるが、圖中の巡査はまだ帶劍せずに棒を小脇に抱へて居る。最も面白いと思ふのは十年の西南の役後間もない出版であるために、陸軍大將や參議から賊徒に移ると云ふ仕組があることである。西鄕等の例なしに斯ういふ奇拔な徑路は考へられるものでない。元老院から懲役へ行く筋もあるが、之にも當時の實際の例が參酌されて居るのであらう。懲役場の處に「此處で二廻り休」となつて居るのも極めて自然であるし、華族が馬車に乘つて居る

其背景が舊新橋停車場であることも記念的である。

「新版畫合源氏雙六は」一陽齋豐國の筆で、彼「田舍源氏」とほゞ同代に出來たものであらうと察せられる。振り出しのところには石山の紫式部もどきに一人の女が机によつて文を案じて居る。「上り」には注連飾りに鏡餅があり光源氏が盃を手にして居る。五十四帖の一とこま一とこまには美醜貴賤の男女の半身が畫き入れられて、それに因む和歌が添へられて居るが、骰子を振つての動きにはそれ程の興味が伴はない。

一鵬齋芳藤の筆になる「娘のむこえらみ息のよめどのみ緣結婚禮雙六」と云ふ小判の墨刷のものが家藏中にあるが、これは恐らく墨版の校正刷で、賣出したものには色が入つて居たのであらうと想像する。振り出しが「仲人相談」で上りが新郎新婦になつて居ることは當然であるが、右側に男、左側に女を對立させ、またその男女に美醜いろ〳〵を畫き分けた所漫畫的の興味がある。

男女のうち滿足なのは「でんぼう男」とそれに對ひ合ふ「箱入娘」だけであり、あとは「にやけた男」と「いやらしい娘」、「きざな男」「惡じやれ女」、「しやれ男」に「おしや

れ婆さん」など人を笑はしめるものが多い。「ゆひなふ」と「荷物」の所には「相談がもどつて振り出しへかへる」とか「箱入娘」の所に「相談がむつかしくて一廻り休」などの趣向がある。

人形町の錦重堂から出した「わり出し雙六」と云ふのは、芝居の土間桟敷のわり出しを趣向としたもので、畫は歌川國廣の筆である。上りは狐忠信の所作をやつて居る舞臺で、其役者兩人は師豐國が補助として畫いて居る。入梅竹鶴龜其他いろはなどに分けられた場席へ、振られた骰子に從つて轉々して行くのであるが、大入場の「での百」と云ふのへ行くと、一を振つて茶屋へ戻らぬ限りしまひ。其處に居坐らねばならず、さうして上つた人からはうびを貰ふことになる。雙六には大抵菓子などを賭けて弄んだものであるが、「での百」へ行つて御菓子を福分して貰ふのがいやではなささうなのに、子供心は其大入場へ閉ぢ籠められて活動を封じられるのを潔しとしなかつた。

國廣の畫はあまり品のいゝものではないが、その頃の刷り色は明治以降のものより品がよかつた。土間や桟敷で菓子や壽司や料理を食べながら芝居を觀るなどと云ふ經驗を

今の若い人達は持たないであらうが、此繪雙六によつても今無くなつた其風俗は窺はれる。

初代廣重の筆になる「江戸名所書分壽語路久」には飛鳥山、芝浦、目黒、海晏寺、高輪梅やしき、茅場町、御茶の水、金龍山、淺茅ヶ原、九段坂、柳島、根岸、山谷堀、枕橋、首尾松、深川、衣紋坂、湯島、日暮里、猿若町、兩國、新川の二十三ヶ所が畫かれて居るが、根岸の御行の松や淺茅ヶ原や、芝居のあつた猿若町、衣紋坂などもう面影もない。現に私の住居に近い日暮の里の花見寺の跡は大橋新太郎氏の有になつてしばらく空地となつて居たが、今其處には日暮里第一小學校が建てられて、花見寺の昔を偲ぶ何物もなくなつた。上りは新吉原仲之町で新春盛裝の花魁と禿、羽根をつく藝者な　が畫かれて居る。吉原を上りとする事などを昔は誰も怪しまなかつたし、この雙六を弄ぶ私達も無論何とも思はなかつた。金龍山と根岸と衣紋坂等に上りの可能性があることは、地理的に首肯かれるするが大體に於て其動きに地理的の考慮がある譯ではなく、畫家に題された俳句は其頃の月並なものばかりである。

私の子供の時代、卽ち明治の二十年代に出來て、私達が母親に親しく買つて貰つた雙六

の類は月耕、周延等の執筆になり、德川風俗や明治風俗を題としたものであつたが、それ等は大錦判六枚を繼ないで十二圖位に粗く區分された、弄ぶには一向面白くないものであつた。それで私達は寧ろ古くから家にある幕末ものなどを使つて居た。

中心の目的地を上りとし、振り出しの起點から賽の目の數だけを歩いて其處に達する廻り雙六には競走の興味があるが、これは貞享頃に作り出された道中雙六を起原とすると云ふ。江戸の日本橋を振り出しに、東海道五十三次を京へ上る廻り雙六が最も普遍的であつたが、明治になつては鐵道雙六などの、之を範とした新趣向のものが續出した。

旅行家の先覺松浦竹四郎はよく自から木版の道中雙六を作つては知人に配つたが、これは兒女の弄びとなるのではなく、全く趣味的の配りものであつた。

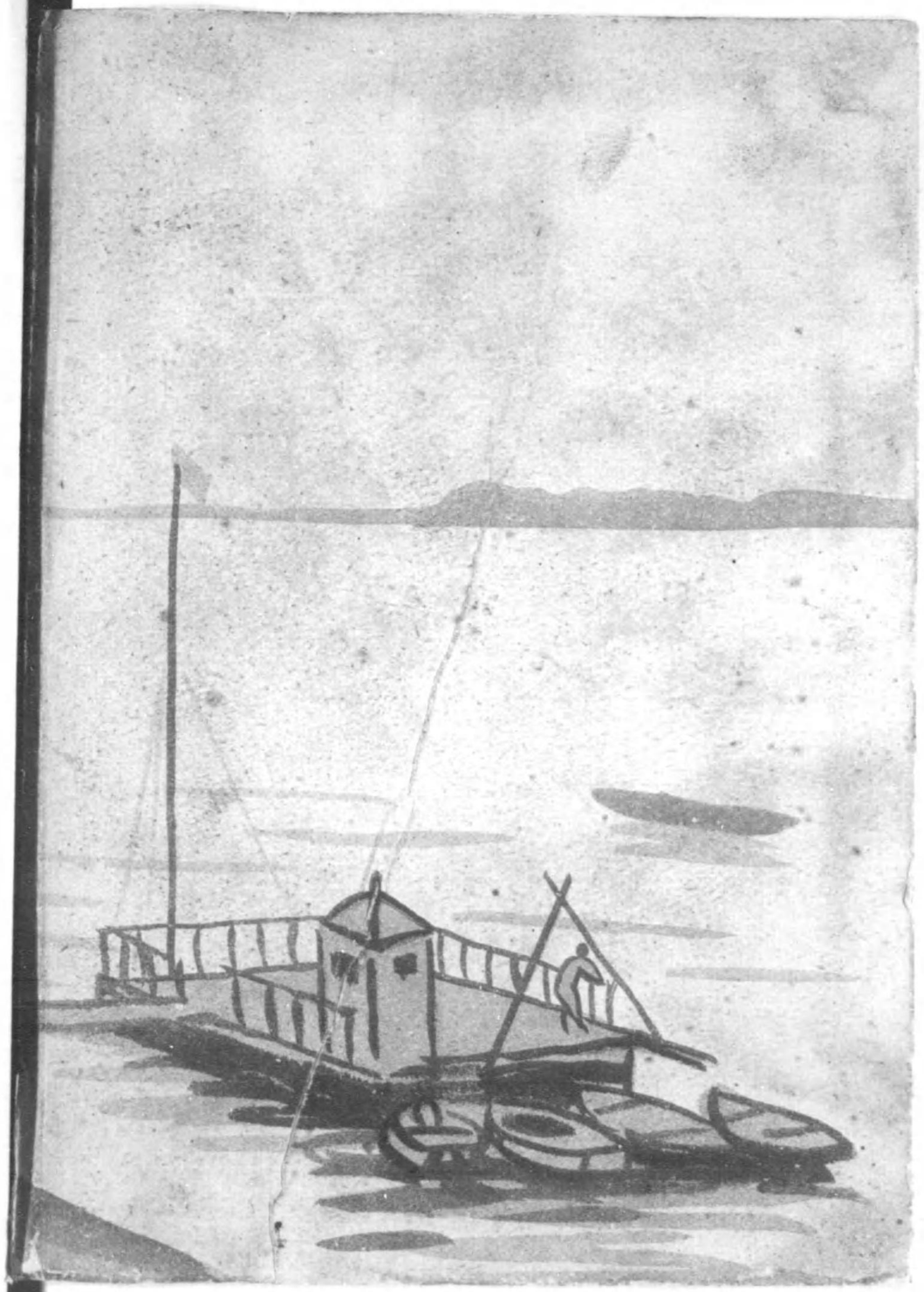
昭和十八年十月二十日印刷
昭和十八年十月三十日發行
（初版三、〇〇〇部）

定價 二圓八十錢
行爲稅相當額 十錢
賣價 二圓九十錢

著者 石井柏亭
東京都麹町區有樂町一ノ十三讀賣新聞社別館內
發行者 田中啓作
名古屋市中區老松町五ノ二
印刷者 西雪勘三郎
名古屋市中村區井深町三ノ一一七三
印刷所 千代田印刷株式會社
中愛二四〇
東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給所 日本出版配給株式會社
東京都麹町區有樂町一ノ十三
（讀賣別館內）
發行所 株式會社 啓德社
振替 東京四九八四二番
出版會々員番號 一〇九〇二一番

出文協承認番號
ア460618

著者略歷
明治十五年三月二十八日東京ニ生ル。
父晁湖ニ日本畫ヲ、淺井忠ニ洋畫ヲ學ブ。
歐洲遊學二回。
文展、二科會、一水會ニ作品ヲ發表。現在帝國藝術院會員。

976
152

終